
放課後に帰宅部で青春で

時津風洋々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

放課後に帰宅部で青春で

【ZINE】

Z0406V

【作者名】

時津風洋々

【あらすじ】

世界は広くて
僕はとても高校生
…とても高校生？

日夜、青春の淡い1ページ

もといラブコメを体験するために奔走しているのであった

繰り返す

これはラブコメに憧れる僕の日常であつて
決して、SFやファンタジー・バトルが繰り広げられるようなモノ
ではない！！

いちじが100%になりそうな展開を希望していた僕のほんのわず
かなお話

他のサイトでも掲載しています

青春の輝きとは傳い

春の匂い

桜が咲き誇る

入学式

田舎とちよつとだけ発展した都會が行き交うそんな町並みを駆ける

小さじ頃から見慣れた桜並木がキレイな高校
舞台はついに高校まで来た…

春の描写以下略

僕は人とは人とは違う

そんな事を思つているとかいないとか
思春期の誰もが考えるあるいはそんな願望を胸に秘めている

思春期といえばH口に興味を抱くと思つ

もれなく僕もそんな一人だ

『H口に興味のない男子はいません!』

…いや…男なら分かつてくれるよね?

甘い匂いのする女の子 ついついはの甘酸っぱい思い出ひたるる高
校生になる

少年誌のハーレムラブコメは僕の人生の指標だ

女の子とあんなことやこんなことをすることに対する限りなく積極的に行動してきた事だらう

小学生の時は幼馴染みを作りうとひたすら女子の側をうつりついていた中学生は体育倉庫で閉じ込められることを期待して体育倉庫に引きこもつてみたり思った

以下略

まとめると

すべて失敗した

しかし、今日にいたるまでくじけた事などない

そこが

僕が人とは違うと言える所だ

いや、大なり小なり人は積極的だ
身なりを気にしたり

異性に積極的に話をかけたり

フフフ…

僕からいわせれば全然合格点とはいえないな

僕はわざと遅刻ギリギリの時間に出発して

こうやって食パンをくわえながら登校しているということだ

パンに塗るものは、バターにするかジャムにするかで迷ってしまった
既に勝負はそこから始まっているかもしないからだ

一切のぬかりなく恋愛小説のよつこ…学園ラブコメのよつこ…

僕はベタが好きだ

お約束と呼ばれるヤツだ

『王道なくして邪道はない！…』

熱湯風呂が田の前にあれば身構えて、絶対に押すなよと誓つてあらわ
やめひはやれつてことだ
こつやつて王道を一つずつ埋めていけば
人生は必ずラブコメに近づくッ…！

そつこ…既に曲がり角を何回か通り過ぎた

今日は特別な日なので

曲がり角を多く使うルートを選んでいた

しかしそれももうすぐ終わりに近づいてしまって…

次の曲がり角を曲がればいぢパンチの可憐な女の子とぶつかつた
りする…

おおおおおう

そこから僕の新しく甘酸っぱい高校生活の第一ページが刻まれる訳だ

よし…！

次の曲がり角から輝かしい青春がはじまる…

オウフ…！

「…………ア？ オイ……一ーチャンなにじとんじゅーーー！」

……え？

「人にぶつかッとして謝罪の言葉もナシか？ アあ？」

……え？ ……え？

「コイツ、ガンつけてまスゼ？ ヤツちまいますか？」

……ちょっと待ってほしい

可憐な女の子との出会いを期待して
いかにもな連中とぶつかってしまった

これはギャグマンガやコメディのベタだ

希望に満ちあふれた高校生活でフラグをたてすぎた一般高校生にありがちなパターンだ

「……まるで僕じゃないか！！」

「……ア？ お前何言つテんの？」

しまった。心の声が漏れてしまった

しかし複数の典型的な不良と呼ばれる人種に囮まれるとは…
所々に無駄にカタカナが入ってるあたりで教養のなさが出ている…
汚物と呼ばれて消毒されてしまいそうな勢いだ

これはこれで漫画の王道とも言えるだろう

イヤイヤイヤイヤイヤ…

違づー・違づー！

それは大体の場合はあまり良い方向に向かない気がする
これではどこかの世紀末救世主に助けられてしまう気がする
(俺は名もなき村人Aかつ！？)

少なくとも僕が望むようなラブコメにはならないであらう

フラグ

「おいーーいい加減にシヤガ… フラペチ… ッーー！」

そう、胸ぐらを掴まれそうになり、今にも殴り掛かられる瞬間
相手がコーヒー屋にありそうなドリンクの名前を叫びそうになる途中

空中に吹っ飛んだ

…まさかのバトル展開？

現実問題

人間が空にふつとぶことなどない

それこそ漫画の読みすぎだ

「なんだとメニ…ザケんなッ…いきな…トリー…ダーットバコ…
ツ…！」

次は、はつきりと見れたぞ
なぜ吹っ飛んだ時にカリブ海にある共和国の名前からしき言葉を叫んだのかよく分からぬが…

もっとよく分からぬのは

映画とかでしか見た事ないような

黒人で黒スーツを着た、屈強なスキンヘッドのおっさんがいた何か、イルビーバックとか言いそくなぐらい屈強だ

僕の世紀末救世主は修羅の国から来たような国籍不明の男だった

ここまで登場人物全員男

「オー、少年タテマスカ？」

そつと手を差し伸べられた

ふむ

この人は味方のようだ

が、しかし

「ドウシマシタ、少年エース… イヤ思春期迎エタモンキー ミテーナ
顔シテ」

こいつ外人面して日本ギャグかましてきやがる
う…うさんくさすぎる…

助けられたことは事実だ

素直に手を取る

「はは… ありがとうござります。あの…」

「オオ、名前ヲ言つてお仕合シタつー！ワタシは田中一郎デース」

…嘘だつ…

一分の望みに賭けてコイツが田中一郎だとしても
タアナツカ・イティーロとかそういう名前だろ…！

「ありがとうございます…その…田中さん」

しかし、そんなツッコミが出来るほどの余裕は既に僕にはなかつた

「イイデスヨー。オット、ボスの晴れのカドデをオイワイに行かな
ければナラナイノデシタッ！これにてシツレイイタス」

黒人の…いや田中さんは僕の前から走つていった。

つか、足早いだろ…

こうして僕は可憐な女の子との出会いはなく
謎の黒人…いや、田中一郎さんとの出会いを果たしたのであつた…

迷ひ事は悪い事ではない 逃げちゃダメだ 立ち止まれ

「これはヒドい

あんまりじゃないか

入学初日に遅刻してしまった…

入学式遅刻ギリギリといつ時間を選択した僕も悪いのは認めよつ

でも不可抗力というものだよ先生

不良に絡まれて

謎の屈強な黒人…いや…田中一郎さんが不良を圧倒的な武力にて退治して助けてもらつた

「…信じられるかつ…」

「ん?何か言つたか?」

おっといカンイカン

また心の声が飛び出してしまつた

「…は素直に反省といつ気持ちを全面に押し出すついで…」

- 職員室なう

頭で分かっていても心で納得出来ていないとすぐに表情に出てしまつのが思春期の所以だろう

教師という絶対的な大人には見抜かれてしまつ

「しかし…入学式で遅刻なんて今時流行らんぞ」

良かつた、気がついていそうだつたけどスルーしてくれた…！

でも…

うう…好きで遅刻したわけじゃないのに…

本当なら遅刻ギリギリで

教室内でばつたり朝にぶつかつた女の子に出くわす予定だつたのに…

…予定だつたのに

「…まあ、今日は初日だ。浮かれる気持ちも分かるが今後は気をつけるように。これからホームルームだ。お前は戻つていいぞ」

…先生…！…ありがとう…！

こういう時は大体、反省文とか色々これがあるのかとばかり思つてたよ…！！

先生が担任で良かつた…！！

「しかし…担任の氷室先生も大変だな。お前みたいな生徒が受け持つだなんて。いや…氷室先生が担任だということでお前にも同情するよ」

おおつと

ここで新事実発覚

この仏のような先生は担任ではないというのか

「これはイカンイカン。僕の早とちりみたいだった

…ん?

だったら何で、この先生は私を注意しているのだろう

「他の先生は入学式に行つてゐるから残つた私が注意してゐるが、普通は担任がやることだからな。良かつたな私で」

まるで僕の心の声を聞いてくれたかのような説明をありがとう

ともかくこれからホームルームらしい

本番はここから

俺の戦いはこれからだッ！！

「それじゃ、先生。失礼します」

先生にそいつ言つてから私は廊下に出た

さあ、クラスに向かおう。

クラスに向かおう

クラスに向かおう

…クラスに向かおう

ここにでみなさん新しい事実を伝えよう

クラスが分からないつ！！

これぞ叙述トリック

イヤイヤイヤ

何も叙述もトリックもないよ

普通はプリントなり何なりで分かるんだろうけど
とても残念な事に僕は初日の入学式遅刻という大罪の身分だった

今更、戻つて職員室で聞き直すか…？

小さい頃から見て育つた高校

知らないことはないと思つていたが

井の中の蛙だつた

さすがに内部構造までは把握してなかつたし
それ以前に自分が属するクラスが分からない

そして入学式が終わるか微妙な時間帯
人がいない…

たどり着くのに必要な情報が圧倒的に足りていなかつたのだ

これは砂漠で地図も方位磁針も持つていない状況に等しいのだ

いや、言い過ぎた。等しくはないかもしれない

しかし、僕がそれくらいの気持ちでいる」とは云わっているだらうか

「いや、誰に伝えているんだよつ……」

「なんやーびつくりした。何や自分、いきなり大きな声出して……」

ふむ、私の心の声が表に出る時は必ず誰かに聞かれているな

…ん？

…誰か？

これはこれは…

誰かがいたつ…！

「変なヤツ発見。人の顔をまるで砂漠でオアシスを見つけたヤツみた
いな顔して見るなんてどうしたんや？」

ええ、その通りです

アナタは砂漠で見つけたオアシスみたいな存在です
リアムとかノエルとかそんくらいに偉大です…

「あ…あ…あのぉおおつ…！」

「なんやねん…！ そないにデカイ声出さんでも聞こえてる…！ 聞こ
えてるから…！」

「スイマセン…不安で心細くて…」

「何や、その会いたくて震える乙女みたいな心情は…」

「じゃなかつた!すいません。大変にアホな質問をしてしまいますが…」

「ん?」

「僕のクラスはどうでしょう?」

……?

おおっとこへりテンパつてるとほ言え凄くバカな質問をしてしまった

そりや、こきなり初対面のヤツに自分のクラスを聞くバカがどこにいるっ!!

「…ここにましたっ!!」

思わず口に出てしまふほどだつた

これはもはやバカと言われても仕方がない…

僕がこんなこと聞かれたら、知るか!!…と叫つてやるとこだまつたく…せめて違う聞き方があるだろっ!!

「…B組や」

「…え?」

「だから、B組やる自分。」

「ちよ、ちよ……つとーな……なんで知ってるんですか？」

「いや、聞いてきたの自分やろ? 知ってるから答えただけやの」「なに言つてんの?」

「コイツ……狐みたいな顔しやがつて
本当に狐に包まれたみたいな気分だ

うん、冷静に見てみれば見るほど狐ヅラだな「コイツ
「ちなみに狐には包まれんで、包まれてどないすんねん。正確には
つまれる。や」

「読まれた!! 心を読まれた!!」

「何や、ほんとにそんなこと考えてたんか」

恐ろしい…

「さて……自分のクラス分かつた事やし、行こか

…?

「ほら、自分のクラス! いや正確には俺たちのクラス…やな」

なんと、クラスメイトだったのか…!
これは盲点盲点

…?

いや、クラスメイトでも普通顔は分からんぞ

同じ中学校とか小学校なら俺だって知ってるはずだし

本当に狐みたいな顔しやがつて：

「まあ……なんで自分を知つてたか言われたら……そりゃ……」

- - -
あきんど
商人の企業秘密や

はあ……今日は色んな出会いがありすぎた……

やるこことなすこと

ことじとくわづブロメ展開ではなく

違つ展開に向かつていつてゐる気がする

「ほり、じいがB組や」

様々な思考が渦巻いていると

クラスに到着したみたいだ

「もひ、みんな戻つてきると思つで」

僕たちは廊下

少しの歓談と新しい出会いなのか緊張した雰囲気が教室の方から伝わってくる

「ありがとう…えっと…」

「神山」

「**神山**」
かみやまこなつ
稻荷や

「神山君ね…」

「いなじちゃんって呼んでほしにな~」

「呼べるかっ…」

もつ少し頑張れば漫才が出来そうな気がする
とか思つてしまつたが会話も早々に
さて…

気を取り直して…

ドアに手をかける

次こそ…

僕の戦いはこれから…

- - - オーッ…今朝のモンキーボーイ…

戦いはこれからですらなかつたのかもしけない…

春は出逢いの季節 それは日頃の行いを見ている

オーッ――今朝のモンキーボーイ――

ふう――

今朝のモンキーボーイ?

僕は猿なのか?

何を言つてゐるんだ

教室を見渡す

神山君は足早に自分の席に着席

「ナニシテンドヨ――モンキーボーイ――コツチダヨ――ベイ――」

明らかに不釣り合いな筋骨隆々の男がいる

「…オオイ――」

田中――

今だけは呼び捨てにする――

僕は決めた

オイ田中――

恩人に向かつて言つのもあれだが

… なんでここにいる…

机とボディのサイズが違うすぎるだろ…！

漫画で比率を間違えて人を大きく描きすぎちゃったみたいになつて
るよ…！

なんで誰もツツコまないの…！

黒スーツから制服にいつ着替えたの…？
似合わないにもほどがあるぞ…！

「ボス…！コイツデス…！ワタシがタスケタモンキーデス…！」

…ボス？

ボスがいるのか？

この際、モンキーはどうでもいいよ
好きに呼んでくれ

ボスってなんだボスって
高校生だぞ…？

日常会話でボスなんて言われているヤツはそうそういないぞ
どこの国だよ。

こんなVIPのボディガードみたいなヤツを従えるなんてどんな男だ

マフィアのボスか…？

それともハリウッドの俳優様でもいるといつのか！？

とにかくとんでもない男に違いない

僕の好奇心はそのボスが知りたくてたまらなくなっていた

「…おうイチよ。オメエも人助けをするようになつたか…。カツカツカ立派になつたもんだ！！」

「イエス！！ボース！！ボスにホメラレテ光榮デース！！」

僕の位置からちょうど死角

巨大な身体に隠れるように座っている

僕はそつと覗いてみる

「おう。にーちゃん。イチがいて良かつたな。入学早々ボコられて
ちゃ幸先悪いかなー！」

ふむ…文字では伝わらないだろうが
僕はとても驚いていた

とても貴禄のある想像していたボスとは
似ても似つかない

そして

今日で一番

氣だるげに机に足を乗せる

口には… 餅？

いや… そんなことせどりでもいい
つまり何が言いたいのかといつと

ボスは女の子だった

ここまで僕の気持ちを中心に書き連ねてきたが
やっと女の子が来た

…僕の求めるような可憐な女の子とは違うわけだけど

そうだね

みんなに伝わるよう

どんな女の子か説明しよう

金色の髪は腰元くらいまで伸びた
まさにサラサラヘアと呼ぶにふさわしい髪だ
染めてるのか?
いや地毛っぽいぞ

それとしてもキレイな髪だ

僕はいまだに教室前方の入り口から動いていない訳だけど
教室の一番後ろにいる 彼女からイイ匂いが漂ってきそうだ
色白でとても気だるげ

ハーフなのかなんなのか

とても日本人離れした顔立ちをしている
スラリと高身長 モデル体型つてのは「いつこいつの」とをこうんだ
ろうな

なぜか私服

ダルダルのTシャツにスカジャン

ダルダルのジーンズ

スニーカーだった

「安心しろよ。室内用のスニーカーだ！」

また心の中を読まれた！！

「カツカツカ！女に興味がある年頃だもんな！！無理もねえよ！！」

…なんといつか

見た目は可愛いんだけど
いちいち豪氣というか
女らしくないんだよな

なんなんだろう

これはこれでアリなんだけどもつたいないと
雰囲気はお嬢様っぽいのに

つていうか制服着てこいや…

「俺は流川みどる。^{るかわ}流川じゃないぞ！^{ながれかわ}流川だ。バスケは得意じゃね
えからー！口口シクな猿！！」

「えっと…田中…君?に助けていただきました。ありがとうございます。」

「おう!礼はイチに言え!困ったことがあつたら何でも言へよ!」

う~む

男らしい

ボスと言いたくなる気持ちもなんとなく分かる気がする

猿とは僕のことだろ!?

田中H…

「カツカツカ!学生つてのも悪くはねえなイチよう?」

俺は、もう一度ここからやりなおすぜえええ…!..

「ボース!!ワタシはナニガアツテもボスに一生ツイティクト決メタよ!!ボース!!」

雄叫びだ…

立ち上がってかと思えば

教室の窓をバーンと開け外に向けて叫んでいる

色々と述べる部分はあつたけど
どうやら興味の対象が僕から移ったようだ

田中君のスキンヘッドをベシベシ叩きながら叫んでいる

普通ならあんな屈強な男は絶対に友達になんねえよ…
なんなんだよ…

さて

気を取り直して自分の席に座ろうつじやないか

えっと座席表座席表…

…

…ひつ

凄く嫌な汗をかいた

僕が何に気がついたかというと

クラス中からの視線だ

そりゃそうだ。

いきなり入ってきて誰だという感じだし
むしろ今まで気がつかなかつた方が不思議だ

大声で意味不明な黒人に話しかけられ
私服の金髪女に話をかけられているんだ

当たり前だろう

僕は日本人特有の

苦笑いをしながらのペコペコを繰り返していた

なんなんだろ「うな」

場を取り繕おうと必死になつていると

神山君が「ヤーヤしおがら見つめていた

「ハハセで、ジブンの席は俺の隣や」

神山君に手招きされる

僕はまだ空席だった自分の席に座つた

座つたと同時に頭を抱えた!!

⋮

…恥ずかしいっ!!

僕の第一印象はどうだったんだ!!

「ジブンやるなあ。いきなりインパクト抜群やで…クックック…」

笑わないで…

間違いなく今日といつも僕の黒歴史確定だ

あまりにも色々なことがありました…

誰か!!僕に時の砂をくれ!!
やり直したいつ!!

「やつにえれば神山君…」

「稻荷ちやんつて言ひへてハアト」

「呼ぶかつーーー！」

何回やりはりの氣だこのやつとつ…

「じゃあ…イナリは…」

イナリはギリギリ〇〇にしてくれたらしき

「何か一人の情報もつてないの？」

「高いで？」

「金とんのかよつーーー！」

「なんやねんジブン。当たり前やないか

少し間を置いて少し真面目な顔つきで言われた

情報は価値あるもんやで、俺にとつては命綱やねん

…ひょうひょうとした態度の人間のふとしたギャップに気圧されてしまつた気がする

あいでいるのか閉じてるのか分からなくらいに細い目から、ヨロヨロと目を出した後に

またいつもの二口一口顔に戻つて続けた

「… 言うても、謎だらけで何も分かつとらんけどな」

「ふ、ふうん… そつか…」

まださつきとのギャップが拭えないの
何とも氣の抜けた返事になつてしまつた

「全校生徒の大半は既に調べがついてるんやけどな～。」

「なんなんだ、お前の情報網…」

こいつ…絶対に漫画の主人公の悪友キャラに向いてると思った
いかんせん思考が読み取れない不気味さもあるんだけれども

「いま、俺のこと主人公の悪友キャラとか思つたやろ? ジブン」

「分かりやすいのか! ? 僕は分かりやすいのか! ?」

くうう…自分の考へてる事をここまで読み取られるとは
高校とは思つた以上に恐ろしい所なのかもしれない

そういうある内に教室前方のドアが開いた

これから相対する相手は
とても大きな壁でヒドく冷たい

北極大陸で寒中水泳をするかの如き人間だった

冷たさは腰かさの再確認 逆も然り

教室のドアが開いた

入学式後の堅苦しい雰囲気が一気に戻ってきた
教室の全員が静寂に包まる（流川さんと田中くんは相変わらずだ
った）

なるほど

これが仏のような先生が言っていた先生か

⋮

…悔しいけど…イケメンッ！！

なにあのフロイス！！

ヨーロッパの貴族みたいな品格があるぅ！！

同じ男として嫉妬せざる得ないくらいに眩しそよつ！！

僕があまりの男性としての敗北感にうちひしがれていふと
イナリがヒソヒソ話しかけてきた

「あのセンセーが氷室冬樹先生や。別名『ダイアモンドエンペラー』

」

…なにそれっ！カツコいい！！
凄く奇妙な物語っぽい！！

「校長先生やPTAの会長すら逆らえない圧倒的な存在感。最強の石頭。権力と融通の利かなさでこの界隈の有名人や…」

イナリは話を進める

「そして、あのルックスやる？女子生徒にモテモテや。」

「ここまで聞いてみての感想

あいつこそ、少女漫画の王子様役みたいじゃないか！！
僕が恋愛や青春でウツハウハになるにあたってアイツは敵だ！！

必死にフラグをたてようとあくせくしている僕

ダイアモンドハンパー」と氷室先生はフラグが自ら歩いてくる
うな人間

「格差だよっ……それは……」

「ふむ…お前…そうだお前だ…私の話を途中で遮り、さらに格差について語りつとこうのか？」

教室中の一斉に視線がここに向けられる

しまったああああー！

隣でイナリが笑っている

ぐぬぬ…

何が僕をここまで駆り立てるのだろう
そこまでして僕は心の声を聞いて欲しいといつのか…

僕は心の露出狂か…！

ああ…もつと僕を見て…／／／

つてチガウチガウチガウ…

今はこの場を切り抜ける策を考えるのが先だ…

「あー…いやですね。高校1年生の入学初日には人生への深く哲学的な憂いを論じるにはいささか急ぎすぎたというかなんというか…ハハ…」

「…」

怖いいいいーーー何を考えてるのこの先生…！

僕の言い訳のヘタさも相当だけど

記号一個で返してきたよ…！

三点リーダーだよ…？

「…入学式も来ないで、人生について憂いていたのだな？」

やつぱバレている

そりやそうだ

入学式からいきなり遅刻をかますような問題児に注目しない教師はない

「…ちつきからお前は私をバカにしているのか？」

「ひやい？…あかになんてひていまひえん！…」

声が裏返った！！

自分のヘタレ具合にびっくりだ

3の倍数だけアホになるよりアホだ…

「…」

また沈黙

「…よし、明日までにお前の人生についての考察を400字の原稿用紙5枚以上で提出しろ。…いいな？」

なんというスバルタ！！

スバルタは古代ギリシャ時代にあつた軍事都市国家で…

じやない！！

とにかくなんということだ！！

入学初日にいきなり宿題とはこれいかに…

なんとしても避けなければ…

どりする…どりするよ…

「カツカツカ！おもしれーな！なあイチ？」

「オー！…ボス！…ニッコーに行カナクテモ、コンナトコでサルマ
ワシがミラれるなんてエキゾチックジャパンダヨ！…」

誰よりも日本人らしい名前をしている（名前だけだが）お前がエキゾチックジャパンとか言つちやつたよー！」

そこで、この雰囲気で唐突に会話を切り出せるボスすげえよボス…

「せんせーー社会にも出た事のないケツの青い学生という身分で人生について語れることは多くないと思つぜーーーカツカツカー！」

「ソウネーマダ、シタのバナナもグリーンナモンキーにジンセーはムズカシイヨー」

親戚のおじさんばりの下ネタに走りやがつた…！
だがこの現状を打破してくれそうな気がする…！！
一人の擁護が有り難いよー！！

「…ほう。お前ら…田中と流川だな。…お前らも晴れて今日から立派な高校生だ。お前らはハイツとは違うと言いたいのか？」

「そりやせんせーー俺とコイツじや用とマンドリンくらい違ひぜーー！カツカツカ！」

それはいくらなんでも違いますぎだあーーなんだマンドリンひてーー！

「俺はよー世界回つてきたけど、人生つて言葉じや言い表せないくらいにひでーとこがたくさんあつたぜ」

「…」

「それこそ社会体制とか法律とかそういうの以前の問題もあつたぜ。そんな俺が言うんだ。平和な国で育ってきた卵が社会を語るには経

験が足りなさずあるぜ」

「…何が言いたい？」

「早急な結論は幅を狭めるぜせんせーさん。せつかくの高校生活だ。色々な経験がここでは待つてんだ。コイツはまだ始まつてすらねーんだよ。卵に空を飛べってのは無理な話だ。」

「コイツが高校生活で雛鳥になるまで待つちやくれないか?きっと先生も唸るような立派なヤツになると思ひぜー!」

「…流川…お前の言い分は分かった。」

「さすがせんせーさんは違ひぜー!カツカツカ!ー!」

助かつた…のか…?

おおおおー!

なんだか僕抜きで話が進んでいたが
思いのほかうまく進んだみたいだ!!
ありがとうボス!!

「モンキーはハイスクール初日からビーバップネーー!エグチヨー
スケヨーー!」

田中!お前には感謝してやらん!!
そもそも違う作品を組み合わせるな!!

「…とにかくだ。今日から高校生活だ…。学校のルールに則り、厳しく指導していく。コイツのように入学式から遅刻するような醜態を私の前で見せるな。分かったか

静まつた教室は同意したと見なされたのだろう。

氷室先生は荷物をまとめ教室の扉に手をかけようとした。

「おい、お前…」

「は、はひつ…?」

またうわずつてしまつた…!

今のは奇襲だ…!

安心しきつた俺にまた緊張が走つた

「…めずらは卵のお前の答えを提出してもいりあへ。そして…また雛鳥とやらになつたときに提出してもいりあへ。…分かつたな。」

「ハイ…つて、おおうえ…?」

状況…! 何も変わらざりシ…! 絶賛悪化中…!

なんだ…! 今までの下りはなんだつたんだ…!

物語の進行でいらなかつたんじやないか…?

ダイアモンドホールのスタンンド攻撃は思つた以上に強烈だった

まさか入学初日で宿題を出され、せりひは高校生活を通じての課題を提出されてしまつとは……!

あれは完全に宿題がなくなるフラグだつたじやないか…!

こじが新喜劇の舞台じゅなくて良かつたなオイ…!

全員でズツコケるところだったぞ！！

「カツカツカ！やつぱり猿はサイコーだ！！氣に入った！！これから学校生活楽しめそうだぜえ！カツカツカ！！」

うるさいうるさいー！

ボスを少しでも嫌めかけていた自分を睨いたいっ！！

「H A H A H A ！！サスガBOSSネー！サルマワシノサイノーアルヨー！」

田中ああー！

しかも猿回してたのはボスかよー！

「カツカツカー！おつ！猿！ちょっとジラかせ！」

「何なんだよおおー！さつきから人を小馬鹿にしやがってえー！」

僕はもはや自暴自棄寸前だ…

いや既に自暴自棄かもしれない

「手伝つてやるよ」

「え？」

「だから、お前の高校生活に協力してやる

女の子に肩に手を回されてドキマキしてしまった

どことなく柔らかいモノがフー／＼一と…

ふにふに

どうへへへ…

「おい／＼猿～。お前の大好きな女の子のおっぱいを堪能してるとこ
悪いけどよ…」

「ドゥフュフュフュ～／＼／＼ふあ～い？」

「今から衝撃の事実を教えてやるよーーお前のことが気に入った。そ
して信頼の証として話そうと思う。これは俺と田中と猿。このクラ
スでは俺らしか知らない秘密だ。」

「いいか？覚悟して聞けよーー？」

「ヒュフエフエエフエ／＼／＼ふあ～い」

俺は男だ

：俺は今後の人生で誰も信じられないかも知れない
世の中に賢者がいるとしたら
まさしく今の俺のことだ

この現代社会において私は

この時

この場所で

一言で
賢者になつた

確認するまでは夢すらも眞実になり得る

俺は男だ

もうお先真つ 暗…

この横腹にあたるフーンフーンは何…？

そりやボスは男らしそぎて

僕の理想郷にいる乙女とは違うかも知れない

でも

でも…

どうみても女の子ですけどおおおおお…！

これが男なら日本の女の子とはなんなんだろうか…

ボス！…恐ろしい子…！

「カツカツカ…！イチ…！人間ってこんな表情出来るんだな…！」

「OH…！ボス…！ジャパンのモンキーはヒョウジョーがユタカネ…！
！オザキダヨ…！」

もはやツッコむ気力も削がれてい

「オイ猿！安心しろ！…お前はシロだ！」

シロ？ついに猿から犬にレベルアップしたのか？
…あれ？レベルアップしたのか？

俺を殺した犯入じゃない

：？

僕はこの地球に生まれ落ちてから
日本語には慣れ親しんできたつもりだ
でもこのような日本語はマンガでしか聞いた事がない

「殺した…犯人…？」

「アハ。俺はよ

一回、殺されちまつたんだ

ふむ

SFTうううう！…？？？

さつきからとんでもない単語が飛び出しそぎて思考が追いつかなく
なってきている

SFTが少し不思議なら

これはとんでもない不思議だ　TFだよ

人類は昔から未知の領域に憧れている
それが様々な創作を生み出し

いま僕たちはそんな創作に触れてきて非日常に多少なりとも免疫力
があると思っている
未来からやってきたロボットや
触つただけで人が破裂する拳法家
空から女の子が降りてくる

e t c .

SFの定義は幅広い

しかしどうだらう
僕らの日々の生活にそれらの要素はまったく含まれていない
いや、だからこそSFなんだけども

君はこんな場面に出くわして
なるほどなあと素直に納得出来るだらうか

「納得出来る訳がない！！」

「お、珍しく強気じゃないか猿。カツカツカ」

俺の心の声がかみ合つた！！

「まあ、聞けよ。そりゃ、こんな話をされても前の俺なら鼻で笑う
レベルだぜ」

「あ…当たり前じやないですか！一般的な高校生にそんな話を打ち
明けられても…」

「お前の意見はもっともだ。だから信じてくれとは言えねえよ」

「だが…これから話すことは全て真実だ。黙つて聞いてくれ」

若干トーンが落ちて迫力の増した声に僕は何も言えなかつた

「さつきも話したみたいに俺は男だつた

死ぬ前にとある国でギャングとかマフィアって呼ばれるような集団やつてたんだよ」

ギャング…

「OH! ボスはトックテモグレイトなギャングスタダッタネ!」

「殺し以外はなんでもやつた…みたいな感じですか…?」

「カツカツカ…!」

殺し以外もなんでもやつたぜ

…僕はどんでもない人と知り合になつてしまつたようだ

「まあ、貧しい凶画の出身だつたんだ。生きる為にはなんでもするぞ

世界中渡り歩いてきた…。結構偉かつたんだぜ俺? カツカツカ!」

「ストリートでリヨーシンモイナカツタワタシを拾ッテクレタノモ
ソノトキネ」

「今にも死にそうだつたイチがここまででつかくなるなんて思わなかつたがな！！カツカツカ！」

でつかくなりすぎだ…超人ハルクか…

「そんでもよ、とある取引で日本にやつてきた。問題はそんときだ」

僕は息を呑んだ

「取引相手と対面した。そんときに

圧倒的な力で何も理解出来ないまま俺は殺されたんだ

取引相手は全滅だ。俺自身も何が起こったのか分からなかつた

気がついた時には腹にでっかい穴が空いてた。

死ぬのは怖くなかつた…と言つたら嘘になるが、ここまで色々とやつてきた。いつ死んでも覚悟は出来てたさ

話はここからだ

俺のどてつぱらに光が降つてきた。お迎えがきたと思つたさ。でも違つた

次の瞬間、俺の身体がなんらかの力で女になった

「なんらかの力すげえなー！」

そこ省いちゃいけない描写だろーー！

「ボスヲタスケラレナカツタ…キヲウシナツテテ、ボスガキガツイ
タラガールにナツテタヨ…」

「何が起こったのか分からなかつたさ。そこで起こつた全ての事が
な

「はあ…。素朴な疑問を一ついいですか？」

「なんだよ。なんでも言つてみろ」

「そんな事があつて、どうしてここにいるんですか？」

「猿にしては良い質問だな。カツカツカ

僕はどんな風に見られていたというのだ…

「犯人さ」

ドキリとした

「こ」の学校に犯人がいるって話さ。「

KOEEEEEEEEEーー！

なんだそれーー！

仮にもギャングとかマフィアと呼ばれる連中を一瞬で分からないうちに

瞬殺してしまつような人間

いや違うよ。それはもつ

人間の粋を超える

だいぶ現実とSFのギャップに慣ってきた

僕の所にネコ型ロボットが来ても大丈夫なくらいに慣ってきた

「で、その話嘘だ…」

「本当の話だ」

遮られたっ！！

「でもな、俺は復讐とかそんな事は考えちゃいねえ

何の気まぐれか知らないが、こいつって俺は生まれ変わったんだ。

儲けモンさ」

「OH、ボス…」

「ただ、知りてえんだよ…。俺を殺したヤツを。実際に田の前にいたらどうなるか分からなけれどな…」

何だかよく分からぬが、同じ男（今は女だけ）としてカッコイ

イな…

自分を殺した人間を僕は許せるだろ？

「まつ、日本のハイスクールで過ごせなかつた青春…？つてやつを味わうのもいいだろ！カツカツカ！」

「なんで、そんな話を僕に…？」

「言つたろお前はシロだ。犯人じやねえ。それに」

お前が個人的に気に入つたんだよ…！

屈託ない笑顔

恐らく生前の彼は愛されていたんだろうなあ…

「昔の俺は死んだ。まさかファミリーに女の子になつたなんて言っても信じもらえねえだろ？しな…！」

今は大人の汚い力を使って、晴れて日本の高校生！カツカツカ！

やめて！まだ大人の汚い部分は早いの！
聞きたくない聞きたくない…！！

「まつ、お前がクロだつたらどうなつてたかな…？俺は構わないんだけど！」

「構わないんだけど…？」

「実はもう一人、俺の部下がいるんだよ」

「はい？」

ボスはおもむろに右手を上げた

…？

何をするんだろうか…

右手をフツと下ろした

その瞬間僕の鼻先を何かがかすめた

それと同時に

教室に飾つてあつた花瓶が割れた

「H A H A H A ! !

「カツカツカ！…」

！？！？！？！？

二人が笑つている…！

何かされたのか僕は…！

「…にはいなけれど、ちょっと離れたところで俺らを見てんだよ。」

「モンキーのアタマズドーンネ…！ゴルゴ…！」

何となく分かつてきだぞ

あれだ、俺の後ろに立つんじゃねえみたいな人がいるんだ…

「…その人はどんな人なんですか？」

「ん~、名前は……じゃあ…す、鈴木」

「絶対に今考えたでしょ…！…じゃあってなんだじゃあって…！」

ベタだ…！

田中に続いて鈴木…！

田中の偽名説が濃厚になつてきただじゃないか…！

つか、鈴木（仮）が見てるのか…

コードネームに13とか付きそうな不吉な数字が付いちやつよつな
人が見てるんだ…！

「カツカツカ…まあ、俺が合図を出さない限り何もしねえよ。そ

れに姿を見る事もないさ」

こうして僕は一人の秘密（顔も名前も知らない人も）を知ったの
だった

「さて、さつさと課題を終わらせようぜ…！…手伝ってやるよ…！」

…

忘れてた…！

濃い話の流れですっかり宿題の話を失念していたっ！！

「その代わり明日から猿も犯人探しを手伝えなつ！？」

「OH！モンキーが加ワレバ、鬼ニ玉棒ヨー！」

なんだよ鬼に玉棒つて！！

一字間違えただけで卑猥で生々しいわ！！

「いや……元々、あなたたちのせ……」

「手伝えなつ！？」

問答無用かい！！

「なんで僕なんか……」

「カツカツカ！猿は変なヤツだ！お前は何かを引き寄せる力がある。何千のトップに立った事のある俺が言つんだ。間違いねえ」

引き寄せられるのは災難ばかりなんですけど…

「それがいいんじゃねえか！！変なヤツには変なヤツが集まる。スタンド使いはスタンド使いと惹かれ…」

それ以上言うな！！

ああ、そうさ！！

二人みたいな人間を引き寄せた時点で変なヤツの仲間入りしてしまつたかもしけん！！

僕の周りは常に恋愛ではなく、違うモノが引き寄せられてきたさーー。

だけど、それは一般常識の範囲内ぞーー。

高校生初日、これまでとは訳が違うレベルの人間が引き寄せられてきたつーー！

「類は友を呼ぶってヤツかーー！カツカツカーー！」

「…僕はトラブルはトラブルでもトゥーラブな方が良かった…」

仕切り直しに失敗したのでもう一度

こうして僕はトゥーラブな方ではなく

本物のトラブルを抱えて高校生活初日を終えたのだった…

縁は縁でも腐れ縁 腐つてもまつながってる縁って凄くない?

前略、母さん…

なんだかんだで1週間が経ちました…

今は昼休みの時間帯です

何故か、お弁当を教室の隅っこで寂しく食べている訳…

思い返せば僕は初日から遅刻と課題の提出を求められるところからイベントを体験した訳ですが

高校生活という貴重なひと時を更なるイベント（恋愛限定）に向けて邁進してゐる所存であります

しかし、重大な問題が発生致しまし入学3日目…

友達作りのスタートダッシュに乗り遅れました…！！

これはとても重大な問題であります

恋愛とはおおよそは友人関係から発展する場合が多く
また交友関係の広さとはそれだけで女の子へのアピールにも繋がるものになあ！！

ああ…！悔しい…！

何よりも悔しいのは…

「流川さん…」この部分が分からぬの…おしえてほし…な…

？

「カツカツ力！いいぜえ！」ここはなあ……

「すごい！ 流川さんって頭いいよね～！」

二
む

「田中くん。ちよつと荷物持つの手伝ってえ~」

- オホ！ オヤスイヨウケネー！

「田中くんすごい！何かスポーツやってたの？」

「HAHAAA!! 黄、ウミに浮かぶ孤島で亀ノコウラを背負ッタ
人とブジユツのシユギョーシテタヨ!!」

「へえ！ 素敵！」

：素敵じゃないよ！

絶対、嘘だろ！！

「頑張ッテシユギョーシタラ、手カラ氣功ミタイナヤツデルヨウニ
ナツタヨー！」

政治小説

全国の少年が一度は真似したアレをお前は出せちゃうのか!?

「アサヒマツエ...シロー...カロ...ケン...?」

違うよ！！

それ絶対に違う技だ！！

とにかく、この一人は何故か知らないが非常に人気が高かった
田中は何故か見た目の事はノーッツ ノミ
そしてあの屈強な身体で愛されキャラクターになっていた

ボスは男女問わずに入気が高かった
やはりボスはボスなだけあって、その人徳は高校生にも通じるので
あろう。

人心掌握術にでも長けているのだろうか…？

「それはチガウで。人心掌握術ちゅーのは悪意や人間の醜い部分
に使うもんや。あの一人は単純な人徳や。
それが一番大事やつたりするけどな」

「なるほどな）。…ってイナリ！？いつから聞いてた！？」

つていうか僕は喋つてないぞ！

「しかし、見事に孤立したなジブン。このまま3年間過ごす訳に
もいかんやろ」

いつもの
ニヤニヤ顔で話してくる…
不気味なヤツだ…

でも実際、それが現実なのだから受け入れるしかないだろう。
実際に話をかけてくれるのは、あそこでモテモテの一人とイナリだ

けだった

「ギギギ…残念ながら反論出来なことやナリ…」

「なんやねん、そのゲンみたいな悔しがり方…」

中学生では地区の『〃』の中でもよく回っていたのだらう
僕は高校といつも少しふがつた『〃』の中でもいつも感つてこた

しかし…

出会いは劇的でなくてはならない…

いや

そんなことはないはずだが

王道では必ず出会いはとんでもない所からやつてくるのだ…

「イナリ…」

「ん?」

「ちょっと、トウーラブな出会いをトウーハーしてくわ…」

「なんやねん…」つづいて「…」

僕は教室を飛び出し

…駆け出した…

… やつ行くアテもないままに

きつとバイクを盗んだ少年は同じような気持ちだったに違いない

一見、現実逃避に見えるかもしれない僕の行動は
実は理にかなっているのだ

そう、教室を飛び出して廊下に出る
そして急いで駆けていけば

きつと曲がり角で劇的な出会いが生まれるはず……

わあ … 行いつせ … ペットホテルの回りつく …

きつと、この曲がり角を曲がれば劇的な出会い … カスペルスキッ
!!

「ん~?なんか当たった~、あ…ちよつとお~び」見て歩いてんの
~? (怒)

… 僕は大きな過ちをしたことに『戻がつく

「やだ~。『イツパンツ見てんじゃね~? (穢田)

この高校に入つて一番最初にこのパターンで出会つたのは田中だった
まさか一度も続くとは思わなかつた…

それはぶつかつた瞬間にウイルスソフトの名前を叫んでしまいたく
もなる
このパターンは最悪だ

これが王道であるなら

ピチピチギャルとぶつかってパンツが丸見えで
少年読者たちから歓喜の声が挙がるシーンである

「マジサイアク～。今日に限って私、勝負下着履いてきちゃったし
い～（怒恥）

さて、どこから説明したものか

とりあえず僕の田の前にある状況を説明しよう

確かに僕はいまパンツと呼ばれるものを田にしている
それは若者には刺激が強すぎるくらいに過激な下着だ
いち男性として私は『その下着をビニード買つてくるんですか？』と
問い合わせたいくらいだ

そして僕はその下着を田の前にしている

ラブコメ的なぶつかって女の子を押し倒すような形を想像している
だろうか？

…残念ながらそれは間違いだ

僕は駆けていった曲がり角で

圧倒的な弾力性に吹き飛ばされ廊下に倒れていた

そう

… 例えるなら4トントラックに高速道路で轢かれた以上の衝撃だ

そして廊下に倒れたままにスカートをのぞき見てしまったのだ

「なに～、もしかして当たり屋あ？ 私に氣があるとかあ～？ （得意
氣）

圧倒的な弾力性の正体はコイツの脂肪だった
くう、世の中にこんなヤツがいたなんて…！…

絵に描いたような『デブ』だ…

そしてハデな頭髪にハデな化粧、ミニスカート
そこから覗かせる足はまさにボンレスハムそのもの

大根足なんてレベルじゃない。

こんな巨大な大根を作れる農家がいるならぜひお会いしたいものだ

…！…

おおまかに外見を言い表すならギャルと呼べば良いだろつか…？

あまりにも太ましすぎやしないか！？

その自意識過剰はどこから湧いてくるのか…

そう言いたくなるくらいのルックスであった

ハム子だ。うん。ハム子と呼んであげるにふさわしい！

仮にも女の子だ。あまりにもヒドいあだ名と思われるかもしけないが
それしかいいようがないくらいなのだ

「ちよつとあ、倒れたままでぼーっとしてないでなんとか言いなさいよ～（微怒）

マズいな。これではハム子のパンツを覗くといつ何とも奇特な変質者じゃないか

残念ながら、思春期の僕でもさすがに欲情には限度がある
ハム子の布切れは僕に理想と現実の全てをぶち壊すほどの破壊力があつた

「こをじつ言ひ繕つかの案が全く出でこない」のままジヒンドな
のか…

「…つて…やだ…（視認

よく見たら、私好みの超タイプかも…（一目惚れ

…くつ

僕の魅力的な甘いマスクに虜になつたか…

「…つておい…なんだそれは…お前は…不細工です代か…」

「やだ〜！もう…冗談つますぎ〜…おわるさんみたいでちょ〜可
愛い〜（はあと

なんだ…！これは凄いフラグが立つてしまつた…！
誰か！助けてくれ…！

「…子（小声

「…え？」

「…だあかありあ、私は公子つてこのーーの…よひじくね…だあ
りん（照笑）

はええよ…！

ダーリン認定早すぎ…！

なんだよ…！

しかも公子つて…！

けつきょくハム子じやねえか…！

曲がり角は鬼門で

僕には不幸しか呼び込まないモノだと身をもつて実感してしまった…

「これガ携帯ねえ…よしつ…」これアドレスと番号交換完了アツて力
ンジ…？（笑）

「ああ…！僕の携帯……！」

なんと素早い行動…！

とても厚い脂肪に覆われているとは思えない俊敏さじやないか…！

「これからプロシクね。だあつーん（ラブ2000）

なんだラブ2000つて…＝＝ニアムか…！
愛はどうからやつてくねと思つてんだ…！

「ああー…もうお皿おわッちやつ…。マジサイアク…（怒
だありん…また会い）」ぐるからね（ノシ）

大きい身体を揺らして素早い動きで去つていった…
あれは動けるテヅの見本のようなヤツだ…

くううう…

どうせならきまぐれなオレンジ道っぽい後輩にダーリンって呼ばれたかった…！！

なんで…なんで…

僕にはこうつづり立たないんだ

はあ、教室に戻ろう…

教室に戻る足すら重たい…

⋮

「そんでトウーラブな出会いでトウーハー出来たんか～？」

放課後

キツネ顔でニヤニヤしながらイナリが話しかけてくる
たぶん僕の答えを聞かなくても答えが分かってるんだね
彼はそういうヤツだ…

「いや…それ以上はなにも言わないでくれ…イナリ…」

「くつくつ…おもろいなあジブン。出会いがあつても、なかなか
思い通りにはイカンもんやな」

「イツはまだ知ってるな…

「だけど、多かれ少なかれ引き寄せられるのはそれだけ魅力がある

「ちゅー」とや。」

慰めてくれてているのか何なのかよく意図が見えないな……

「ジブンのおかげでだいぶ色々な情報がもらえてるで。俺も魅力に惹き付けられた一人ちゅーことや」

僕がいつたいなんの情報を『』えているのかはよく分からぬけど

「本当に……僕を見て楽しんでいるだけじゃないか……まったく……」

「なに言ひんの～！友達やないの～！」

……友達？

「えつ～なに今まで友達じゃなかつたみたいな顔してんのジブン！…
ひどいわ～」

そうか……友達か……

「そうだよね……友達だ……ハハハ！」

全然、意識してなかつたけど友達か……
改めてそう認識すると非常に照れくさいもんがあるな……

「カツカツカ！…青春してるかあ！…少年達よお～～！」

「OHH～～甘酸っぱいラズベリーパイミーテーナ匂いガスルヨー～！」

どつから湧いてきた～～

「友達作りが出来ないイ？そんなことで悩んでたのかサル……」

「モンキー……ボウシとワタシハトックーモンキートフレンドヨ
……」

「クックック……トゥーハーは出来なかつたけど、友情ちゅーんは身
近にあるもんやで～」

「なんだなんだ……ちょっと嬉しいようななんとも言えない気持ちにな
るじゃないか…

「いや……その……素直に嬉しいというかなんといつか。みんな……あり
がとうござります……」

「カツカツカー……よつしゃ～！～みんなでの夕田に向かつて競争
だ！！」

それは……さすがにベタすぎて恥ずかしくて出来ない…
でも、今日は入学してから一番いい日かもしれないなあ～
アハハハ…

「よし、友情の証にサインしてくれ！」

「サイン～……つて田中……なんでぼくの手を取つて勝手に書いてるの…？」

「OKOK！これあと一人集まれば…部活が結成出来るな…」

ん？

「え？え？ちょっと…ちょっと…つい抵抗せずになされるがままサインした自分もおかしいけど、何ですかそれは…！」

「これは部活の結成の為の書類だ！！俺はこれから高校生活に向けて部活を作りうつと思つ…！以上…！」

何が『以上…！』だ…！
こんなのは異常だ…！

「しかし、サインするとは思わんかったで…将来は借金の連帯保証人とか注意せなアカンで？」

おかしいと思ったよ…！

この人たちがこんなに純粹に僕に対して接する事に疑問を持つべきだった…！

「…なんで部活？田舎せー甲子園…とか言つちやうつもりですか？」
「カツカツカ！それも悪くねエけどな…！」

「つていうか、イナリとボスはいつも仲良くなつたんですか…？」

「おいおい～サル～この前言つたばっかじゃねえかあ～

お前は何かを引き寄せる力があるんだよ

「ひつやつて僕の知らないところで3人が引き寄せられたのも僕の力…？」

そんな能力持つた覚えないんですけど…
というよりウマく丸め込まれてる気がする…

「よつしゃーーー明日から」の4人で部員探しをするぞ…！」

「OHーーーボスーーーモンキーとキツネ捕まえるなんてまるでモモタ
ローネーーー！」

桃太郎にキツネはいねえよーーー！

「クツクツク…面白くなつてきたなあ？ジブンのおかげで高校生活
が楽しくなりそづやで」

僕は理想の高校生活から遠のいてくるんですけど…

「カツカツカーーー騙すような真似をして悪かったサル！！
でもお前がいなきやつまんねえし！何より…大事な仲間だからなーーー！」

…うーん、反則的だなあ

そんな良い顔されて断れないじゃないか…

それに僕は心のどこかでイヤイヤしながらも

3人といふことが楽しい

そんな風に思つてしまつてるのがなんとも言えない複雑な心境だ

「僕の憧れの学校生活は普通の学園ラブコメの恋愛と青春なんです
よーーこんなんじゃないですーー」

まあ

楽しいだなんて口が裂けても言わないけれど（絶対にか
らかわれるに決まってる…！）

こつして僕は放課後に帰宅部にならずに
謎の部活に入る事になつたのだった

恐怖は未知への恐れ 既知に対しての臆病

草木も眠る丑三つ時…

しかし、現代社会には眠る時間なんてあつてないようなもので恐怖の意味合いも昔に比べてだいぶ薄まってしまったように思つ

暗闇には必ず光があつて

それが闇に対する恐怖を薄めているんじゃないかな

それでは

闇に対する潜在的な恐怖は拭えない

むしろ大事な根本から目を逸らす為に光があるようにも感じてしまう

そんなわけで僕はいまベッドに横たわり

草木も眠る丑三つ時

つまり日付が変わつて間もない深夜にこうして語つてている訳だ

人間は逃避行動というものをするとどこかで聞いた

ラブコメで恋愛に不慣れな主人公が女の子に迫られて、素数を数え

始めたりする

煩悩と戦うアレだ

そして僕はその同じような状況に置かれたら煩悩と戦うまでもなく現実を堪能するだろう

どうして長々とこのようなビーツでもいい話を僕がしているかとこうと現実からの逃避行動の為だ

つまり

僕は現実から逃れたいと思えるほどの状況にたつてゐるわけだ

…みんなはこんな経験ないだろ？

夜中に暗い中、隙間が気になる事

微妙にクローゼットとかが開いてたりすると何かが覗いてるような気がしてならない

隙間こええええ！！

…いや、僕が直面している問題はそこじゃないんだ

むしろ、そのくらいのほうがマシだった

だって

ホンモノが僕の目の前にいるんだから

窓際になんかいる

そのなんかを確認出来ないまま今に至る

未知の恐怖だ

幽霊がいる！！

GYAAAAA！！

言つちやつた！

幽霊とか言つちやつた！！

KOEEEEE!-!

だつて、なんかいるんだもん!!

否定しようがないよ!!

こんな事は生まれて初めてだ!!

誰か!!「ゴーストスイーパー呼んでくれ!!
鬼形くんでもいい!!頼む!!

何か部屋の隅であらぬ方向を向いてるソイツ
っていうか髪が長くてどっち向いてるんだか分からな

まさに貞子だ

ん?

気のせいいか

わっわよつ僕に近づいてきてるよ!うな

…そんなことあつてはならぬこと黙つよ僕は

そうだ!気のせいだ!気のせいだ!!

…トンデモ体験は学校だけで充分だ

まさか安息の地である家でこのような事が起きよつとは誰が予想し

ていたであろうか

：僕は予想していた

高校に入つてからのトライアル続きに僕は慣れきつてしまつてゐる
いづれは僕の生活を飲み込んでとんでもない事態になつていいく」とは
想定していた

想定の範囲内です（キリッ

でも、オカルトがくるなんて想定はしていないよ

女の子が空から降つてくるとか
そういう方面的の妄想はたくさんしてたんだけどなあ

世の中は甘くないと何度も教わつただろうか…

そつこひじれるつかに

僕の足下まで幽霊が近づいていた

金縛りというんだらうか
身体が動かない

：これは実に怖い！！

ここまできたらかも視認して、その幽霊がいるのを見ているかのように語つてゐるが

実は

怖くて（怖すぎて）

なにかがいる方は見ていないのだ

ただ

確かにそこにある

その気配だけはしつかりと伝わってきてるのだ

ホラー映画でノソノソと近づいてくる幽霊っていふでしょ？

あれは嘘だ

気がついたら一気に距離を縮められてる

某サイヤ人の瞬間移動みたいに突然目の前に

… そう目の前に

… 目の前

：

目の前にいる…-----!

「… ハ……」

あまりの驚愕に声が出なかつた
とこゝより、やつから叫び声一つあげれない
やつから幽靈と言つてゐるが
この何かが幽靈なのかすら分からぬ
恐らく僕との距離はあと数センチでキスしてしまつたうなへりて
接近している
近すぎる…!
心臓がとまりそうだ…!
僕に長い髪がまとわりついてくる

顔は…髪の毛で覆われていてまったく確認出来ない
白い洋服? みたいなものを着ているのはなんとなく分かる
なんなんだ…なんなんだ…なんなんだ…!!

なぜこの何かは俺にまとわりつき、俺に何を求めているのかまったくもつて謎だ

…!?

まさか、僕に取り憑いて呪い殺そつとひこつのが…?
そんなオカルトは怖すぎる…!

まだ巨大なマシュマロマンに踏みつぶされた方がマシだ

そんな事を言つたら余計に怖くなつてきた

その何かが僕の耳元に近づいてきた…

ぎやあああやめてええ…!!

呪いの言葉で僕を殺さないでええええ…!!

「…わぶ」

「…え？」

ちくわぶ…

…?

どうやらリアルの呪いの言葉はとても美味しい練り物のよう聞こえる
ところより練り物そのものだ

「…は？なにいつてんの？」

声が出た…!!

金縛りとは何だつたのか…!!

思わず素のトーンでつっこんでしまつぽじだつた

「ち…くわぶ…」

また言つた…!!

こいつ、ちくわぶって言つたぞ…!!

関西人には馴染みが薄いよ…!!

関東の方じやないとなかなか出でこないぞ！その単語！

なんて残念なヤツなんだ！！

幽靈だとしたら残念幽靈だ！！

せっかく出だしは良かつたのに一言でぶち壊しやがった！！

僕の中で恐怖感はすっかりなくなつていた
未知が既知になる瞬間を確かに感じていた

「なんの目的があつてここにいる？出だしからの流れで混乱するぞ

！」

「ひつ…！か、歌舞伎揚げ…」

一瞬、僕の反応に驚いた仕草のあとに
また関東圏ネタを絡めてきやがつた！！
お前は関東圏の幽靈なのか！？

「…」

無言かよー

僕がベッドから身を起こし

幽靈らしきモノは僕から転げ落ちた

「…高杉晋作…」

ひょつとして単語しか喋れないのか…？
チョイスがいちいち分からない

今回の言葉は関連性が見いだせないし…

おもむろに転げた姿勢から立ち直りまた僕のそばにやつってきた

「…なんの目的で僕に近づいてきたんだ。」

「…………すりの銀次」

なんだ!! 僕の総資産からこへら盜むつもりだ!!

「…駄目だ。話にならないや」

すりすりと僕に顔（らしき部分）をすりよせてきた
まるで猫みたいだ

れつきの恐怖感はどこへ行つたのか

そして、こいつが何なのかは未だに掴めない

…つて…もうこそこな時間…!!

明日、学校じゃん…!

規則正しい僕の生活は些細な事で乱されてしまつた…!!

長い髪の毛のお化け（仮）がいることを些細な事と言つてしまつて
いいのかどうか分からぬけどね

以下、朝です

僕はそのままお化けらしきモノに構わずには眠った
わざわざまでの恐怖や金縛りが嘘みたいに健やかに眠れた

…昨日の出来事はなんだつたんだ

そしてここはマンガの定石のセリフを書いてみたいと書つ

「わかつ夢だつたんだ…それにしても変な夢だつたなあ…」

「……………じゃりン子チヒ」

いた…！

そして懐かしいなソレ…！

幽霊なら朝には消えてろよ…！

普通は朝になつたらいなくなつてるパターンだろ…！

「つて」とは…幽霊…じゃない？

そう考えるのは早計かもしれないけど
暗闇でよく見えなかつたが

今は朝の明るい時間になつたのでよく見える

きめ細やかな肌

白いワンドピース

長い黒髪から分かりづらすぎるが微妙に顔を伺える
かなり小さな体躯をしてるな

口リだ口リ

それにしても、こんな残念なヤツに僕は怖がっていたのか
こつしてみると小動物的でなかなか可愛いもんじゃないか

思わずナ『テナ』テしてみた。

「 テストロイ」

「ワッ！…物騒な言葉使うなオイ…！」

つてこつかこれから学校なんですけど…
まさか付いてくる気じゃないだろうな…

「これから学校なんだけど… 分かる？学校？」

「で… でらべっぴん…？」

「言つてない…！そんなこと言つてないよ…！」

一分も伝わってない…！

分かる人には分からぬいよそれ…！

「言葉が分かんないか～。僕、行く、学校、君、ここで待つ、分か
る…。」

身振り手振りで「ミュー」ケーションを取りうとする

なぜコイツを家にどぎめでおかなればならないのかはよく分から
ないが

僕が安全に学校に行く為にもその事実をなんとしても伝えなければ
ならない

「…？」

「伝わってなかつた…！」
翻訳こんにゃくが欲しい…！」

「…翻訳 コニャック？」

惜しい…！つていうか、成人御用達のひみつ道具かそれ…！…
つていうか言葉に出してないのに伝わった…！
まあコンニャクで言葉が伝わるものあれだし…コニャックでも悪く
ない…」

「…つて違う…！…そんなことを考へてる場合じやない…！…とにかく
行くからな…！つけてくるなよ…！」

僕はジエスチャーで強く示し、コイツを拒絶した
部屋から出てパンをくわえて外に駆け出した
朝からとんでもなく異文化コラボ二ヶーションしたな

以下、学校にて

「おはようさん。なんや疲れとるなあジブン」

「おはよう。イナリ。」

「……パラガス」

「伝わってなかつた！！

かなりの勢いで走つてきたのに憑いてきやがつた！！

パラガスつてなんだ！！

潰されるのか！？

「ぬああおー！なんで憑いてきたー！」

「なんや。ジブンいきなり大きな声だして。何かあつたんか？」

「だつて、コイツがずっと家から憑いてきたんだぞー！大声出さず
にいられるかー！」

「コイツ？家から？何言つとんねん。ちゅーか、なんの話や。」

「だからコイツが…」

指を指して言いかけた瞬間

だからコイツって誰や。ジブン、気味悪いなあ。

う~む

冷静になれ

いま流行りの自分にしか見えない女の子とでも言うのだろうか
そういうえばこんな黒髪の口りを連れてきたのにクラスはいたつて平
常運転のような気がしないでもない…
いや、それ以前に僕の存在を気にする人間なんて一人もいな…あれ、

なんか凄く悲しい事言つてない?

「イナリには、トイツが見えないの?」
「……」

必死でイナリに説明する。

トイツはさん臭いヤツだけど分かつてくれるぞ……

「……いやいや……やうかやうか。よ~~~~~く分かつたで」

「分かつてくれるのか!! 昨日からずっと……」

「ついにキャラを確立したんやな! 靈能力キャラとか一瞬、地獄先生を彷彿とさせたで!! なんや……どっちの手が鬼の手になつたん! ?」

「伝わつてなかつた!!

そんなキャラを確立させて僕になんのメリットがあるというんだ!! 僕はそんなにキャラクター性に欠けたヤツだったとでも言つのか!!

「……アウグストウス?」

「やうか……お前は慰めてくれるんだな……ありがと!! ……」

トイツの言葉は意味不明だが慰めてくれるといつ事は分かつたなんだ、最初から言葉なんかいらなかつたんや!!

「どうしたん……ジブン……意味不明な事ばつか眩いで……」

「いや、もういい……もつこいんだ……俺の事は気にしないでくれ……」

「……」
「いやで哲学的な話をするなり

僕一人がその存在を認識したからといって
他の大多数が認識しなければそれは存在しているといえるのだろうか？

とても難しいな…

この子は本当にいるのだろうか？

確かに僕にははつきり見えるけど、これは幻覚で僕はただの痛いやつなんだろうか

「かつかつか！！そりゃないぜえ！！！」

「H A H A H A !! ワタシはリツコ先生大好キダッタヨー !!」

「話がややこしくなりそうな人がきた
っていうか地獄先生の話はもう終わってる…」

「俺はよおサル。百人が見えなくても、俺が見えればそいつは確かに存在する。そう考えてんだよ」

「…信じてくれるんですか…？ボス…」

僕はボスの器量の大きさに胸を打たれた…なんて出来た人なんだ…
「カツカツカ…！地獄先生じゃなくて、みえるひとのキャラ設定だ
よなサル？」

…伝わってなかつた…!
どうしてそういうネタ方向に持つていきたがるんだ…

ん？元凶である「イツ
なにやら袖を引っ張られた
何か言いたい事があるらしい

マトリョーシカ
…

もつ黙黙だと思つた

夢か幻か…… 一人の観測者しかいない眞実

「というわけで 第32回放課後定例会議を始めるぜえ」

⋮

「O-Hーまさに放課後にティータイムネーー！」

⋮

「なんや、この会議もだいぶ板についた感じがするなあ」

⋮

「マゾッホ……！」

⋮

「ちょ、ちょっと待ってください……！」

色々ヒツツ「みたい……」

「第32回つてなんですか！！！いつ、そんなんに、僕抜きで極しげなメンツで集まつて何をしてたんですか！？」

「…というわけで今回の議題は『サルのキャラ立ちの仕方』についてだぜ！…！」

スルーかよ！――

僕の事について議題をだしておきながらの華麗なスルー！！

「だから僕のキャラはそんなに立つてないのかー」というか勝手に僕を議題にするなー！」

「…というわけで、ついに人には見えないモノが見える設定でキャラ立ちを日論むサルだが…」

スルーかよ！！

設定とか言へな！！それじゃ渦茶苦茶イタイヤツみたいじゃなしカ

確かにコイツは他の人には見えないんだよなあ……

なんとかしてコイツの存在をみんなに認識してもらひ方法はないものだろうか

人の気も知らないでポツキ一食ってるし…

つうが、モノ食べれんのかよ

知れば知るほど謎の生命体だ

感覚というか直感でそれは分かる

そんな生き物になつかれる僕はいつたいなんなんだらう

僕の目にしか写らない… 認識出来ない事に何か意味がある

のだろうか

「…じゃあ、荒木先生は吸血鬼の末裔とこいつ」と異論はないな？」

「…なんでそんな話になつた！？」「

僕のキャラ立ちの話からなんで吸血鬼説になつてんの！？
確かに若いけれども！！」

「〇一二・ジヨジヨ先生ハ・・・・ヴァンパイアダッタノカヨー！」

ジョジョ先生とか言つた！？

出来うる限り直接的な表現は避けているといつのこと……（これでも）

「いや～、今日も有意義な会議だつたぜえ！…」

ちよ、ちよ待つてくれ！

「」で終わつちゃ駄目だよ！

な…なんとかして「イツを認識してもいい必要がある

ところが僕の膝の上にお菓子をいぼすな！…

「ちよつと待つて…！」

僕は精一杯の引き止めをしてみた

「おつ！サルう～やつと発言したか～。お前がクラスに一人はいる
休み時間に突つ伏しちゃうヤツになるんじゃないかと心配してたと
こだぜ！…言つてみろサル！…」

余計なお世話だよ！…

なんでそこまで心配されなきゃいけないんだ…！

イカンイカン…

ここは抗議ではなく、せつかくの説明の場じやないか
存分に説明をしようじゃないか

「実はかくかくしかじか…」

うん、文章の妙技を使い説明した

昨晩の出来事

そして今に至るまでを

この説明をするまでにどれだけ回り道をしたんだよ…

さすがにみんな耳を傾けてくれている

そしてしばしの

「なるほどなー。ジブン、そんなことがあつたんか。」

さすがイナリ！理解力がある…！

「SHITT!! モンキーハーユークの幻ネ!!」

その表現だとまるで僕が幽霊みたいじゃないか…！

「おおおおの事情は分かつたぜえ。サルよお…」

よしやく話は本題に入らうとしていた

「えりなんです…それで…」

「それで？…カツカツカ！仮にその話が本当だとしてよ。」

ボスは続けて次のように言つ

「俺らに見えないヤツがいたとしてどうすりやいいんだ？サル、お前はどうしてほしこういうんだ？掃除機でそいつを退治すりやいのか？それとも仲良しこよしをしろっていうのか？」

ふ～む、確かに正論だ

といふかどうしてそこまで考えが及ばなかつたんだろう。

昨日の恐怖におののいていた僕はいち早くコイツを退治したいと考えていただろう
しかし僕の膝の上で黙々とお菓子をほおぱり続いているコイツはとてもじやないが退治したいとは思わない

どんな理由で僕にしか見えないで

どんな理由で僕の元にいるのだろうか

そして僕はボス達に何を求めてたんだろう

理解してほしかつた

ボス達なら何か今の現状を打破してくれそうな気がした

多分、だから…話したかったんだるうな。

「カツカツカ！…サルよー…お前はカワイイヤツだなあ…」

いやいや、可愛い顔したボスに言われたくはありますよ

「その顔だと、何も考えてないで頼つたんだよなあ？」

「見抜かれてるなあ。

「困った時に頼られるのも悪い気分じゃないぜえ？学校生活はこのくらい刺激がねえとなあ！」

「こんな刺激は学校生活という場所ではなかなかないと思つけど…

「やつぱ、ジブンといふと何やらオモロイ話が転がつてくるなあ」

「僕もそう思つよ…

「自分の事ながら、こんな面白人間たちに囲まれるなんてそつそつないよ…

「んで、そいつはどんなヤツだ？どんな見た目とか分かる範囲でいいから説明してみろよ」

「身長は僕のお腹くらいで、見た目は黒髪が腰の辺りまで伸びて、でパツと見人間と変わらない…」

僕はコイツの容姿を説明した

そんな情報で何が分かるというのか

「それよりなによつ…言葉が伝わらなくてコリコリケーションがとれません…」

そつなんだよな。

何よりも原因の大本であるコイツが何も情報を発さないのが問題である。

「んで、そいつはいまどこにいるんだあ？」

「僕のこじらへんです」

僕は自分の膝を指差す（正確には僕の膝に座っているコイツを指差しているのだが、周りから見たらそう見えるだろ？）

「カツカツカー…そつか…！」

この人は本当に動じない人だ
おもむろに僕に近づいてきた

「よお！チビ！名前はなんて言つんだチビ？」

「……洞爺湖まりも」

「洞爺湖まりも…と言つてます。」

僕は間髪入れずにコイツが言つたセリフをボスに伝えた

……

絶対にそんな名前じゃないよ…!
洞爺湖まりもってなんだよ…!
お前は北海道のキャラクターか？

ポスト銀さんでも狙つてるとでも叫つかなか！？

脊髄反射的に通訳したけど、おかしいだろ！

「そんな青々しい名前かあ……良い名前じゃネエか……カツカツ力
……よろしくなチビ……」

名前で呼んでやれよ……

結局はチビって呼んじゃってんじゃないか……

僕も名前とか認めちやつてる……

「イエス……マリモジ ロコ……マリモンロー……ヨロシクナースモ
ール……」

まつもつこつは百歩譲つていいけばマリモンローは知名度低いよ……

「……こや、イナリ……そっちにほこない。」こちこちのから

あらぬ方向に手を振つてるイナリを指摘する僕
ベタな間違いつて本当にあるんだな……

「……うるさいよふ

当の本人はあまり分かつてないようだった。
何?出でくる単語は寒い地方限定なの?

ゴルバチョフが寒い人つて言つてゐる訳じゃないよ

「カツカツカ！名前も聞いたし、俺らの当面のチビに對しての対応なんだが…正直、手が付けられねえ。俺らに見えないモノだし、判断材料が少なすぎるぜ」

「えええ…確かに唐突に言つた僕も悪いし、頼つてる身でこんな事を言つのもあれなんですが…対応策とか…ないんですか？」

「そんなものはねえ…！」

「言われた！！

あつぱりと否認された！！

「それによおサルう。今のところ前に危害はねえじゃねえか！そのまま飼つててやれよ！」

「飼つって…

ペツトじゃないんだから

それに幼女を飼つて凄く背徳感に溢れていて犯罪的なんですけど…

ああ…！…僕は口リ属性はないぞ…！

そんなこと言われたら少し意識しけりやつ気がしないでもないじゃないか…！

「OH…モンキー…モンキーハイワゴル『マスコット的存在コテニイレタネ…！』

あれか…？

モンスターをボールで捕獲するような冒険活劇に出てくる電気ネズ

ミとか

契約して無垢な女の子を「魔法少女」させるよ! うな憎たらしきヤツか
!?

「ちょうどキヤラ立ちの議題やつたし、ええんけやつ? 新しい属性
手に入れて良かつたなあジブン」

その僕のオプションみたいな感じはどうなんだ!?

つていうか、その議題が今になつてまだ続いてたことにも驚きだよ
!!

「カツカツカ! 少しずつ少しずつチビを理解していつてやれ! なん
であれチビはサルにしか見えない。サルが俺たちを頼つたみたいに、
チビだつてサルを頼るしかねえんだ! 俺たちはああだこうだは言つ
てるが、親愛なるサルに精一杯協力するつもりだぜえ?」

「ボス…」

たまに恥ずかしくなるような事言つてくれるよな
本当に心強いよボス…

僕は「イイツ… もと…』『まりも』に話をしてみることにした

「あ~、まりも… ちやん?」

まりもは自分に話をかけているのが分かったのか僕の方に顔を向けた

「昨日と今日と悪い事しちやつたね… それは謝るよ。」「めん。」

「… かざふすたん」

その言葉からは何も読み取れないが
なんとなくながら気持ちは伝わって
大事なのは言葉じゃないんだな…

「それで… よければ、君が抱てる問題を僕たちが解決しようと思
うんだ。今は何も分からぬけど、これから少しずつ分かり合え
ば… と思つ…。」

……なに、このセリフ！？

何かプロポーズするときに言つみたいなセリフになつてゐる！――

「...モニターリング」

僕の首元に腕を絡めて、抱きしめるよいつな形でまりもはそいつぶやいた。

「これは…感謝…なのか？」

「かつかつか！万事解決つぼそだな！！大事なマスコットだ！！可愛がつてやれよおサルう！！」

ここにきて僕はマスコットといつ言葉にほだされて大事な事を失念していた

他の人に見えないマスクottつて意味がないんじや…

日常と非日常の違いが主観でしかなかつた場合

今日は休日

学生生活というのは長い暇との戦いでもある
大人になってから、その怠惰な時間を愛おしく感じる…って近所の
おじさんが言ってたのを思い出す

そんなわけで

僕について話をしようかなと思つ

この物語は基本的にそういうプロフィールみたいな情報が圧倒的に
少ないよね
細かい設定はいっぱいあるんだよ？

作者がドヤ顔で情報を少しずつしか提示しないんだ
多分、僕の苦労や心情の3分の1も伝わってないんだろうな…

そんなメタな発言は置いておくとしよう

僕が住んでいる街は『苗美』と書いて『なえび』と読む
そこそこ大きいけど、あくまでそこそこだ
田舎の人から見れば、それなりに都会ともわかるし
都會の人から見れば田舎に見える

中途半端…！

数年前に駅前にショッピングモールが出来て
そこから徐々に便利な町から街になつた感じかな

少し歩けば綺麗な田園風景が広がるし
駅前はそれなりに栄えているし

健やかな街で僕は育つたなあ

そして県立苗美高校が物語の舞台だ

春には桜が咲き乱れるとてもキレイな場所だ

駅から歩いて数分の場所にある

緩やかな坂を上っていくと脇に見えてくるのが僕の高校

なんでこの高校に入学したか、って？

そりゃ

女の子といちじゅう〇〇%するために決まっているだろ
う

こんな綺麗で青春の甘酸っぱいかほりのする舞台が近所にあるのだ
そりゃ入学当初にいちごパンツを履いた女の子に出くわしたり
赤い麦わら帽子かぶった女の子と階段が100段か99段でモメたり

しかし現実は違っていて

僕は世紀末的な人に囮まれて

それを屈強な黒人男性に助けられた

それはそれで違う意味であり得ない話ではあるんだけど
誰しもがそっちの展開は望まないだろう

そっからどう間違つたのか

おこやのこに生まれ変わつた元マフィアのボス
よく分からなこつさん臭い悪友

そして僕にまとわりつくなつた

洞爺湖まりも（仮名）

…僕の周つは仮名だらけじゃない！？

コードネームばつかのヒーローント漫画でもあるまじ…

まりもは他人には見えない無意味なマスクットキャラクターだ
今も僕の部屋の隅で漫画を読んでる（よつて見える…といふか読
めるのか？）

ここまでは今まで分かつてゐる高校入学までのおせういだ

ここから家族構成の話をしよう

幸せな事に僕には妹がいる

僕がドキドキのラブコメを望んでる事は周知の事実だと思つ

妹がいる

この事実だけでご飯が3杯イケる紳士もいるだらつ

しかし

現実は甘くないのである

妹は可愛い

そこには恋愛感情は存在しないのである

君は素っ裸のかーちゃんに欲情するであらつか?

つまりはやうこい」とだ

自分の家族を褒めたりするのは少し恥ずかしいが
よく出来た妹である

僕の妹がこんなに優秀なわけがない!!

ちなみに妹は今は家にはいない

ちょっと出かけているとそういうベルじゃない

今はヨーロッパに留学している

これは後々、フラグになつてくるに違いない話だと思つ
これが血のつながつてない幼馴染みならそれは胸がときめく話だと
思つ

しかし血の繋がつた妹だと…ねえ?

小学生の時からよく出来た妹だったけど

まさか中学で海外留学とは…

僕の妹がこんなに優秀なわけがない!! (2回目)

とこつわけで、ここ最近は手紙や電話でしか知らない妹な訳だけど
どうやら何かと順調なようだ

専用列車で学校まで向かつたり
メガネをかけた冴えない同級生とか
イヤミな別のクラスの男子とか
優しいヒゲの校長先生とか
森に住んでるヒゲの巨躯な中年男性の話とか

そんな話をよく聞いていた
あっちの学校でうまくいってるようで何よりだ

…妹の話はこれくらいにしよう

父の話だ

父は…行方不明

らしい

実際のところよく知らない

母いわく

世界を旅する二ツ星ハンター

だとか

魔物使いで今は石にされているとか
宇宙を支配しようとする帝国軍人

魔界三大妖怪だとか

元巨人の名三墨手だとか

史上最強の生物etc… .

聞くたびにその内容が変わっている

僕はもう慣れっこなので聞き流している
とにかく僕は顔も知らないし
どんな人だったかもよく覚えていない

別に嫌いとかそういうわけじゃないんだ
いなくて当たり前だった
どうもピンとこない存在とだけ言つておこう

最後に母親か…

いま僕は母親と一人暮らしになつていて
生活は不自由してないし
実は父から毎月生活費等が振り込まれていてんじやないかと思つ
母親に關しても謎が多い
なにを話しても濁されるというか丸め込まれるといつか…
でも良い母親であることに間違いは無い
やっぱり僕に取つて母は偉大な存在だと思つ
でも…あまり褒めすぎると調子に…

ふと後ろから気配がした

「…アラアラ。あらあらあらあらあらーーー！」

母親だ…

「『めんなさいね！男の子のティッシュタイムにお母さんが邪魔
しちゃ悪いわよね』。発情期の猿みたいなお年頃ですもの…お母さ
んは何も気にしてないのよ。ただ…息子の成長が嬉しいというか。
あつ、もちろん息子の成長つていやらしい意味じやないわよ！…も
ちろんそっちの方も元気だな。とか少しは思っちゃつたりしなくも

ないけど、お母さんは健全な気持ちで言つたのよ！まさかあんなに小さかつたのに、今は馬並とか思つたりもしたけど……やだ……お母さんつたら馬並だなんてはしたない……」めんなさいね。まだまだ触れられたくないお年頃よね。思春期の息子に向かつて何を言つてるのかしら私。ああ……お父さんが若い頃は七つの海を駆け抜ける大海賊で、ひとつなぎの財宝とか見つけちゃつたりしてね……呪いの財宝を解放してあげたりもしたわ。お母さんもあの頃は女海賊として名を馳せてたのよ……。お父さんつたら、この世のすべてをそこに置いてきただけど、お前だけは手放せなかつた……なんて言つてくれちゃつて……もう……！あなたもお父さんによく似てきたわね～。あの人本当に素敵だつたわ。……「めんないね！お母さんつたらいきなり感傷に浸つちやつた！もつ年かしらね～。やだやだ！年だなんて言つちやつたわ……まだまだお母さんだつてイケル年齢なのよ？この前、商店街の八百屋さんの斎藤さんに『奥さんはまだ若いです。旦那さんのことはもう忘れて僕と一緒になりませんか』なんて言われちゃつて……でもねお母さんしつかりと断つたわよ……偉いでしょ？やっぱり離れていてもあの人があの人が一番だもの……。あらやだ！お母さんつたら息子になんて話をしているのかしらー……そりこえばね……」

「長こよーーーこの作品が始まつて以来の長セリフだよ……ドラマだつたら役者さんが大変すぎるよ……」

息子の性事情から
母親の女の顔まで

どれも聞きたくないし関わりたくない部分だよ……

「この通りの母親だ。

「「」の通りの母親で～す みなさんようしくね～」

「駄目！読者に語りかけちゃ駄目！世界観もへつたくれもないから
……」

本当に何を言い出すか分からない。

少し抜けていて、とてもテンジヤラスだ

「お母さんね～、暗黒の力が働いちやつて力が暴走しそうなのよ。
お母さんほどの能力者だと魔王アルデゴラスにまで影響を及ぼすほど
なのよね～。こんな日に出かけたら、この人間界にどんな悪影響
があるか分からないわ。私の代わりに今宵の晩餐の調達の任をお願
い出来ないかしら？」

「今晚の『』飯の買い出しね。…分かったよ

…たまに少しだけ厨一が入る

小さな頃はお母さんの発言を真に受けってきた。

段々と社会的な活動範囲が広がるにつれて

僕にも分別がつくようになつてくると段々と母親の対処の仕方も分
かつてくる。

「これがミッションのリストよ～。私は波動の疼きを抑えるので
いっぱいいっぱいだからヨロシク頼むわね～」

そういうて、材料のリストを渡される

「…」これは、何の料理？

「あ～あ～？ 分からないの？」

「いや、そんなに料理とか詳しい訳じゃないけど… カレーとか？」

「今日はチヨーニジア風のクスクスよ」

わからんねえよ…

どこの日本の家庭でこきなりそんなヌースーシク料理が出でへるかと思
うんだよ…

もう少し分かりやすい料理をいついつ時は出して欲しいものだね…

「… 分かった。とにかく買つてくのよ」

「うふふ。よめじへね。それと…」

おもむろに母がまりもに皿を向ける

「うひー、母さん…まさか、まりもが見え…」

「あ～あ～あ～あ～」

まりもに近づく母親

やっぱり母さんは侮れな…

「駄目よう。こんなとこにこんなもの置いてちやあらやだ、こんなにハードなのが趣味だなんて…」

違つ！

違わないけど違つ！

そこは青少年の一一番触れちゃいけない部分だ――

まりものすぐ側に落ちていた口に出すのすりばかられるようないかがわしい雑誌だ

おそらく

まりもが僕の秘密の隠し場所から見つけ出して読んだ後に放置したに違いない

「前はベッドの下と押し入れの天井裏に隠してたのに、いつの間にこんな大胆になっちゃったのかしら。こういっのは恥ずかしいから隠すものだつて思つてたけど、最近の若い子は違うのかしら……」

バレてらっしゃる――

たまに整理してあると思ってたけど、そういうことだつたの――！
何だらう、全国のお母さんに共通するよなコレ
なんなのコレ。

「分かつた――もういいから――もう行くよ母さん――」

これ以上いたら僕の傷口がさらに開きかねない

僕は自分の部屋から足早に出了た

「あらあら…反抗期かしら…お土産ヨロシクね～」

アンタのお使いだよ――！

なんで、張本人がお土産頼んでるんだよ――！

以下、外出後

これで落ち着いた…

「…はたはた

「つおつ…いつ間に付いてきた…いや、憑いてきたか…」

まつもが僕の服の裾をつかんで横にいた

まつもと共生してから、少しずつ分かつってきたことがある
「イツは俺らの喋っている言葉が分からぬし、俺らにも伝わらない
でも喜怒哀楽といった感情はある程度は持ち合わせてこようだ
何というか感情同士での会話といつか
会話とは言えないけど、ほんのわずかだけれど「リリコニケーション
の糸口はあるようなのだ

そして片時も僕から離れようとしない

もしかしたら離れられないのかも知れない

あと、お菓子とか甘いモノが好きなのは分かった
「イツは幼女キャラの基本を分かつている

幼女とお菓子の親和性についての講釈はまた今度こじょう

「おう…こりゃ…じゃ…今日はお母さんじゃないのか?…残念だ
わ~

「お母さんじゃなくてスマセンわ~」

八百屋の斎藤さんだ…

人の母親を口説いておいてよくもまあこんな風に接する」とができるもんだ

「それより食材を買ってこいといわれたんですが…ここにありますか？」

僕は母さんに頼まれたリストを見せた

「そんなことより、お母さんは元気か…？いつも会うたびにシャンプーの匂いがするんだけど、どこのシャンプー使つてんのかな…？オジサンあの残り香にクラクラなんだわ…！自分も同じ香りになつてみたいな～なんてな…！ガハガハガハ…！」

…いつも通りゲスいなあ

そんな話を息子の前であるスピリットは尊敬に値するよ

自分の母親がこんな風に見られてるなんて青少年にしたらもの凄いトラウマだぞ！

「はあ…」

「ガハガハガハ…ちゃんと頼まれてたものは用意しておいた！きにするこたあねえ…！その代わりお母さんのシャンプーのメーカー

…

「どうもありがとうございました！母親が待つてるので…！それじゃ…！」

これ以上は僕が不快な思いをするだけなので、品物を受け取つてしまふ逃げる事にした

「……獣神さんだーらしいがー……」

まりもは僕に憑いてきながりつぶやく

「やうだね……リヴァプールの風になつたんだね……」

我ながら適当な返しだ

この時の適当は

ベストな返しと「意味合」と
いい加減な返しと「意味合」がある

買い物、中略

途中でまりもにアイスを買ってやつた
こんなに疲れるなんて…

買い物に行く先で必ず出る母親の話題

どんだけ有名人なんだよ母さん…

まあ、これで必要なモノは全部買つたし…

あとは帰るだけだよな

「だ…だれか…だれかおらぬで」「わるか…」

ふむ、どこからか声が聞こえるぞ

「おい、そこの猿……そう、お主だ。ちょっとこっちへ来てはくれぬか…」

「どうやら僕の『猿』指名のようだ

といふかまた僕は猿なのか。

自分でも認識してしまうのが悲しい

声の主は、細い路地裏から聞こえるらしい
夕方のちょい前くらいだけどなかなか暗い…

「たぶん…僕が呼ばれたんですね…？」

「おお…やつと呼びかけに応えてくれる人がいたでござる…」

「どうにこるんですか？」

「うーんおひるよ…」

「ゴミ捨て場…？」

…？

…！

「ゴミ捨て場に人が捨てられていた

「大丈夫ですか…？どうしたんですか…？…つてええ…？」

僕は捨てられている人を抱き上げて気がついた

この人…

女性だ

しかも生!!べみこ...

「つ…すまぬが…某に食糧を…空腹にやられた…で、」ゼロ

「わ、分かりました…・・・とりあえず僕の家まで…・・・」

僕は女性を抱えたまま家に向かおうとした

「それとすまぬが…」

「ん?」

女性は続けざまこいつ言った

『飯はチユニジア風のクスクスで頼む

ああ…なんか厄介な者を拾つてしまつた

このとき僕は直感でそんなことを確かに感じ取つてしまつたのだ

ほんの少しの勇気が世界を変える なんか規模がでかそう

私は…たくさんの方をした…

いくつも、いくつも

一人の旅はとても孤独…

そういうのが当たり前だと思ってた

以下、食卓

「いやあ、母上殿の食事は大変に美味でござるなあ

「あらあら~。」

「ハツハツハ! これなら毎日作っていただきたいでござるよーー。」

「…ワクワクさん」

…ソリで前回のおそらいをしよう

僕は夕飯の買い出しに行つた訳だが
途中で生ガミに紛れた女の子を拾つた

「それにしても母上殿はクスクスを知つてゐるなんて…何故かこの国はクスクスがあまり普及していないでござる」

それから僕は夕飯の材料と、ここで『いざる』と言つてる時代錯誤な彼女を抱えて家までたどり着いた

「あらあら～、私はなんでもは知らないわ～。知ってる」とだけよ
～

母さん！

「ハツハツハ～～『知るを知るとなし、知らざるを知らずとなす、
これ知るなり』うむ、母上殿はとても聰明な方だ』」
るなーー！」

多分、そこまで考えてないよ母さんは…そのセリフを言いたかった
だけなんだよ…

母さんは、僕が女の子を連れて帰る事を予知していたかのよう
家に帰ると何故か
お風呂を準備していた

そのときも『なんでもは知らないわ～。知ってる事だけよ～
とか言つていたなあ
パクリが露骨すぎるよ母さん…

とても危険な母親だ

かくして、自分の家のお風呂に
知らない女の子が入浴するところドキドキのイベントであったのだが
いかんせん第一印象が生ゴミにまみれた謎の女の子とこいつことで
キドキする余裕なんてなかつたのだった

しかし、お風呂からあがつた彼女を見てちゅうとびっくり
いや、かなりびっくり
長い髪は頭の後ろで結ばれて

母さんが用意していた部屋着からは

…なんと説明したらいいだろうか

Tシャツから身体のラインがしつかりと浮き出でていてもHローベ

感じた

ナイスバディと言つたら陳腐な表現になるだろ？
しかし、出るところは出でていて引っ込んでいるところは引っ込んでい
僕が怪盗の3世だったら、今すぐ服を脱ぎ捨ててベッドにダイブす
るような体つきをしていた

そしてその表情

とても凛としていて、整った顔立ちをしていた。

美人だ。それは顔だけじゃなくて心の強さからきて、この雰囲気がそ
う感じさせているものなのかも知れない

言葉遣い的に…そう…サムライ！よく漫画に出てくる武士娘！それ
を想像してくれれば分かりやすいと想う

「さて…紹介が遅れたでござるな。」

「…」飯を食べ終わり、僕の部屋に来た

僕の気持ちを汲み取ってくれたのか紹介が入る

読者のために謎の少女のまだと気持ち悪いよね！

「この度の恩義、たいへんに感謝しております。拙者…」

…21世紀からやってきた、人間型ロボットでござる

…

「おいいいい！…それ今！…未来ですらねえよ…!…そこは2

…

2世紀から来いよー！」

思わずツッコんでしまった

「ハツハツハー！猿氏は的確なツッコミが出来る素晴らしい御仁でござるな」

中年のおっさんが宴会の時に使いそうなネタを仕込んでくるな……何なんだ……まつたく……

「冗談はさておき……拙者は世界を旅する流浪人……さながら剣心といったところです」

その引用はダメだ！

脳内設定でお前のこゝは涼風真世になつたやつよ……

「なんと……拙者は緒方恵美氏のほつでござるなよ……」

脳内ツッコミを読むな……

それにドラマCD版の声優のほつかよ……

「まずは名前だよ名前……お前はいつたい何者なんだ……？」

「ハツ……これは失礼いたした……名も名乗らぬつえでのよつなジョークに付き合つていただけるとは……猿氏は本当に懐深き御仁……」

本当だよ……自分で自分が恐ろしいよ

「……ティープインパクト」

まつもおおーいきなり何か関連性のある言葉を喋ったと思つたら、映画か！？馬なのか！？

それとも、それだけ深い衝撃だったのか！？

一言だけ言つて、僕の膝の上で食後のお菓子を食べてこる…
これ以上は何も望めんな…よく分からぬさる

「…「ホン。名乗るのが遅れ、大変失礼いたした! 改めて血口紹介
されせていただく。拙者、狭間 あさひ(さざま あさひ)と申します
で」」やる

…変な名前だな

「偽名で」」やる

「偽名かよーー..」

「こやせや、拙者は特定の名を持たぬ故…」

「こま、」の場に置いてはまつね乗るのさうわしてこ名
だと思つてこるので」」やる…

…なんだなんだ

その言葉は何を意味しているのか僕はよく分からないが…

「拙者、世界を旅してこぬ身で」」やる…

「いや、それはさつも聞いたよ」

「やつであったかーそれは失礼した!」

大事なことだから一度言つたとでも言いたいのか

「実はとある目的が……いや……これ以上は……つづむ」

あさひは言いかけてやめる

「セ」今まで言われてやめられたら気持ち悪いし、凄く氣になるよー。」

「いや……しかし、これ以上言つと、猿氏にも迷惑が……」

迷惑？

そんなに危ないことなのか？

生「」で行き倒れてるよつた人間だぞ？

しかし、物語はこういう所から発展するとも言つし……

ここのへんで主人公ぽいことを言つておけば、ラブコメ展開も望めるんじやないか…？

生「」女とラブコメは疑問点だが

イベントを解決していくうちに可愛いヒロインが登場してきて、そこからのキャキャキャウフフの湯けむり恋愛マル秘作戦がああ……もう…！

…こきなり膝の上のまつもが田の前の壁を指差すよつた仕草でつぶやいた

「まつも…それは行けって事なのか…？」のフラグに向かって突き進めといつのか…？」

「イツが意見を言つのは始めてだ

ところが、これがGOサインを意味しているのかは謎だが

「…先ほどから句を言つてこるので、」れるか？」「

そうだった、あさひには見えないんだつたな

…まつも

お前の意見を少しは聞いておく事にするよ…

ほんの少しの期間だけお前とはずっと一緒に過ごしてきただし
GOサインはとれないけど…ちょっとは信頼関係築きあげ
てきてるよな…？」

…これ以上の考えは無意味…！

ええい！まよ…！

「あさひ…僕はこれまでいくつもの大きな悩みを抱えて生きて
いる…！」

僕は嘘は言つていない
ボスや田中の話も聞いた

入学早々、恐ろしい先生にも目をつけられたし
様々な青春のバッドエンドフラグをたててきたけど
今日で終わりにじょうじやないか

「これは理屈じゃないけど、あさひはとても大きな悩みを抱えてる

んだろ？なんといふかさ…僕を心配してくれる気持ちは分かるけど、僕も一度乗りかかった船というか…いちど関わった以上は放つておけないしさ…？」

「猿氏…」

本心だ

もういまさら一つ二つ悩みが増えたって構わないよ

「いやしかし…それでも…」

あさひはまだ言ひよどんでる…

「大丈夫！僕は平凡な高校生だけど、最近は色々なイベントに巻き込まれてちょっとやそっとじゃ動じなくなってきたよ！頼りないかもしけないけどさー僕で良ければ力になるよー」

「…う～む」

「まかせてよー！」

僕が力強く声をかけてから

あさひは少しの間、何かを考えてから声を挙げた

「…猿氏よつ…！感謝するつ…！」

…！

僕は静かに力強く抱きつかれた

「あつ…いや…あ…」

…！

僕は

思春期の高校生には強い刺激だ

なんと男らしい抱擁だらうか

少女漫画のヒロインがこんな風に抱きしめられたら一発で惚れてしまひであらうくらいの抱擁だ

彼女は女なので男らしい抱擁という表現が適切かどうかは疑問だけれども

それにしてもなかなかのおっぱい…

これが巨乳とよばれる柔らかさなのだろうか

バスの時とは違った感触にまたもや未知の扉が開けた気がする…

「…ボイジャー1号」

僕が女子のおっぱいに想いを馳せていると
あさひの背中を突き抜けてまりもが顔を出してきた

…これはなかなかに気持ちの悪い体験だ

人体をすり抜けて顔を出すなんて…それ、なんてホラー？

ふと、まりもと田が合つたような気がした

一瞬にやりとしたように見えた

そう思つた次の瞬間

まりもの目が光つた…！

「…ウワツ…まぶしつ…田からーム…？」

バカな

目からビームなんて単語を日常で表現方法と使用するとは思わんか

つたわ！！

つか、眩しつ！！

なに！？その攻撃方法！？

つていうか、なんで攻撃した！？

思わず、あさひを身体から引き離してしまった

「…おつとーこれは失礼した猿氏よ。思わず興奮して抱きついでしまつたでござる」

「いや、気にしないで…」

僕はまともにやられた田を押さえながらさう言った
僕が空中城の王様なら閃光に田をやられて絶叫していただろつ

実際に相当にやられてるわけだけど…

「それより、良かつたら話の続きを…」

「やつであった…！」

…色々と話の腰は折れたが、よつやく話の本題に入るみたいだ

「…猿氏は召還つてこるのは知つてこるでござるか？」

「マイシはこきなり何を言つて出すんだ？
召還？

「えつと…召還つてこいつと、神話の神様の名前とかが使われちやう
最後のファンタジーとかそういうやつ…？」

「つむ、いかにも。実は拙者、呪還術が使えるだけであるよ」

「はあ……」

あつさりとした告白だった

意味が分からぬし

淡淡と言われてしまったので驚きに欠ける

「さすが猿氏！私の発言に微塵も驚きもしないとはー・相当な修羅場をぐぐり抜けているの」「さるなー！」

いや、普通の高校生ですけど…

「それで呪還術っていうのは具体的に…？」

理解に感情が追いついていないが話をつなげようとする

「つむ、それを今から説明したいと思つ。これを見てくれ」

そうすると、僕が一緒に運んできた彼女の手荷物の中からモノを取り出した

「これは…弁当箱？…え？弁当箱？」

説明するまでもなく弁当箱だった。

ドでかい弁当箱

白米と梅干しが一つしか入つてなぞやつたイメージの弁当箱だ
金属製の大きめの弁当箱だ

「や～まだ～！」

「えー？ どうしたのいきなり！？」

いきなりあさひが奇声をあげた

「これは失礼した。」この弁当箱を見るとつい『山田』と叫びたくなるのだ。

よく分からぬいが、コイツは残念な美人なんじゃないか… そんな風に思えて仕方がなくなってきた
確かにドデカイ弁当 略して『ドカベ…』

「おつと、猿氏！ 話がそれてしまつたなー。この弁当箱は私にとって大事な召還機なのだ」

「意味が分からん… もつと魔法陣とか杖とかそういうの使うイメージがあるんだけど…」

「ハツハツハ！ 猿氏よ！ ゲームや漫画の見過ぎではないでござるか？」

いや、ゲームとか漫画くらいしか召還つて単語を結びつける材料が僕にはないんだよ！

「つむ、しかしまだ若輩者ゆえあまりに巨大な生物は召還するにはいささか不安なのでな！ 大体は異次元から物質を取り出す能力を多用する」

「異次元から物質…」

「そりゃ…分かりやすく言つなら『異次元ぼけっとお~』…」

それこそ猫型ロボットのようなニコアンスで僕に伝えてきた。
こんなところで前半のボケのフラグ回収をするな！
しかも、そのガラガラ声は田のはうだよねそれ…

「よし、では例を実演してみるで、じわるか…」

そう言つと真剣な顔つきになり、ゆっくりと弁当箱のふたを開けた
それと同時に弁当箱からまばゆい光と煙が飛び出した

あまりの煙と光に僕はたまらず田をつぶつた
今日はよく田をやられる日だな…

ところが、これは本当に召還術なのか！？
これが手品だとしたら、とんでもないイリュージョニストだ

数秒間、田をつぶつた

そしてようやくおさまったと思いやつくりと瞳を開けた
そこに…

「うむ…実際に見事な輝きでござるな」

「つおー危ないーなんていつも持つてるんだ

その手には大きな剣が握られていた
シャレにならんぞ！

「ハツハツハ！召還は凄いで！」やがて……のび太氏……

「いや、のび太くんはそんな物騒なモノ欲しがらないから……」

まさか、昨今の日本という国で

円卓の騎士の王様が使つてゐるよつたソードを見る機会があるとは思
わなかつた

「おっ！猿氏よ！勘がいいな！いかにも……これは円卓の騎士の王
が使つていた剣らしいぞ……」

「え、え、ええええ！？それってエクスカリ……」

そう言い終わらないうちに
あさひは僕の方を向いて
大きく剣を振り上げて

え？

僕に……

斬り掛かつてきた……！……！

「うわああああああ……」

ひたすらに絶叫した

僕は何もする事が出来ずに成す術もなく…
斬られて…死をむか…

⋮

…えなかつた

「あれ？…あれ！？あれええ！？」

僕は斬られた箇所を確認するがまつたく傷跡がなかつた
わずかばかりの痛みが僕の肩に残るだけであった

あさひは不敵な笑みを浮かべながらこちらに向いていた

「ハツハツハ！安心してほしいで」じれるよ猿氏…！」

「いきなりなんてことをするんだ…！」れじや、殺されるまでもなくショック死するところだつたじやないか…！」

「大変に無礼な事をしたことを許して欲しい…しかし、身をもつて召還術を体験していただくのが一番良いと思つたので」じれるが…」

「謝つてすむ問題でもないよ…！なんでそれを最善策として考えちゃつたかなあ…？」

普通の人間なら、こんな事されたら激怒とかそういう話じやない
なんだかんだ言つて許してしまつている自分が憎いぜ…

「つむ！ 実は召還とはこちらの世界に呼び寄せるだけじゃなくて、あちらの世界に逆に自分自身を召還する事も出来るのだが…」

その話と今の流れは何か関係があるのでうづか

「それを利用して異次元を旅するのが拙者の真の目的なのだが、一度だけ次元と次元の間に迷い込んだ事があつたのでござるよ…。」

異次元旅行：名前だけ聞くと凄いことに聞こえるな…

「さすがの拙者も抜け出すのに苦労したでござる。その次元の狭間でとある御仁にお会いしてな…そこで奪つ…もとい、いただいたものだ」

「いま奪つたって言いかけたよねー！？」

とんでもない人だった！

しかも奪つたのはあの伝説の聖剣エクスカリ…

「違ひ…」

「…え？」

えくすかりぱーだー！

通りで無傷で済んだわけですよ…

なに？世の中には本当に存在すんのアレ？

ビッグブリッジの人は理不尽に幻の聖剣を奪われたわけだ…

「うむ、つまり拙者はこつやつて召還術を使って世界を旅したり、色々なモノを召還できたりするわけでござるよ。」

いつの間にか手に持っていた剣・エクスカリバーは消えていて弁当箱だけを抱えていた

「何か…凄いモノを田の辺たりにしちゃって言葉も出ないよ…」

当然だ

ラブコメを望む一般高校生がファンタジーに巻き込まれてしまったわけだから
むしろここまで普通に対応出来ているのはゆとり教育の弊害なのであろうか

あさひの存在だけで、ファンタジー小説が一本かけそうな勢いだ
そのくらいのファンタジーが田の前で繰り広げられている

「うむ、猿氏が知らないだけで世の中にはまだまだ知らないモノがいっぱいあるということござるよ」

まったくをもつてその通りだ

一般高校生は世の中を全然知らない
そんなことは当たり前だろう

それにも…

こんな事実は大人も知らないだろ？

『異世界の召還師』

そんな肩書きはロールプレイングゲームでお腹がいっぱいだ
履歴書の職業欄にすら書けないよ

「ちなみに、異次元への自分自身の召還はともかくお腹が空くので」
さる。たまたまこの世界にやつてきた時にドリミ捨て場に着陸して、
そのまま空腹で動けなくなつていて「うわあー！ハツハツハ！」

来たばかりで生ドリミに突っ込んだなんて、とても不憫な話だなあ

…ふむ

ここまでの話の中ドリミと思ひた疑問が再燃してきた

「そんな召還師様がどりしへの街…いやこの世界にやつてきたんだ？」

「うむ、根本の疑問を聞いてきたで」「なるなー…そして、これから話すことは召還とかそれよりもヤバい話なんで」「なるなー

召還よりヤバい話ってなんだよ！

黒マテリアでメテオでも降つてくるのか！？

「実は拙者はとある人物を追いかけて世界を旅して回つてるので
「やれるが…その人物がこの世界にいるところのを感知してやつてきたの」「やれるよ」

「待つて…あさひ以外にも時空だか次元だか飛び越えられるヤツ
がいるってこと…？」

「いかにも…私の家系は代々召還師の家系で、何百年ものあいだソ
イツを追つてこないしので」「やれる」

「…うう…よく分からぬ…」

「まあ、実際は拙者の母上と父上からそう聞いて育てられたといつだけで、イマイチ実感も湧かない話でござる」

そういうつて何ともいえない顔で苦笑いをされた

「どうやら、そのとある人物は様々な世界にまたがって観測されていて、こつじこに現れるかがギリギリにならないと分からないうらいのござる」

「難しい話だな…」

「うむ、数百年の間にランダムに出現してその世界に災いをもたらすところの話でござるよ」

ますますファンタジー色をおびてきた話だ
世界に災いつて…まるで想像がつかない

「やして、どうやらこの苗美という地にその存在の残り香を確認したでござるー」

「え？ こわつーー世界規模で災いをもたらす存在がここにこもつていつのー？」

とんでもない話だ。

そんな世界規模の災いの話が僕の部屋でされているのも不思議な話だ

「でも残り香があるだけで詳しい事は調べてみないとなんとも分からないのでござるよ…」

大体の話は飲み込めてきた気がする

ここまで聞いてきた感想

「… 極々、一般市民で未成年の平凡な高校生男子にどうこう出来る問題じゃねえ！！」

それはそりだらうと

あれだけ

協力するよー！

と格好よく言つておいたくせに
これは非常に格好わるいぞー！

なんか、ファンタジーに少しだけワクワクして忘れてたけど
僕はメラもホイミも呴えられないわけで…

「つむ！拙者からの話はこうこうとどうぞ！」猿氏ー。

「は、はひつー？」

「まずい…これはなにをお願いされるんだろうか…

「…一宿一飯の恩義ー！そして、拙者を救つてくださったー…その寛大な心に報いる為に猿氏に力を貸す事を約束しようー。」

…？

「やうだな…さしずめ…拙者は未来から来たネコ型ロボット的ポジションだと思ってほしくでござる」

なんだ……と……？

「ところ訳だ、拙者は今日から『元お世話』なる……君の為だ！」

「オイ……体よべ！」を宿代わざりにして「じゃないだらつない？」

！？

「まで……」の家主は母さんだ……それに男女が一つ屋根の下で暮らすなんて不健……」

「あらあら……こじやないの。私もドラえもんか21Hモンみたいな子が欲しかったのよ～」

「ぬわん……こつからこたとかそひこつしち ハハあえてしなこよ……それよりも本当にここのー？」

それに21Hモンまけみつと違ひよ……

「タチ悪いな……ヤハ金みたいだよー……」

「おお……母上殿……」のような得体のしれない私に対する慈悲…
アナタが神か！？」

「あらあら、狭間さん~私は死神と契約なんとしてなにわよ～？」

「じつかりと息子どのはお守り致す故！安心してください…」

「あらあら～頼もしいわね～。」

「いや…もう何も言うまい…僕は疲れた…」

「あ～、せうそう～ひちへこひしあい

僕は母さんに手招きされる

何の用だつて言うんだ？

母さんは僕にじつそり何かを手渡される

：！：

「こでは言えない…

何を考えているんだこの人は…

ちゃんとゴムつけないとダメよ～？無計画は人生を棒に振る事になるわ～

女の子の目の前で息子に避妊具を渡すヤツがあるか…！
しねえよ…！

最悪だ！

実の母親に性事情を心配されるなんて…

「母さん…ふざけるのも大概にしてくれ！わかった！分かったから…もう出て行ってくれ！あさひも…！あとは俺一人にしてくれ

僕は一人を部屋の外に追い出さうとする

「ちよ……こわなつどうしたんで」「やれるか……」

「あらあら～」

「とにかくー詳しい話は向こうで一人で話して貰ってくれ……」

「難しいお年頃なのね～」

「悩める青少年といつ」といわれるなー。青き春とは見事な表現と言えるー。」

僕は扉を閉めた

「ふう……」

しばらく一人にしてほしかった

「…ひすけす」

そうだった、まりもがいた。
離れようにも離れられないしな

「今日はもう寝るが…明日も学校だし…」

「…もんていぱこさん」

僕は電気を消してベッドに入った

まりもがあとを追つてベッドに潜り込む

やれやれだ…

こうして、僕の激動の休日は終わりを迎えたのであった
悩み事が増えても大丈夫とは言つたけど

これはなかなかに頭の痛い事情だ…

そんなことを色々と考えていろつひに睡魔が襲つてくれる…

お…やすみ…な…とい…

自分が蝶々なのか人間なのかよく分からぬ

僕は深いまどろみの中にいた

そこは見た事もない景色が広がっていた

「どこだよ…」

現代では考えられないような建造物の数々
近未来的なようで、とても古いようにも感じる
とても栄えた…いや、まさに繁栄の絶頂にあるかのような都市が見える

その中でも一際に僕の視界を捉えて離さない建造物がそこにあつた
とても…とても…大きい…

言葉では表現出来ない

今までにこんなに大きな建物は見た事が無い
それどころか地球上にこんなに天高くそびえ立つ存在があつただろうか
雲すらも突き抜けんばかりの

塔…と表現するのが的確だろうか

とにかく僕の短い人生の中で想像出来る大きさの範囲を遥かに超えた、それはそれは大きな塔が目の前に存在した

…そびえ立つ巨大な塔にはたくさんの明かりが灯っていた
そこに住むたくさんの人々の姿が目に入つた

そこで暮らしている人たち

それは幾万年の時が経っても変わらない。人々の営みの景色

しかし、どこか寂しげで、儚げ
存在を遠くに感じてしまう

まるで僕とは大きな隔たりがあるよひにも感じた
いま僕はこの街に存在している…
それにしてはとても俯瞰的で、息一つで消し飛んでしまってかうなく
らいだった

僕はその塔を駆け上がった

本来ならば、これほど塔を駆け上がるなんてのは無理であろう

しかし僕はあくまでも俯瞰

俯瞰のまま塔の外壁を沿つて流れるように昇つて行く

この繁栄しきつた街の中

たくさんの人々

それなのに

とても静かだ

音がないというのは

とても心地が良い

そして…

…とても不安だ

僕は塔の一一番上までやってきた

見下ろす

今までいた場所がとてもなく小さくなっていた

片手ですべてをつかみ取れそなぐらいに

そして僕は気がつく

どこまでも続く大きな星

地平線が遙か彼方に見える

地球の丸さを計るにはこれ以上にない絶好のロケーションだった

僕はひとしきりの感情を堪能した後に塔の中を覗き込む

塔の最上階は大きなホールのような広い部屋だった

そこには何百人の人が一人の女性にかしづいていた

女性は何百人の前で、大きな玉座：という表現が正しいと思う

玉座に鎮座していた

場所が場所だ

その女性の姿はとても莊厳で、同じヒトであることすら忘れてしま
いそうな位の輝きを放っていた

女性は何かを呴いている

すぐ側にいた男性が近づき耳を寄せた

男性は女性からある程度の言葉を受け取ると

全員に聞こえるような大きな声で女性からの伝言を伝えていた……と思つ

思ひ

なぜ『思つ』なんて単語を使ったのかといつと

僕には聞こえないからだ

あくまで俯瞰

僕はこの場においてはならない存在なのだろうか？

そつしていると、玉座に座っている女性と目が合つたような気がした

けて…

その美しい顔を僕の方に向けながら何かを呟いた

「え？ 何…？ 聞こえないよ…」

「…けて」

僕は必死に聞き取ろうとする

彼女に近づけない…

遠い…

あまりにも遠すぎる…

ああ…

……とたけけ

僕は目を覚ました
あ～、ぼーっとする

「…とたけけ」

「うわっ！…まりも…！」

僕ははつきりと田を覚ますとまつもに馬乗りされていた

「…とたけけ」

「任天堂！？」

あとすこじで聞き取れそつだつたのに…！

なぜ夢とシンクロするような単語を言うのかなあ…！

「おお、起きたので、じめかのび太くん

声の方を振り向くとあさひが押し入れ…もといクローゼットから出てきた

「ネコ型ロボットか…！」

なんだのび太くんって…！

「…寧に布団まで敷いてある

僕はまろもを抱え上げ床におろしてから、深呼吸をしてからあさひに向き直った

「なんであさひがここにいるんだ…なんでクローゼットの中にいる…！」

「田覚えめからいきなりツツコミが冴え渡つていいでござるな猿氏！…」

朝からツツコみたくなる状況下を作る方がすげえよ…！

「しかし…いきなりシリアスな文章から入るから違つ小説が間違つて投稿されたんじやないかと心配したでござるよ

「こきなりメタ発言で心配しないでくれ…！」

「おおつと一質問に対する返答がまだでござつたな…拙者…猿氏を守る為の警護の任があるでござる…そこで猿氏が就寝したあとに忍び込んでクローゼットに睡眠道具一式を運びこんだでござるよ

僕のセリフに被る勢いで、僕の部屋への領海侵犯が告白されていた

「勝手に人の部屋に入るなよ…しかもなんでクローゼットチョイスだ！」

「いや、人の家に居候する時の基本は押し入れだと読んだマンガに書いてあったのだが…」

「ネコ型ロボットか……」

「コイツ、絶対にそれしか読んでないだろ……」

「いや……しかし、よく考えて欲しいでござるよ猿氏。これはとても纖細な問題点を解決しているでござる……お互いのプライベートの侵害を、部屋と押し入れを挟む扉……この一枚の隔たりで見事に解決しているのでござるよ。これは熟年夫婦のマンネリな関係にも有効な手段になると私は気がついたでござる。この一枚の隔たりは夫婦仲を取り持つ大きな一步になるのではないか……機会が来たら学会にプレゼンしようと思つただが……」

「俺が旦那なら押し入れを寝室にされた時点で別れるわ……」

あさひはいきなり何を言つんだ……

学会にプレゼンするほど発見ではないぞそれ……

「ハツハツハ……まあ良いではないか……私は受けた恩は全力で返す。そう心がけているのだ！私は、猿氏のプライバシーを尊重して最大限の譲歩として口を寝室にしたのでござるよ……」

あさひは、就寝中に勝手に部屋に入ってきた時点でプライバシーの侵害をしていて気に気がついていないのだろうか？

しかし……

あさひは黙つていればそれなりに見れる顔だ
確かにそんな子と同じ部屋になると考えたら
僕の精神衛生上よろしくない
この壁の隔たりは確かに大きいかも知れない

……ってそれじゃ僕が、そこを寝室にしていいですよ。って認めて

るみたいじゃないか…！」

「ところがで、ふつつかものですが」これからよみじへお願ひするでござる」

「なつ…」

あさひは姿勢を正し、深々と頭を下げた
僕は不覚にもそのセリフに照れてしまい言葉が出なかつた
それつて嫁入り前のセリフみたいじゃないか…

「では早速…朝食のどら焼きでも食べるでござるか？..」

「……ネコ型ロボットか…！」

さすがに朝食どら焼きはねえよ…！

どら焼きとか言えば何でもネコ型ロボットになると思つてんのか…！
たけしのモノマネでとりあえず『バカヤロウ』とか『コノヤロウ』とか言つとけばいいみたいになつてるわ…！

「ああ…もうーそれより母さんは？」

「母さん？おおー猿氏の母上なら朝早くに出かけられたでござるよ。
なんでも、『機関に気がつかれた』にからりから機関のアジトを呪き
に行かなければならぬ』だそつござる」

「こつものヤツか…」

母さんは謎の『機関』に狙われている…

つていう設定だ

とても巨大な組織で、国家間にまたがつて裏で活動している

つていう設定だ

「それと、伝言を預かっているでござるよ」

「なに?」

ゆづはおたのしみでしたね

「ふむ…なにかの暗号でござるつか」

あさひは首をかしげて考え込む

しかし、僕はそのメッセージが何を指すか分かっていない

「そのセリフが言いたかっただけじゃねえかあああ!-!-」

まったく…自分の母親がなぜ宿屋の主人のようなセリフを言つのだ

それにしても冷静に思い返すと
中々、ゲスの勘ぐりな発言だよ。

今のじ時世ならセクハラになりかねん発言だ
良かつたなRPGで!!

まあ僕が言われたのは母親なわけだけど

そんな元ネタを思い返していくと、まりもが服の袖を引っ張った

「…わざつていいとも」

「ん？」

僕はまりもの声に耳を傾ける

「…めぞましてれび」

ん～…ちょっと意味が分からぬかな～
ちょっとどどこかかなり意味が分からぬ
なに?

テレビが観たいの?

「おお、そういえば猿氏よ。今日ほの世界では…ハイジッヒ
ものではないか?」

「…ハイジッ?…………平日……」

僕は急いで時計を確認する

「ラウツ…チエーンツ…」

何故か、ヴァーチャなファイターの中国人キャラクターの名前を叫
んでしまつぐらに驚いてしまった

みなさまお気づきだと想つけど

今日は平日

そして僕は高校生

今日は学生の義務として

教育を受ける為に学校に行かなければならないのだ…!

正確には義務教育ではないので、義務つてほどでもないんだけど…

僕は真面目なのだ

時間はギリギリ…いや、今から走ったとしても間に合つま…

昨日は早めに寝たはずだ
しかし、ドタバタなイベントのせいで予想以上に疲れていたのもあるだろう

そして夢の…せい?

寝てんのに疲れるって言つのも変な話だけどさ

「猿氏よ…状況は分からぬが切羽詰まつてゐるのだな…?」

僕の慌てふためいた姿に何かを感じ取ってくれたのだろう。
そんな言葉をかけてくれた

「ああ…急いで学校に行かなきゃいけない…ここから走つたら…1時限目を少し遅れるくらいか…?」

「なにいい…?猿氏は線に萌えるとこうのか…!」

「1次元萌えじゃねえよ…!萌えとか言つてないし…どんな聞き間違いだよ…!」

1次元萌えとか上級者すぎるだろ…!

「つむー…さすがの拙者も一次元萌えと言われたら引いているところ
でござった…」

そりゃ そうだろ! よー!

なかなか高度な次元の属性だよ
いや、低次元だけど

… つていうまこと書つてる場合じゃない…!

「とにかくー!! 時間がないんだー!! 僕はもう行かなきゃいけない!
話は帰つてきてからにしてくれー!!」

そう告げて、僕は部屋からあさひを追い出そうとした

「待たれよー!!」の私に良い考えがあるー!!

僕の行動を静止するかのように手をあげた

「なこー? 悪いけど[冗談ならまた今度にしてくれー! 本当に]急がなき
や

「

「つむー、つまつこーからその場所まで遅れずに行きたいのだなー?」

「それが出来たら苦労しないよー!!」

「あー、分かったー!! 拙者にまかせるでござれー!!」

せつこうとクローネットの中から例の凹透鏡を取り出した

「あ…まさか…?」

僕は一筋の光明を抱いた
こいつは召還師…そして、召還機で召還と呼ばれるもので異次元を
旅してきた

僕の目の前で見せてくれたモノは確かにあつた
イケル！…いけるぞ…！

「やうが…その召還機を使って

「こや、無理で！」わる

「やうか…やうやくたの

ええええええ！？」

そうくるか！

あげて落とす作戦か！！

コイツがそんな小悪魔なヤツだとは思わなかつた！！

とんでもないアゲハだ！！

「ハッハッハ！…これは異次元と繋ぐ為の装置で、この世界の中をワ
ープ出来る代物ではない…決してどこでも行けてしまつよなドアで
ぱいざらん」

それならお前になにをまかせればいいんだよ…！
その余裕はどこからくるところのか…！

「わっから、女の子がフレンドリーに接してきて、コイツ俺に氣
があるんぢゃね？と思つてたら次第にこつちから意識し始めちやつ
て、告白したら、『ゴメン私そういうのぢやないから…これからも良
い友達で…』って言われた時の顔をしているでござるみー。」

「しないよ！ そんな思春期の揺れ動く気持ちをこの短時間で感じたとは思えないよー！」

結構、的を射てる：のか？

「しかし、安心するんだ」『それなら』。『』のPC端機では無理

そういうと弁当箱… もと二畳のふたを開ける

卷之二

僕は昨日のまばゆい閃光がでてくるのではないかと、ひとつに身構えた

「あれ？なんで？昨日みたいにピカーッ！とかモワッ！とか出ない訳？」

「ああ、あれで『じれぬか。やはり魔法で重要なのは霧雨気と演出だ
ひとつと思つて 過剰な演出をしてみたで』『じれぬーーー。
へへー。」

「へへー...じゃないよー! なんでわざわざそんな演出したのー?」

拍子抜けだつた

開いた

弁当箱の中に手を突っ込みガサゴソと何かを漁っている
しかし…不思議なモノで、弁当箱の中に腕がすっぽり入っているあ

たりホンモノなんだな。と感じる

「フフフフ…見て驚いちやダメで、」『それより…拙者がこの世界のどこへでも行ける道具を持つてこるのは想像もしてなかつたで』『それから?』

「いや…だから最初からそれを期待してたんですねナビ…」

「見よ!…猿氏よ!…これで、世界中どこへでもワープ出来る画期的な道具!…その名も『ジーリ』でも」

「ネコ型ロボット」

取り出した手を高く上げようとしてゐるあわひ
発言を先読みしてシッコんでやうつと思つた

「ウォシュレット式トイレ…」

「…トか…って…何か携帯式のトイレみたいな名前になつちやつたよ!…」

僕は耳を疑つた

どこでもウォシュレット式トイレ…?

いつでもどこでもお尻は清潔に保ちたい人に最適そつなネーミングだよ!」

「ハツハツハ!…驚いて言葉も出ないで!」『それから!…』

：

手には白鳥の形のおまるが握られていた
「おどり珍しきぐらにベタなおまるだ。THE・オマルだ！－！」

「よし……猿田よ……参ねや……」

「どこのだよ……おまるでビリに向かえつて言つんだよ……なに？
下水道にでも行こうつかうのかー？」

「ハツハツハ！ 龜忍者のコータンとペザタイムでもするのでござるか？」

「ここのテタラメだ！ オマルで世界中にワープ出来るなんて… H
イプリルフルは過ぎたぞ！？」

「おつと、世界中どこへでも… ところのせこせか語弊があつたで
ござるよ…」

僕のシシ パ///を無視して話を進める…

世界中のあつとあらゆるトイレにワープ出来るド、ジヤ

るッ … …

「凄いのか凄くないのか分からな」よー…

いや、凄いけど…

それさえあれば、トイレに間に合わなかつた悲しき迷える子羊たち
がどれだけ救われた事か…

「それで…その使用方法は…？」

僕は寝起きながら、すでに疲れてしまっていた

「つむ…実にシンプルでござるよ。拙者がこのおまるに魔力を込め
る

おまるに魔力を込めるというシユールな言葉が想像以上に面白くて
笑ってしまいそうになつたがこれ以上は無駄な時間を過ぐしたくな
かつたので必死にこらえた

「やうしたら、このはしつに付いている『ヒート』というボタンを
押せばワープが始まるでござるよ」

「『ヒート』じゃなくて『ヒート』なの…? 誰…?」

とんでもないオマルだ!!
ヒテってどんな機能だよ!!
ヒテくんがお尻を拭ってくれる機能でもついてんの…?
誰が得すんだよ!!

「得するのはヒテくんだ。ヒテくんは人のお尻を拭うのが好きなん
でござる」

「変態じゃないかヒテくん…」

とんでもないヒテくん…

変態といつも紳士とかじやなくてただの変態だよ…!

「いや……でも……オマルでワープするのは抵抗があるところか……」

そりゃ そうだろ？

そもそもワープ 자체が初体験な訳だし
それをオマルするなんてどんなにもない勇気がいるよ

「虎穴に入らなければ虎子は得られんのだぞ猿氏よ……普通に考えて虎の子供が欲しいとはあまり思わないぞ」「が、がんばるが

「ことわざに茶々をいれるなよ……」

「よし！ 次こそ行こうではないか猿氏よ……」

「待つて！ 待つて！ ！」

僕の言葉を無視してあさひは向やう集中しあじめた

「 む…」

すると、手から青白い光が出てくる

「マイツやつぱ本当に魔法とか使えるんだな…

青白い光があまるに移っていく

これがおまるでなければ本当に格好がついたと思つ。

「青白く光るオマル…」

非常に可愛らしく白鳥がとても不思議な光を放つている

「ふう。これであとはボタンを押すだけだいじるよ」

僕は田の前にオマル…便器とも呼ばれるものを差し出された

「これで…学校まで一瞬で行けるんだな…?」

「いかにも…このボタンを押せば学校の…トイレまでひとつ飛びでいられるよ」

「…どうだつたトイレにたどり着くんだよね…
どんな感じでたどりつくんだらうつか

「よし…押すぞ…」

僕は息を呑んだ

そつと…指をボタンに近づける

「あ、そつこえれば言い忘れていたでいざるー。」

「え?」

「いま何を言おうとした?

僕は既にボタンに手をかけていた

「『ヒゲ』のボタン以外を押すと…」

え?ヒゲ以外のボタンを押すと何かあるの!?

僕は自分が押したボタンを確認する為に視界を指先に落とした

ああああ…

僕は期待を裏切らない男だ

もちろん悪い意味でだ

見事に僕は

『ヒート』の下のボタンを押していった

「猿氏！…そんなお約束まで守るとは…！拙者…ますます感服いた

s

「

あさひの声が遠く遠くに聞こえてくる

どういうことだ？

さつきまで目の前にいたのに

あれ…？

何か目の前が暗く

僕が最後に記憶にあるのは『ヒート』の下にあるボタンに書かれた文字だった

『エシキ』

も
はや
ただのエックスな日本

じゅ

な
い
か

「Jの世界はたった今生まれたと言つても私はそれを認識出来ない

夏の匂いがかすかに香り始める
少しずつその日差しが眩しく感じられる太陽
あ..もうすぐ期末テストじゃん

ちょつとした都会と田舎が行き交う
そんな町並みを駆ける

新しい場所にやつてきた
まだちょっとだけ見慣れない景色が続く学校
舞台は高校：

夏の描写以下略

私は他の人と同じでありたい

そんな事を思つてるとかいなとか
人間関係に臆病になりがちで..思春期なら少しは考え方ひとつそんな
願望を胸に秘めていたりする

思春期ならちょっとくらい..恋愛とかに興味を持つちゃうと思つ

もれなく私もそんな一人だ

『B君が嫌いな女子なんていません!』

あ、違つた

なんか名前っぽく聞こえるけど、とんでもない話だよね

訂正するね

『恋愛小説みたいな恋がしたい！…』

女の子なら分かつてくれるよね？

素敵な出逢い ドキドキのイベント 甘い誘惑 そんな想いが出来る高校生になりたい

…って言つても何もしてになかったんだけどね

私の人生の指標は…あんま考えた事ないや
人間関係だけは大事だと思つて色々とあくせくしてきたけど
人生の指標つて呼べるほどじゃないもんね

小学生のときはひたすら本を読んだ
中学生のときはひたすら本を読んだ

以下略

まとめると
本を読んだ

あれ…？

…？

本しか読んでないみたいに思われかけつ

そんなどないんだよ？

それに、いつ本ばつか読んでるって言つて凄く根暗な図書委員的な女の子を想像するじゃない？
それ間違いだから

本を読む以外にもたくさんしたよ？

でもね、自分の為だけにしていること…って考えたら本を読むくらいしか思い浮かばなかつた

学校に行くのも 勉強するのも
ぜんぶ他人のため？つていつたら変だけど
他の人に迷惑がかからないようにしてゐるって感じがする
結局は目立ちすぎないくらいにやつてるだけのことで
結局は自分の為つていうことになるのかな？

…まあ、どうちでもいいかあ

そういうえば、今日は夜遅くまで本を読みすぎて寝坊 遅刻ギリギリ
になつてしまつた

少女マンガ的に言えば

『キヤー 今日も遅刻遅刻うーー！』

と言つながら舌をだしてHヘッとかやつちやうかんじ

こんなに悠長に考えてはいるけど

実際は心底焦つている

むしろ、そこに少女のかけらも見受けられないほどに焦つてる
女性の朝は戦場つて言葉があるくらい

それこそスタートをくわえて走るなんて、自分のことながらベタす
ぎる…

私は予定調和つて言葉が好き
お約束つて呼ばれるヤツかな?

『好きな言葉はテンプレート…!』

絶対に戻つてくる…つて言葉は最近の流行りだと死につながりそつ
だけど

愛する彼女が帰りを待つていると、扉が開いて笑顔で生還して抱き
しめ合つ

そういうハッピーハンドが好きなの

そうやつていけば必ず平凡な日常が戻つてくれるでしょ?
終着点は必ず□□

そういうものに凄く安心感を覚える
人生もそうやつていけば必ず幸せになれるよね?

セリフしている内にすでに曲がり角を何回か通り過ぎている

今日は珍しく遅刻しそうな日なので

普段の通り道をやめて、最短ルートを選んでるんだ

それももうすぐ終わり

次の曲がり角を曲がれば学校まで一直線!!!
良かった…なんとか間に合つそう…!!

今日も一日何もなく終わり…

ウワップス…!!!!

「イツテエエエ！...アニキイイイ！...骨が！...骨が折れちまいヤ
たア！...！」

「え？」

「オイ！...大丈夫力！？...」りや、ヒテエ骨折だあ...」

「え？...え？」

「おいいい！...ネーチャン！...」のオトシマエビツヤつてツケテク
レンダアアン！？」

「少し待つて欲しいかな

この現代社会において、「こんなにベタな」とがあつていいんじょ
うか

遅刻の間際に

走つて

曲がり角でぶつかる

この場合はヒヤツハーツバギーに乗り回すよつな輩ではなくて

「...えしてよ」

「あ？お前 ナに言つて サクセション！...」

「ああ...もづ...！」

「瞬

ほんの一瞬だつた

「兄貴イ！……ああ、兄貴のアーニキがアネキになつちまこやしたあアー！」

私に絡んできた不良はその場でづくまり悶絶していた。

「テメエ……なにしやがんだ……アウフタクト……」

掴みかからうとした瞬間に空中に投げ出される世紀末的不良

「ああ……またやつひやつた……」

勢い良く地面に叩き付けられる不良

強く憤る私

「……えして」

私は弱く呟いた

不良は自分に何が起つたのか
そしてあまりの衝撃に田を白黒させていた

「ア……が……」

不良たちは言葉にならない声をあげ空を見上げていた
その不良たちに更なる追い打ちをかけてしまつ……

「返してよーー私の出逢いフラグ……」

大声あげちゃった…

「おかしいでしょ？ねえ？おかしいでしょ？」Jは『イッタタタ…
どに目をつけてるのよ…このオタンコナス…』って私が謎の
イケメンにぶつかるシーンのはずでしょ！？お互いに罵声をあびせ
あう。今朝からヒドい目にあつたわ～！って言いながら授業が始ま
つたら、転校生を紹介されて『あ～！あのときの…』って言いな
がら渋々隣の席になつちゃう展開になるべきじゃない！？」

自分で言いながら、実に論理的じゃないと心では思つてしまつた
オタンコナスなんて久しぶりに聞いたよ…

倒れている不良を踏みつけ更に続ける

「それがなに！？どういふこと…あんた達…出る話間違えてん
じやないの！？アタシが一子相伝の暗殺拳の使い手じゃなくて本当
に良かつたわね！…本来なら『ひでぶ』とか『あべし』とか言いな
がら炸裂してん所よ！？」

そんな『本来』はいつかに存在しないけど

「アンタたちいくつよ！？もういい大人になる年齢でしょ！？いつ
までもバギーにまたがつてヒヤツハーするようなことしてんじゃな
いわよ！…あまつさえ、こんな可憐な女子高生にイチャモンつける
なんて……マンガのやられ役もいとこじゃない！？」

お前はここつらのかーちゃんか！…ってね…

「分かつたら早く行きなさい……次にこんなことしたら分かつてる
でしょうね？」

私はありつたけの不満を全てぶつけた
しかし、時はすでにお寿司…じゃなくて遅し
うずくまつた不良たちはモノの見事に気絶していた

「…つたぐ、せっかく冒頭で可愛い女子高生してたのに…散々じゃ
ない…」

少し動いたので乱れた制服を直しながら呟く
うん
実はね

私が全員倒したの

いや、全然そんな気はなかつたんだよ?
でも小さいときからの条件反射と言いますか…

ここで少しだけ自己紹介

私は本が大好きな普通の女子高生

だけど、父親に小さい頃からちょっととした格闘術を習わされてて…
気がついた時には『史上最強空前絶後の女子高生（父命名）』って

いうありがたくない称号を頂いてしまった

周りが勝手に言つてるだけで私は微塵も思つてないよ?

だからこそ…普通でありたいかな…
こんなのは絶対に人に見せられない

私は普通じゃないもの…

今まで一度だつてボロを出した事はないと思つ

「面倒！」とに絡まれたらバレないよ！」

瞬殺してきたし

ちやんとビデオにでもこる可愛い女子高生を演じてきた…つもり

「…つて、今まで時間がさらに大変なことに…？ヤバい…急がな
きや怖い怖い先生に怒られちやつ…！」

私はビシッ！と切り替えて走り出たつと
 した…けど…

「…OH。クレージージャパーズガール…」

「カツカツカー！日本女子高生つてのはこんなにツエーのか…！
オラ、ワクワクすっぞ…！」

そんな戦闘民族みたいな発言を聞いた
聞いてしまった

「OH…！…ボス…！…カカロット…！…オシッコあると強くなるつて本
当…？」

それはターちゃんだよ…！
じゃなくつて…！

「ええつ…！…イヤツ…？…なんで…？…そんなど…！」
？」

私は気が動転していた

今まで

今の今まで

一度も気づかれた事はなかった

周りの気配は常に気を配つてたし
へマなんて一度もしなかった

「カツカツカ！お前はあいつらのかーちゃんか！！説教よかつたぜ
え？」

ハイイ！！全部聞かれてました！！見られてました！！

：
「 そう 全部見ちゃったのね 」

気が動転してた私は相手のペースに飲まれかけていた
こういう時に日頃の鍛錬（強制）が役に立つ

呼吸を整えて

自分の気を落ち着かせる

「ジャパニーズガール！！タンデンコキューホー！！ファイティン
グガールネ！！」

…「ふむせい、周りの音をシャットアウト

徐々に冷静さを取り戻す

「 よし！！ 一瞬で決める…」

私はこいつらを全力で倒す
都合良く記憶を消す！！

私は構えと同時に相手に向かって行つた

「カツカツカ！…威勢が良い異性…なんてなー！カツカツカ！…」

「アナタ 同性じゃない！…」

くだらないオヤジギャグをいう女子高生ね…（私も女子高生だけど
目の前の女子に向かつてグングンと距離を詰める
それなのにその表情はへラへラと笑っていた
なんなわけ？アレを目の当たりにしてその表情とかふざけてるの?
自分の力を過信してるわけじゃないけど
余裕の表情に少しだけ苛立ちを覚えた

私は相手が痛がる間もなく一瞬で

一瞬で

？

「さつきの技：確かにこうだったかあ？よつと

」

私の視界がぐるんと回つた

と、同時に背中に少しだけ痛みが走る

？

…？

わけがわからないよ

あ…ありのまま 今 起こった事を話すね

私は確かに彼女に向かつていき一撃で沈めようとした
…と思つたら いつのまにか私が地面に倒れていた

な…何を言つてゐのか分からないと思つけど
私も何をされたのか分からなかつた

頭がどうにかなつちやつたの?

魔法とか超スピードとか
そんなんぢやちなもんぢや
断じてないわ

むつと恐ろしいものの片鱗を味わつた気がする…

「カツカツカー！時を止められたフランス人みてえな顔してゐるぜ
?大丈夫かよ?」

女子は私の顔を覗き込む

その顔はとても端正でこつまでも見ていたくなるような顔だつた

ああ…なんて可愛い女の子だらう

「つて…違つて…よくも私を ッ！」

私は起き上がりに彼女に掴みかかるつとした
…無理だつた

「威勢のいい異性だな！カツカツカー！」

「そのギャグ一回目よつーーー！」

その後に何度も抵抗しようとしながら

その後に何度も抵抗しようとしました

私は諦めて力を抜いた

そしてため息を一つついたトコロで会話を始める

「…………なんなのアンタたち…………？」

「おーおーーそりや、こっちのセリフだひひょーーーいきなり襲いか
かってくるなんてとんでもねえ嬢ちゃんだーーー！」

「クレイジーガールーーーマサニ映画で観たマンマダッタヨーーー次は
鉄球を振り回シテホシイヨーーー！」

「……うん、端から見ておかしいのは明らかに私だ
いきなり襲いかかる私がおかしい。

鉄球てなんだ鉄球て

つていうか制服を着た黒人と、かなりゆるゆるな私服の女の子…つ
ていうかウチの学校の制服じゃない?なんでアンタが着てんの?
外見的なおかしさで言つたら圧倒的にそっちのほうがおかしいけど。

「…………いや、その…なんかゴメンナサイ。どうしても見られたくない現場を見られちゃって…」

私は素直に謝罪をした

まさかここまで自分が成す術もなくやられるとは思わなかつた

圧倒的な敗北

確かに私は父の無理矢理な格闘技の修行が嫌で嫌でしょうがなかつたけど

それでも積み重ねてきた経験とかにはそれなりに自信はもつていた

小さい頃は体格差で負けていた相手もそりゃいたけど

近頃はそれすらも覆せるくらいの実力はあつたつもりだ

それなのに
それなのに

まさか、女子に負けるなんて…

「カツカツカ！ 気にすんな！！ 言われなくて誰にもいわねえよ
！！ 朝から良いもんを見せてもらつたしな！！」

さつきからスカつとするなあ

悔しいけど

豪快な笑いが不思議と心地いいくらいだ

なんていうか、凄く可愛いのに
凄くかっこいい

「…つて… 遅刻しちゃう…」

ただでさえギリギリなのにまさかの2連戦をしてしまつた…

だけれど

時すでに遅し

「あ～あ、チャイムが鳴っちゃったなあ～」

女子はめんどくさそうに頭を搔きながら学校のほうへ足を向けた
「え…？アンタたち…もしかして…同じ学校なの？おかしいでしょ
？」

「OH！廊下に立タサレテ！バケツモタサレルヨー……」

「いないわよ！今時！…！」

「カツカツカ！！そんなことより走るぞ～！！遅刻を体験するのも
わるかあねえなあ～…！」

「えつ　　ちょ～引つ張らないでつて　　…！」

私は女子に手を引っ張られて起き上がりそのまま駆け出した
もうなにがなんだか！

「うして、私は 私が初めて完敗した相手 謎
の少女と謎の黒人男性のことを知るのであった

今とは一体いつの「」となるのか？切り取れない風景画

学校に遅刻した

しかも悪田立ちしてしまった

私はそんな事望んでないのに

事の顛末

「カツカツカ！…すまねえ先生…！」この子が悪い輩に絡まれてるのを目撃して、世紀末救世主である俺は見過ごす事が出来ずに助けてきたぜえ…！」

大きな音を立ててドアを開けた第一声がそれだ

すでに授業が始まっていた教室は呆然とした様子で私たちを見ていた

「…ちよ…アンタ達…もう少し静かに…！」

私は必死になるも更なる追撃をかける

「OH…！…ボスの勇姿はグレイトフルダッタヨ…！…今ナラ殺意の波動…目覚メタ格闘家にモ勝てるクライダヨ…！」

なおも呆然としているクラス

先生もこんな事態に巡り会う事はそつそつ人生の中で経験していいのであるう

同じように停止したままだ

今まで私が体験していた常識とはなんだつたんだろう

「あ……ああ……流川と田中だな……事情は分かつたから、自分のクラスに戻りなさい……」

「先生イ……感謝するぜえ……自分たちのクラスにも言い訳をしに行かなきゃならねえ……詳しい話はまたあとでする……」

そう言つと、勢いよくドアを閉め廊下を走り出す音が聞こえた
そこへやつと我に返つたのか後を追う形で廊下に飛び出しそ

「う、廊下は走るんじゃないぞ……」

…そこ！？

この状況でいう精一杯の先生らしい言動だったのだろう

遠くでわりいわりいの声と共に笑い声が聞こえてきた

とんでもない人たちだ

「…それで、いつまでそこにいるんだね？」

先生は私に厳しい視線を投げかける

それに触発されてか

謎の少女A（私の中で勝手に決定）の存在感に目を奪われていた生徒の目が一斉に私に向けられていた

「やつさんの事…本当なのかな？」

先生は視線が集中してしどりもどりになる私に立て続けに質問する
これは困った

普段からあまり目立たないようにしてきたのだけれど
こればかりは状況を回避出来ない

「あ～…いや…なんといいますか…大体はそんな感じ…かな～…
みたいな？」

我ながら、とても言い繕つのがへタだ。

「ふむ…理由が理由だ。仕方が無い。席に着きなさい。…それと地
域の治安の問題もある…詳しい状況報告も兼ねて後で職員室まで来
なさい」

くうう…まさかの呼び出しじゃ

私は誤魔化しの笑いをしながらコソコソと席に着く

でも

謎の少女Aのお陰（？）で怒られたりはしないようだ

流川…？田中…？

あの一人の名前だろうか

普通に学校に馴染んでいるのが恐ろしい
かたや、ムキムキマッチョのスキンヘッド黒人
かたや、ゆるゆる私服の少女

…おかしいよですよ！…カテジナさん！…

…じゃなかつた

でもおかしいのは本当だ

あんなに田立つ二人組に今の今まで気がつかなかつた自分も自分だけどね

何かとんでもないことになつちゃつたな

あとであの一人とまた話し合わないと…

授業終了

私はクラスの人につつていう間に囲まれた…

「ねえねえ！？あの一人と学校に来るなんて…どうこう」と…？」

「流川さんつて可愛いよね～。田中くんもスポーツ出来るし優しい
しそつごく素敵！…」

「あの一人つて本当に謎が多くて…ミステリアスつていうかさー…ど
んな会話したの？」

わんやわんや

次から次に質問やら、可愛いだかっこいいの
きわどいのだと、罵つて欲しいとか抱き枕になつてほしいとか

…変態か…

でも、おかげさまで一人の情報がだいぶ手に入つた
どうやら一人は高校ではかなりの有名人らしい
私が知らないと言つたら、周りに驚かれた…そんなに?
しかも、凄く人気者らしい

上級生はもちろん、噂は他校にまで及んでいるとか
あんまり流行とかに敏感なほうじやないとは思つてたけど…

他に情報と言え

二人の過去とか同じ中学校だつた人はいない
高校に入つてからしか知らない人ばかりだつた
むしろ田中と呼ばれる黒人にいたつては年齢が明らかに…
中学生とかじやなくて軍隊あがりなんじやないかと思つくらいに屈
強だ

調べれば調べるほどに謎な一人だ

人望は厚いらしいけど

みんな遠巻きに眺める感じになつてしまつているらしい
どうも住む世界が違う感じで
羨望のほうが強いらしい

そんな二人と一緒に遅刻の大立ち回りは話題の餌食になつてしまつ
のも無理ないだろう

何より
あの強さ

こればかりは身を以て痛いほどに理解している

同世代に敵はないと思っていた

そんな私があつさり負けちゃったんだもん

一人にしつかりと口止めをしておかなければならぬ氣持ちよりも純粋に一人にして興味が湧いてきた

基本的に自分が目立たなくなる為に他人と同調しようとはするけど個人に対して強く関心を抱く事があまりないのだ

そんな私が珍しく興味をもつた対象だ

放課後に会いに行こう…

まずは先生に説明しに行かないと…

以下、放課後

先生への説明はすんなりと通った
ここでは私が不良に絡まれて、偶然に通りかかった一人が助けてくれた
…ってことになっている

ん~、大体あつてる?

不良をボツコボコにしたのは私だし
さらに一人までもボツコボコにしようとしてたこと以外はね…

先生が警察やら町の地域課やらに電話をしていく

私はとしては卑めの切り上げになつてくれて嬉しい

本題はここから

穏やかで平凡な暮らしをこれからも過げず為にあの一人にしつかり
と口止めをしておかなればならない

まだ学校にいるかな?

私は一人のクラスに足を運ぶ

以下、放課後の教室

「サアルウ~~~~!!なんで今日は休みなんだあああ~~!!」

「OH!!ボス!!モンキーボーイがハイスクールに来ないナンテ
異常ダヨ!!トライクに飛び出サナイタツロークライあり得ないヨ
!!」

叫んでいた

101回目のプロポーズなんて今の世代じゃ分かりづらいモノがあ
ると思うんだ

窓を開けて校庭に向けて叫んでいる

校庭で部活動をしている人たちは何事かとこちりを見上げていてる

本当に対極的

私は人の注目を集めるのがとても苦手だ

しかし、この人たちはどうだろう

そもそも自分たちが注目を集めて「ここに気がついているんだろ
うか？」

期待や恐怖、羨望、嫉妬

様々な感情が周りを取り巻く
それに耐えられるだけの強さ…

「…と、こんなこと考へてる場合じゃなかつた…！」

「アンタたち！そんなとこにいないで私の話を聞きなさいよー。」

私が教室に入つてきてもおかまい無しな一人

「…サル！？サルなのか！？」

私の声に反応し、こちらを振り向き近づいてきた

さつきからサルってなんなのよ？

私を見てサルって失礼じやない？

「…なんだ、今朝の格闘娘か…サルじゃねえのかよお

彼女はがっくり肩を落としあまり見せない寂しそうな顔をしていた

「さつきから意味分からないよ…。サルってなに? いきなり失礼だ
と思わないの?」

「ファイティングガール…ボスはショックなコトがアッタヨ…タイ
ムショックダヨ」

「タイムショックではないと思つカズ…」

しかし、落ち込んでいる様子を見ると少し拍子抜けだ

この人たちでもこんな表情をするときがあるんだ…

私の中では常にあっけらかんとしていて人をおちよぐのが好きな
人たちかと思っていた

「…それで、そのサルってのはなんなの? 私に分かるように説明し
て欲しいんだけど」

「だが、断るう…」

「断るのかよつ…」

いけないいけない、こんなツッコミを私にさせるなんて…

「カツカツカ…言つてみたかっただけだ…なんてこたあない!
! 普段なら絶対に休む事がなさそうなランキンギングNO・1のサルが
学校を休んだ…これはちょっとした事件だぜえ?」

前言撤回…そんなに落ちこんでないい…?

「だから、そのサルつて単語について説明しな」

「

ドゴン！――！

私が言いかけると同時に 教室の後方の掃除用具入れから音がした
結構な音だよ？

普通に考えて、放課後の教室の掃除用具入れからこんな音がするわけがない

「ふむ

「

私の驚きを前に、一人はいたつて冷静なのか物怖じせずに考え込んでいた

「OH…ボス、コレはツマリ

「

「おう。これは…もしかしなくてもあれだな

「

「だからー私を抜きにして勝手に話を進めないでよー」

納得するような顔で一人は確認し合つたあとに続けざまに言つ

「…………よおおし！――イチい！――サルの家に行くぞ――！――
「イエツサー！――ボス！」

……

…！？

「…そこ！？明らかにスルーだよね！？なにそのスルースキル！？いま掃除用具入れから音がしたよね！？」

「かつつかつか！ぬかしおる」

「ぬかしてないよ！？なにその喋り方？」

「それで『ざる』…せっかくの新展開の予感をスルーするなんて、とんでもないフラグブレイカーで『ざる』…！」

「せうよ…何かイベントが発生しそうじゃない！…わざわざからめちゃくちゃよ…！」

…あれ？

「カツカツカ！？そんなことはどうでもいい…格闘娘…！…サルに会いに行くぞ…！」

「まかせるで！『ざる』…誰かは存ぜぬが、拙者がサル氏のもとに案内するぞ！」わるよ…！」

「ソイツはいい…道案内頼むぜ…！…誰か知らねーけど…！」

「つむ…！…それではこの転送機の説明を

「

…？？？？？

ボスは私の肩に手を回してやつ

何かがおかしい

「OH!! ボス!! 急展開ネ!! ハハはチヨー展開とも言ウネ!!
読者が取り残サレル展開ダ!!」

「おつと、そこのムキムキ殿は重量制限に引っかかりやうぢゃね
よ」

「オーマイガッ!!」

「残念だつたなあイチ!! 今日はお留守番だ!! ちょっと格闘娘
と一人で行つてくる!!」

「え? ちょっと私も行くの? つていうか?」

なんだか展開が田まぐるじ
じじひへんでツツ「みたい

「なんで? ジヤるか!! 何か問題点でもあつたで? ジヤるか? 急がねば
サル氏が」

そう、ここね

これは言わせてもらひしか無い
読者的にも
私の心情的にも

お前は誰だよ!!

「もう一度言つわ……お前は誰だよ……」

「むむ……？」

頭にバケツを乗つけた女は腕を組み、考え込む

「意味分かんないんだけど? なに? あたかもずっといたかのよつて自然に会話に混じってるけど、誰よ!」

至極、まつとうなことを言つてゐる

おかしいのは私の目の前の現実だ

ややこしい2人に加わりさらによやこしい人物が紛れ込んでいる

「はつ……そうであつた! …」

バケツ女(仮)は一人で何かを納得して発言する

「…何者でござるか! ?」

「だから、それはお前だ! …明らかに不審者でしょ? 自分の方が怪しこそ事に気がつきなさいよ!」

「はつはつはーぬかしおるでござるー!」

「ぬかしおるのはお前だ!」

「いつに会話が進まないのはこの物語の仕様なのだろつか?」

「とにかく、サル殿の大体の位置は特定出来てゐるでござる。あとはこれを使えばサル氏に会いに行けるでござる」

そういう手におまるを持っているバケツ女

うさん臭すぎるし

そもそもサルって何？

何一つ私に情報が回つてこないし

この不親切な仕様はなんだろう

読者が分かつてからそれでいいっていうわけ？

オールドタイプに訓練もなしにガンダムをいきなり操作しろっていうくらいの無茶苦茶よ

アムロとはちがうのだよアムロとは…！

「その戸惑いは若さ故でござるか

」

「私の心を読まないでつ…！」

それこそ一コ一タイプかつ…！

「かつかつか！！いいんだよお格闘娘…！それより俺に用があんだ
ろお？どうせだあ！付いてこい…！」

「ちょひ、やつから凄く自分勝手

」

「おお…！…分かつてくれるでござるか…！」

「おうよ！バケツ娘！詳しく話を教える…！」

「うむ、実は今朝にかくかくしかじかで

」

でたつ、かくかくしかじか…！

ちなみに漢字で書くと『斯々然々』なんだって

「なるほど、かくかくしかじかでサルはかくかくしかじかでどこかへかくかくしかじかだつたのか…」

かくかくしかじか多いよ…!
もはや何なんか分からぬよ!
ゲシュタルト崩壊を起こしそうだ

「〇九…カクカクシカジカでネギダクニクナシ!ナノデスネー」

牛丼の専門用語になつちやつたよ…!
それは牛丼じやなくてネギ丼になつちやうし…!
その場合は『ネギだけ』でOKだよ…!

つて、ツツコミニトトリビアを入れてる場合じゃない…!!

「つまり…アンタ達は『サル』つて人物と全員知り合いで、そのサルつていうのが今朝にそこのバケツ女のせいで行方不明になつた…バケツ女は助力を求めて探しまわつてた所で、えつと…流川さん…の大聲を聞いて掃除用具入れに飛んできた…今から捜索しに行くつてことでしょ？」

かくかくしかじかなんて使わなくとも短い文章で伝わるじゃない…

「おお！見事な要約でござる…確かに、拙者が至らぬばかりにサル氏がこのような事態に…一人ではとてもたどり着けない…途方に暮れていた所での神の導きで！」やるよ

「カツカツカ…」つちもサルがいなくて退屈していた所だつた！
サル探しの冒険なんて胸が躍るじゃねえかあ…!!

なんという余裕

といふか私の本題はすでに忘れ去られていた

「それで、そのお子様用のおまるにしか見えないモノがワープ装置でサルつて人はそれに吸い込まれたってわけね？」

「うむ、いかにも！」

「…ふう」

私はため息に続いてこの言葉を言わせてもらひつ

信じられるか？！

なにその得意満面のドヤ顔は！？

おまるを片手にそんな表情する人は見た事無いよ！？

こつさく、流れに負けて今まで聞いてきたけど

荒唐無稽もいいとこだ

現実的に考えよう

魔法とか

超能力とか

ありえないでしょ？

確かに私も人の事言えるような人間ではないと思つけど…

レベルが違うすぎる

UFOにさらわれたので遅刻しましたと言い訳して誰が信じてくれ

るだらうか

そのぐらいに突拍子の無い事だ

バケツ女はうなだれて発言する

「むう…」この世界の常識はよく分からぬで、」やるよ…拙者は…私はサル氏を守ると誓つた…この世界ではいくぶん世間知らずなのだ…ただ、助けたいだけなのだ…」

シユンとしてしまつバケツ女

少しだけ泣きそうだ
いつまでバケツを頭に乗せているつもりだらう

「な、なによ！何か私が悪いみたいになつちやうじやない…！」

ああ、悪い事言つてる訳じやないのに
凄く罪悪感を感じてしまつた…！！

少し気まずい雰囲気が流れる

ああ、こんな事が言いたい訳じやないのに…

「カツカツカ！格闘娘え…！」

少しの間のあとにボスが雰囲気を打破する

「青いつ…青いねえ…」の言い争いが…オレの望んでた青春の1ページだぜえ…！」

続けて、田中くん（…と呼ぶにはまだ抵抗があるけど）が流れに乗つて話しだす

「A H A H A H A ! ! ボス ! ! コレが日本ノ青春ネ ! ! ノノ後に河原でボクシングのアトに夕陽に向カツテ走り出スマテガ1セツトダヨ ! !」

「おお ! ! それだイチ ! ! よし ! 斂り合つぞ ! !」

二人はファイティングポーズを構えて今にも飛びかからん勢いだ
「ちょ、ちょっと ! ! アンタたちなにやつてんのよ ! いないわよ ! 今時そんなヤツ ! !」

いつの時代だ !

いや

いつの時代でもいないよ ! そんな人 ! !
何の影響を受けたらそんな発想になるんだ ! !

…自然とその場から笑いがこぼれた

「…なんか、バカみたい」

そう

バカみたいだ

「カツカツカ ! ! こまけえこたあいいんだ。格闘娘え、ちつとジョー
シキつてのに囚われすぎだ」

「コノ幻想郷デハ、ジョーシキに囚ワレテハイケナイノデスネ！！」

「否定すんのは簡単だけどよお…別に切らなくてイイモンまで否定しちまつたら味気ない世界になつちまうぜ？魔法？超能力？いいじやねえか！歩いて、見て、聞いて、触れて。否定はそつからでも出来るつてモンだぜ？何もしらねえ赤ん坊のときから体験してきてることじやねえか。ジョーシキは悪いもんじゃねえけど、そこにばつか縛られてたらいつまでも大事なモンに気がつけないまんまだ」

ボス…

「アンタたちに今日のことを口止めに来たつもりだったのに…。気がついたら、変な方向に話が進んでさ…」

違う…

「それで…助けに行くんでしょ？その…サルつてのを。私も行くわ…ってか、行かなきやダメなんでしょ？」

まさか、こんな展開になるとは思わなかつた

今日は想定外のことだらけだ

こうなることは、私が物語を語つている時点で想像がつくことだ
運命は私を逃してはくれないらしい

「本上ていは…」

「…？」

おつと、何か物語の中で聞き慣れない名称が聞こえたぞ？

「本上ていは… 1 - C組出席番号18番。男子の間では人気が高く成績優秀、スポーツ万能 高嶺の花的ポジションに収まっている。それが本人が目立っていないという勘違いに繋がる… 身長161cm 体重は おふつ！」

私はとつさにバケツ女の口を塞いだ

「わ、私の個人情報をも、漏らすなつ！…」

いきなり何を口走っているんだ！！

脈絡がなさすぎて口を封じるのが遅れてしまつたくらいだ
その前になんて知ってるんだ！？

バケツ女は辞書のような分厚い本を片手に何かを調べていた

「アンタ… それ何持つてんの…？」

「つむ、この本は実に便利でな。拙者の秘密道具の一ついざるよ。
されているでござる…」

「はい？」

「フフフ…驚いておられるな…これにはあつとあらゆる情報が網羅
されているでござる…」

な、なんだってーー！
…つて思つわけないじゃない
いや、凄いんだけどわ

「フフフ……驚いておられたな……」

「えー？ 一度言ひのー？」

「ひつや、ひつや、反応をあまりしなかつたのがいけないから
かまつてちやん！？」

「「」れにはあつとあらぬ情報が纏羅されてこぬで！」アハハ…」

「それはもう分かったから…」

「

「…」「ひじ姫の」

「はこ？ なにこつてんのアンタ？」

なんなの…」「の人たちの会話…

カオスって呼ばれるヤツだよカオス

「「」む、説明しよう…世界中のあつとあらぬ「」ひじ姫の情報が
「」に載つて居る…」

そして続けざまにポケットを探るような仕草をしてから

聞いた事あるようなガラガラ声で喋りだす

「「」やら「」やら「」やら「」やら「」やら「」やら… KOKO 苑（「」ージイ
ズディクショナリー）」

「　　ただの語呂あわせかよ…」・か・も！…そのルビおか
しいよね！？ それだとあたかも「」ひじ姫が辞書みたいになつちやう
じやない…！」

無茶苦茶だ！

といつより適当だ！

「ハツハツハ！…まあ、」うじ君が見聞きした情報なんかも含まれているからそれなりに便利なので「わるよー。」うじ君は、本上殿について随分とお詳しいようだ「わるな」

知らんがな！－

こうじ君つてびの「うじ君のかれいぱり見当もつかないむしり、あんまり人の名前とか覚えないっていつか…

しかも、顔もあまり覚えていない。

「OH! MR・ゴージカワイソウネ…」

「あー…もう！話がいつこうに進まないじゃない…－仕切り直し…－」

仕切り直し

私は目の前でバケツ女

もとい、狭間さんが呪文を唱えてくるのを目の当たりにしていた

いやいや

呪文つて言葉を日常会話で使つとは思わなかつたよ

しかし

私がイメージする呪文とは少し違つ

よく分からぬ魔法陣とか
煙とか光が出てくるとか

私はそんな演出があるのが呪文だと思つていた

現実では

田の前のおまるに向かつてブツブツと喋つている女子がそこにいた

…アハハ

嘘みたいだろ？

これ

呪文唱えてるんだぜ…？

田の前

の非現実的光景を

現実的に見ている私にとつてこれ以上ない変質者だ

無理矢理に納得しそうな雰囲気だつたけど

完全なる変質者だ

田の前

の現実的に見ている私にとつてこれ以上ない変質者だ

隣で、田中くんとボスがニヤニヤと笑いながら教室の椅子に腰掛けている

あの一人はなんであんなに余裕でいられるのか

不思議でしようがない

そういうじつじてのうちにバケツ女もとい狭間さんの準備が終わったようだ

準備が終わつたつていうのも不思議な感じだけれど
だつて、おまるに向かつてぶつぶつ言つのを辞めただけだからね?
凄く絵的には変な構図だけど

「ふう……これで準備は完了だわるよ……。」

一仕事を終えた顔をして、満面の笑みで「ひかりに向かつ

私にはとてもじゃないが一仕事とかそういう事をし終えたよつには見えなかつた

現実はとても厳しい

やはりファンタジーはファンタジーなのだと思い知らされる

現実は

おまる語りかけることが魔法と呼ばれる事実に……

やつぱりファンタジーはファンタジーのままの方がいいかな……?

そんな事を考えていたらボスが立ち上がりおもむろに発言する

「カツカツカー！ クアアー！ ……それじゃあ行くとするかあ……。」

背伸びをしながら氣合いを入れ直すよつに言つ

「おーい……格闘娘え……オレと一緒に来い……。」

「…分かつてゐる。本当に無関係だけど…私は…少し…ほんの少しだけ…」

変わらるような気がする

なんていうか

なんていうか

…よく分かんないや。

「行こいつ。サルってよく分かんないけど、探しに行こいつ?」

私は覚悟を決めた

ボスは笑顔で応える

「ああ、サルは俺の大事なモンだからな…アイツがいねえとおもしろくねえよ」

好きな人なのかな?
分かるのは

サルつて人が凄く大事だつてことだ

「あとはここにある『ヒート』というボタンを押せば近くまでたどり着けるでござるよ」

ヒート…?

なにヒート…?

聞き間違ひじゃなくつて?

「了承したぜえ？」

ボスは言い終わるか言い終わらないかのうちに『ヒテ』のボタンを押した

「おまけに、とまたかの、アラバ

今までの長いフリーはなんだつたのかという勢いでボタンを押す

「ボス！ ウタシをツレテイッテ、ホシイヨ！ ウタシをスキーにツレテッテ！」

「つむじ風でも追っかけてなさいよ？」

そんな古いネタにツッコミを入れる女子高生も女子高生だけど……

3

私の身体から重力が消えて行く
それと同時に何か強い力に引っ張られるような感覚

体験した事がない未知の体験

目の前が反転する

こんなに気持ち悪いのかあ。

遊園地のジオラマコースターでもこんなにはならないよ

၁၆၂

私は途中で意識を失った

ここにわけ

僕です

いや

誰だよつてシッ ハハよくよく分かっているんだけどさ

そこは話の流れから察してもらいたいね

僕は今

知らない外国人に囲まれて64をしています

64?

64つて言つたら

あの有名なヒゲ配管工のロクヨン以外に何があるんですか？

いやはや、国際社会でもゲームつてのはハハハニケーションとして
成立するんだね

というわけで

スマッシュなブラザーズをやつてるんだけど…

「オイ！…テメーのドンキウゼエゾ！ゴルアアア…！」

「ンダト！？イヤラシイカービー使つてるテメエに言ワレル筋合イ
ねえぞコラア…！？」

問題はこの外国人たちが異様に怖いということです

良い大人たちが数十人で口クヨンで熱くなっています

：

さすがの僕でもこんな状況は想定外です

さてはて

僕の出番はいつになるのか

この状況はなんなのか

どうなるんだよ…！

ってかどうすりやいいんだよ…！

学校に遅刻した

しかも悪田立ちしてしまった

私はそんな事望んでないのに

事の顛末

「カツカツカ！…すまねえ先生！…この子が悪い輩に絡まれてるのを田撃して、世紀末救世主である俺は見過ごす事が出来ずに助けてきたぜえ！！」

大きな音を立ててドアを開けた第一声がそれだ

すでに授業が始まっていた教室は呆然とした様子で私たちを見ていた

「…ちよ！…アンタ達！もう少し静かに…！」

私は必死になるも更なる追撃をかける

「OH！…ボスの勇姿はグレイトフルダッタヨ！…今ナラ殺意の波動二目覚メタ格闘家にモ勝てるクライダヨ！…」

なおも呆然としているクラス

先生もこんな事態に巡り会う事はそつそつ人生の中で経験しているのであるつ

同じように停止したまだ

今まで私が体験していた常識とはなんだつたんだろう

「あ…ああ…流川と田中だな…事情は分かつたから、自分のクラスに戻りなさい…」

「先生イー!! 感謝するぜえ!! 自分たちのクラスにも言い訳をしに行かなきやならねえ!! 詳しい話はまたあとでする! -!」

その通りと、勢いよくドアを閉め廊下を走り出す音が聞こえた
そしてやっと我に返ったのか後を追う形で廊下に飛び出し

「う、廊下は走るんじゃないぞーーー！」

…そー？

この状況でいう精一杯の先生らしい言動だったのだろう

遠くでわりいわりいの声と共に笑い声が聞こえてきた

とんでもない人たちだ

「…それで、いつまでそこにあるんだね？」

先生は私に厳しい視線を投げかける

それに触発されてか

謎の少女A（私の中で勝手に決定）の存在感に目を奪われていた生徒の目が一斉に私に向けられていた

「やつらの事…本当なのかな？」

先生は視線が集中してしどろもどろになる私に立て続けに質問する

これは困った

普段からあまり目立たないようにしてきたのだけれど
こればかりは状況を回避出来ない

「あ～…いや…なんといいますか…大体はそんな感じ…かなあ…
みたいな?」

我ながら、とても言い繕つのがへタだ。

「ふむ…理由が理由だ。仕方が無い。席に着きなさい。…それと地
域の治安の問題もある…詳しい状況報告も兼ねて後で職員室まで来
なさい」

くうう…まさかの呼び出しどは

私は誤魔化しの笑いをしながら「ソソソソ」と席に着く

でも

謎の少女Aのお陰(?)で怒られたりはしないようだ

流川…? 田中…?

あの一人の名前だろうか

普通に学校に馴染んでいるのが恐ろしい
かたや、ムキムキマツチョのスキンヘッド黒人
かたや、ゆるゆる私服の少女

…おかしいですよ！！カテジナさん…！

…じゃなかつた

でもおかしいのは本当だ

あんなに目立つ一人組に今の今まで気がつかなかつた自分も自分だけど

何かとんでもないことになつちゃつたな

あとであの一人とまた話し合わないと…

授業終了

私はクラスの人につつていう間に囲まれた…

「ねえねえー？あの一人と学校に来るなんて…どうこうことー…？」

「流川さんつて可愛いよね～。田中くんもスポーツ出来るし優しい
しそつ～」
「素敵！」

「あの一人つて本当に謎が多くて…ミステリアスっていうかセーディ
んな会話したの？」

わんやわんや

次から次に質問やら、可愛いだかっこいいだの
きわどいのだと、罵つて欲しいとか抱き枕になつてほしいだとか

…変態か…！

でも、おかげさまで一人の情報がだいぶ手に入った
どうやら一人は高校ではかなりの有名人らしい
私が知らないと言つたら、周りに驚かれた… そんなに?
しかも、凄く人気者らしい

上級生はもちろん、噂は他校にまで及んでいるとか
あんまり流行とかに敏感なほうじやないとは思つてたけど…

他に情報と言えば

一人の過去とか同じ中学校だった人はいない
高校に入つてからしか知らない人ばかりだった
むしろ田中と呼ばれる黒人にいたつては年齢が明らかに…
中学生とかじやなくて軍隊あがりなんじやないかと思つくらいに屈
強だ

調べれば調べるほどに謎な一人だ

人望は厚いらしいけど
みんな遠巻きに眺める感じになつてしまつているらしい
どうも住む世界が違う感じで
羨望のほうが強いらしい

そんな一人と一緒に遅刻の大立ち回りは話題の餌食になつてしまつ
のも無理ないだろう

何より
あの強さ

こればかりは身を以て痛いほどに理解している

同世代に敵はいないと思つてていた

そんな私があつさり負けちゃつたんだもん

二人にしつかりと口止めをしておかなければならぬ氣持ちよりも純粋に一人に対して興味が湧いてきた

基本的に自分が目立たなくなる為に他人と同調しようとはするけど個人に対して強く関心を抱く事があまりないのだ

そんな私が珍しく興味をもつた対象だ

放課後に会いに行こう…

まずは先生に説明しに行かないと…

以下、放課後

先生への説明はすんなりと通つた

ここでは私が不良に絡まれて、偶然に通りかかった一人が助けてくれた

…つてことになつてる

ん~、大体あつてる?

不良をボツコボコにしたのは私だし

さらに一人までもボツコボコにしようとしてたこと以外はね…

先生が警察やら町の地域課やらに電話をしていく

私としては早めの切り上げになつてくれて嬉しい

本題はここから

穏やかで平凡な暮らしをこれからも過ぐす為にあの一人にしつかりと口止めをしておかなればならない

まだ学校にいるかな？

私は一人のクラスに足を運ぶ

以下、放課後の教室

「サアルウ～～～！！なんで今日は休みなんだあああ～～！」

「OH～～ボス！！モンキーボーイがハイスクールに来ないナンテ異常ダヨ～～！トラックに飛び出サナイタツローライあり得ないヨ～～！」

叫んでいた

101回目のプロポーズなんて今の世代じゃ分かりづらいモノがあると思うんだ

窓を開けて校庭に向けて叫んでいる

校庭で部活動をしている人たちは何事かとこちらを見上げている

本当に対極的

私は人の注目を集めるのがとても苦手だ

しかし、この人たちはどうだらう

そもそも自分たちが注目を集めていることに気がついているんだろうか？

期待や恐怖、羨望、嫉妬

様々な感情が周りを取り巻く
それに耐えられるだけの強さ…

つと、こんなこと考へてゐる場合じゃなかつた！－！

「アンタたち！そんなとこにいないで私の話を聞きなさいよ－」

私が教室に入つてきてもおかまい無しな二人

「…サル！？サルなのか！？」

私の声に反応し、こちらを振り向き近づいてきた
さつきからサルってなんなのよ？

私を見てサルつて失礼じゃない？

「…なんだ、今朝の格闘娘か…サルじゃねえのかよお

彼女はがっくり肩を落としあまり見せない寂しそうな顔をしていた

「さつきから意味分からないよ…。サルつてなに？いきなり失礼だ
と思わないの？」

「ファイティングガール…ボスはショックなコトがアツタヨ…タイ

ムショウックダ弐

「タイムショウックではないと思つけど……」

しかし、落ち込んでいる様子を見ると少し拍子抜けだ

この人たちでもこんな表情をするときがあるんだ

私の中では常にあっけらかんとしていて人をおちよぐのが好きな人たちかと思っていた

「…それで、そのサルってのはなんなの？私に分かるように説明して欲しいんだけど」

「だが、断るう！」

「断るのかよっ！…」

「いけないいけない、こんなツッコミを私にさせるなんて…

「カツカツカ！…言つてみたかっただけだ…なんてこいたあない！…普段なら絶対に休む事がなさそうなランキンギングNO・1のサルが学校を休んだ…これはちょっとした事件だぜえ？」

前言撤回…！そんなに落ちこんでないい！？

「だから、そのサルって単語について説明しな」

「ドゴン…！！！」

私が言いかけると同時に 教室の後方の掃除用具入れから音がした

結構な音だよ？

普通に考えて、放課後の教室の掃除用具入れからこんな音がするわけがない

「ふむ

」

私の驚きを前に、一人はいたって冷静なのが物怖じせずに考え込んでいた

「OH…ボス、コレはツマリ

」

「おう。これは…もしかしなくてもあれだな

」

「だから! 私を抜きにして勝手に話を進めないでよ!..」

納得するような顔で一人は確認し合つたあとに続けざまに言つ

「…………よおおし!…イチい!…サルの家に行くな!…」

「イエッサー!…ボス!..」

：

：！？

「…そこ!…? 明らかなスルーだよね!…? なにそのスルースキル!…?」

いま掃除用具入れから音がしたよね！？」

「かつつかつか！ぬかしおる」

「ぬかしてないよ！？なにその喋り方？」

「わつで！」
「わるーせつかくの新展開の予感をスルーするなんて、
とんでもないフラグブレイカード！」

「わうよーー何かイベントが発生しそうじゃなーーーわつ もからめ
ちやくちやくよー！」

「あれ？」

「カツカツカ！そんなことは決りでもいい！格闘娘！！サルに会
いに行くぞーーー！」

「まかせるで！」
「誰かは存ぜぬが、拙者がサル氏のもとに案
内するで！」

「ソイツはーー道案内頼むぜーーー誰か知らねーけどーーー！」

「うむーーそれではこの転送機の説明を

」

「？？？？」

ボスは私の肩に手を回してそう言つ
何かがおかしい

「OH!!ボス!!急展開ネ!!コーンはチヨー展開とも言ウネ!!
読者が取り残サレル展開ダヨー!!」

「おうと、そこのムキムキ殿は重量制限に引っかかりやつぱりやる
よ」

「オーマイガッ！！」

「残念だつたなあイチい！！今日はお留守番だ！！ちょっと格闘娘
と一人で行つてくる！！！」

「え？ ちよつ…私も行くの？ っていつか…」

なんだか展開が田まぐるしい
ここらへんでツツコみたい

「なんで『ジゼル』かー！ 何か問題点でもあつたで『ジゼル』か？ 急がねば
サル氏が」

そう、ここね
これは言わせてもらうしか無い
読者的にも
私の心情的にも

「お前は誰だよーー！」

「もう一度言ひ直すわ… お前は誰だよーー！」

「むむ…？」

頭にバケツを乗つけた女は腕を組み、考え込む

「意味分かんないんだけど? なに? あたかもずっといたかのように自然に会話に混じってるけど、誰よ!」

至極、まつとうなことを言つてゐる

おかしいのは私の目の前の現実だ

ややこしい人に加わるときにややこしい人物が紛れ込んでしま

「はつ！…そうであつた！！」

バケツ女（仮）は一人で何かを納得して発言する

「…何者でござるのか！？」

「だから、それはお前だ！！明らかに不審者でしょ？自分の方が怪しいって事に気がつきなさいよ！」

「はつせつせーぬかしむねで」ヤルノー。」

「ぬかしおるのせお前だ！」

いつこじに会話が進まないのはこの物語の仕様なのだろうか？

「とにかく、サル殿の大体の位置は特定出来ているでござる。あと
はこれを使えばサル氏に会いに行けるでござる」

そういう片手におまるを持つてゐるバケツ女

うさん臭すぎるし
そもそもサルって

何一つ私に情報が回つてこないし

この不親切な仕様はなんだらう

読者が分かつてゐるからそれでいいつていうわけ?

オールドタイプに訓練もなしにガンダムをいきなり操作しろつていうへりの無茶苦茶よ

アムロとほむがうのだよアムロとは…!

「その戸惑には若者故でござるか」

「私の心を読まないでつ…」

それこそ一コータイプかつ…!

「かつかつか…いいんだよお格闘娘…それより俺に用があんだ
うお？ビリセだあ！付いて！」…

「ちゅう、やつきから凄く凄く自分勝手

「おお…分かつてくれるでござるか…」

「おうよ…バケツ娘！詳しく話を教える！」

「つむ、実は今朝にかくかくしかじかで

でたつ、かくかくしかじか…！

ちなみに漢字で書くと『斯々然々』なんだつて

「なるほど、かくかくしかじかでサルはかくかくしかじかでビリか
へかくかくしかじかだったのか…」

かくかくしかじか多いよ…！

もはや何なのが分からぬよ！
ゲシユタルト崩壊を起こしそうだ

「〇ヒ…カクカクシカジカでネギダクニクナシ！ナノデスネー」

牛丼の専門用語になつちやつたよ！…！

それは牛丼じやなくてネギ丼になつちやうし…！

その場合は『ネギだけ』でOKだよ！…！

つて、シッコリトリビアを入れてる場合じやない…！…！

「つまり…アンタ達は『サル』つて人物と全員知り合いで、そのサルつていうのが今朝にそこのバケツ女のせいで行方不明になつた…バケツ女は助力を求めて探ししまわつてた所で、えつと…流川さん…の大聲を聞いて掃除用具入れに飛んできた…今から捜索しに行くつてことでしょ？」

かくかくしかじかなんて使わなくとも短い文章で伝わるじやない…！

「おお！見事な要約で『じざる…』確かに、拙者が至らぬばかりにサル氏がこのような事態に…一人ではとてもたどり着けない…途方に暮れていた所での神の導きで『じざるよ』

「カツカツカ…！」つちもサルがいなくて退屈していた所だった！
サル探しの冒険なんて胸が躍るじやねえかあ…！」

なんという余裕

といふか私の本題はすでに忘れ去られていた

「それで、そのお子様用のおまるにしか見えないモノがワープ装置

でサルって人はそれに吸い込まれたってわけね？」

「うむ、いかにも！」

「…ふう」

私はため息に続いてこの言葉を言わせてもらひつ

信じられるかつ！－

なにその得意満面のドヤ顔は！？

おまるを片手にそんな表情する人は見た事無いよ！？

こうぞ、流れに負けて今まで聞いてきたけど

荒唐無稽もいいとこだ

現実的に考えよう

魔法とか

超能力とか

ありえないでしょ？

確かに私も人の事言えるような人間ではないと思つけど…

レベルが違いますぎる

UFOにさらわれたので遅刻しましたと言い訳して誰が信じてくれるだろうか

そのぐらいに突拍子の無い事だ

バケツ女はうなだれて発言する

「むう…」この世界の常識はよく分からぬで、わるよ…拙者は…私はサル氏を守ると誓つた…この世界ではいくぶん世間知らずなのだ…ただ、助けたいだけなのだ…」

シュンとしてしまうバケツ女

少しだけ泣きそうだ

いつまでバケツを頭に乗せていろつもつだらう

「な、なによ！何か私が悪いみたいになつちや、ひじやない…」

ああ、悪い事言つてる訳じやないのに
凄く罪悪感を感じてしまつた…！

少し気まずい雰囲気が流れる

ああ、こんな事が言いたい訳じやないのに…！

「カツカツカ…！格闘娘え…！」

少しの間のあとにボスが雰囲気を打破する

「青いつー青いねえ…！」の言い争いが、オレの望んでた青春の1ページだぜえ…！

続けて、田中くん（…と呼ぶにはまだ抵抗があるけど）が流れに乗つて話しだす

「A H A H A H A ! ! ボス ! ! コレが日本ノ青春ネ ! ! コノ後に河原でボクシングのアトに夕陽に向カツテ走り出スマデガ1セツトダ

「三……」

「おお……それだイチ……よし……殴り合いつぞー。」

二人はファイティングポーズを構えて今にも飛びかかるん勢いだ

「ちょ、ちょっとー！アンタたちなにやつてんのよー！いないわよー！今時そんなヤツ……！」

いつの時代だ！

いや

いつの時代でもいないよー！そんな人ー！！

何の影響を受けたらそんな発想になるんだー！！

：自然とその場から笑いがこぼれた

「……なんか、バカみたい」

そう

バカみたいだ

「カツカツカ！こまけえこたあいいんだ。格闘娘え、ちつとジョーシキつてのに囚われすぎだ」

「コノ幻想郷デハ、ジョーシキに囚ワレテハイケナイノデスネー！」

「否定すんのは簡単だけどよお……別に切らなくてイイモンまで否定しちまつたら味気ない世界になっちまうぜ？魔法？超能力？いいじ

やねえか！歩いて、見て、聞いて、触れて。否定はそつからでも出来るつてモンだぜ？何もしらねえ赤ん坊のときから体験してきてることじやねえか。ジョーシキは悪いもんじゃねえけど、そこにばつか縛られてたらいつまでも大事なモンに気がつけないまんまだ

ボス…

「アンタたちに今日のことを口止めに来たつもりだったのに…。気がついたら、変な方向に話が進んでさ…」

違う…

「それで…助けに行くんでしょう？その…サルってのを。私も行くわ…ってか、行かなきゃダメなんでしょう？」

まさか、こんな展開になるとは思わなかつた
今日は想定外のことだらけだ

こうなることは、私が物語を語っている時点で想像がつくことだ
運命は私を逃してはくれないらしい

「本上ていは…」

「…？」

おっと、何か物語の中で聞き慣れない名称が聞こえたぞ？

「本上ていは…1-C組出席番号1-8番。男子の間では人気が高く成績優秀、スポーツ万能 高嶺の花的ポジションに収まっている。それが本人が目立っていないという勘違いに繋がる… 身長161cm 体重は おふつ！」

私はとつとてバケツ女の口を塞いだ

「わ、私の個人情報をも、漏らすなっ！」

いきなり何を口走っているんだ！！

脈絡がなさすぎて口を封じるのが遅れてしまつたくらいだ
その前になんで知つてるんだ！？

バケツ女は辞書のような分厚い本を片手に何かを調べていた

「アンタ……それ何持つてんの……？」

「つむ、この本は実に便利でな。拙者の秘密道具の一つだ」

「

「はい？」

「フフフ……驚いておられるな……これにはあじとあらゆる情報が網羅
されてこるで」

な、なんだってーーー！
…って思うわけないじゃない
いや、凄いんだけどわ

「フフフ……驚いておられるな……」

え！？一度言つてーーー？

どうやら反応をあまりしなかったのがいけないらしい
かまつてちやん！？

「これにはありますとあります情報が網羅されているで」
「」

「それはもう分かったから……」

「……」

「はい？ なにこいつさんのアンタ？」

「なんの……」の人たちの会話…

カオスって呼ばれるヤツだよカオス

「ひむ、説明しよう……世界中のあつとあらゆるヒジ君の情報が
「」に載つてこる……」

そして続けざまにポケットを探るような仕草をしてから
聞いた事あるようなガラガラ声で喋りだす

「やあらひやつちやひやへん…… KOKO苑（「ージイ
ズティクショナリー）」

「…………ただの語呂あわせかよ……し・か・も……そのルビおか
しいよね！？ それだとあたかもこいつじ君が辞書みたいになっちゃう
じゃない！？」

無茶苦茶だ！

とこうより適當だ！

「ハツハツハ……まあ、こいつじ君が見聞きした情報なんかも含まれ
てこるからそれなりに便利なので」
「それるよー」こいつじ君は、本上殿に

つこて随分とお詳しこよつで「やれるな」

知らんがな！！

「うじ君つてどの」「うじ君なんかわっぱり見当もつかない
むしり、あんまり人の名前とか覚えないっていつか…

しかも、顔もあまり覚えていない。

「OH! MR・ページカワイソウネ…」

「あ～！もう！話がいつ」「うに進まないじゃない！…仕切り直しよ
！…仕切り直し…！」

仕切り直し

私は目の前でバケツ女

もとい、狭間さんが呪文を唱えているのを目の当たりにしていた

いやいや

呪文つて言葉を日常会話で使つとは思わなかつたよ

しかし

私がイメージする呪文とは少し違つ

よく分からぬ魔法陣とか
煙とか光が出てくるとか

私はそんな演出があるのが呪文だと思つていた

現実では

目の前のおまるに向かつてブツブツと喋つている女子がそこにはいた

アハハ

嘘みたいだろ？

これ

呪文唱えてるんだぜ……？

無理矢理に納得しそうな雰囲気だつたけど

完全なる変質者だ

目の前の非現実的光景を

現実的に見ている私にとつてこれ以上ない変質者だ

隣で、田中くんとボスがニヤニヤと笑いながら教室の椅子に腰掛けている

あの一人はなんであんなに余裕でいられるのか

不思議でしようがない

そういうしてゐうちにバケツ女もとい狭間さんの準備が終わつたようだ

準備が終わつたつていつも不思議な感じだけど
だって、おまるに向かつてぶつぶつ言ひのを辞めただけだからね?
凄く絵的には変な構図だけど

「ふう…これで準備は完了でござるよ…」

一仕事を終えた顔をして、満面の笑みでいきなりに向かつ

私にはとてもじゃないが一仕事とかそういう事をし終えたようには見えなかつた

現実はとても厳しい

やはりファンタジーはファンタジーなのだと思い知らされる

現実は

おまる語りかけることが魔法と呼ばれる事実に…

やつぱりファンタジーはファンタジーのままの方がいいかな…?

そんな事を考えていたらボスが立ち上がりおもむろに発言する

「カツカツカークアアー…それじゃあ行くとするかあ…!」

背伸びをしながら氣合いで入れ直すように言ひ

「おいい…格闘娘え…オレと一緒に来い…!」

「…分かつてる。本当に無関係だけど…私は…少し…ほんの少しだけ…」

変わるような気がする

なんていうか
なんていうか

…よく分かんないや。

「行こ」う。サルつてよく分かんないけど、探しに行こ」う？」

私は覚悟を決めた

ボスは笑顔で応える

「ああ、サルは俺の大事なモンだからな… アイツがいねえとおもしろくねえよ」

好きな人なのかな？

分かるのは

サルつて人が凄く大事だつてことだ

「あとは」こにある『ヒヂ』というボタンを押せば近くまでたどり着けるで』じめるよ」

ヒヂー！？

なにヒヂー！？

聞き間違いじゃなくつて？

「了承したぜえ？」

ボスは言い終わるか言い終わらないかのうちに『ヒヂ』のボタンを押した

「ちよつ　…ちよつとはためらひよ　…」

今までの長いフリはなんだつたのかといつ勢いでボタンを押す

「ボス～！－ワタシをツレテイツテ～ホシイヨ～！－ワタシをスキ
ーにツレテツテ～！－！」

「つむじ風でも追っかけてなさいよ　　よ？」

そんな古いネタにツツ「ミミを入れる女子高生も女子高生だけ…

と

私の身体から重力が消えて行く
それと同時に何か強い力に引っ張られるような感覚
体験した事がない未知の体験

目の前が反転する

こんなに気持ち悪いのかあ。

遊園地のジェットコースターでもこんなにはならぬよ

ぐるぐるぐるぐる

私は途中で意識を失つた

こんなにちが

僕です

いや

誰だよってシジ「ミ」はよくよく分かっているんだけどさ

そこは話の流れから察してもらいたいね

僕は今

知らない外国人に囲まれて64をしています

64?

64つて言つたら

あの有名なヒゲ配管工のロクヨン以外に何があるんですか？

いやはや、国際社会でもゲームつてのは「ミコニケーション」として成立するんだね

とこつわけ

スマッシュなブラザーズをやつてるんだけど…

「オイ！…テメーのジンキウゼンゾー！ゴルアアア…！」

「ンダト！？イヤラシイカービー使つてゐテメエに言ワレル筋合イ
ねえぞコラア…！…？」

問題はこの外国人たちが異様に怖いといつことです

良い大人たちが数十人で口クヨンで熱くなっています

⋮

さすがの僕でもこんな状況は想定外です

さてはて

僕の出番はいつになるのか

この状況はなんなのか

どうなるんだよ…！

つてかどうすりやいいんだよ…！

運命とは必然の連続から成るもの

本上ていは

彼女は見知らぬ空間にいた
それも当たり前の事だろつ。

彼女はほんの数分前まで学校の教室にいたはずであった

しかし、眼前に広がるのは古びたランプ

否

建物自体が古びている

アンティークやクラシック

響きはいいが

長い年月を経た建物である

一畳もないであろうそのスペース

その中心には便器があつた

「ん…まさか…」

彼女は戦慄した

いや、一定の文化水準にある人間ならば誰でも嫌がるであろう

「……トトイレじゃない……ちょっと……」

非常に不潔である。

お世辞にも綺麗とはいがたいその場所に横たわっていたのである

すぐに身体を起します

まだ少し足もとがおぼつかない

少し景色がぐらついているように感じじる

少し落ち着かなきゃ

彼女は便座に腰をかける

何も便意を催したことではない

この小説を放尿プレイのHOROROサービスカット小説にするわけにはいかないのだ

「ボス？ つていうか……」

なにぶん、どこでもドアを現実に体験するとは
まったくの初体験だ

AINNISHUTAINでもこんな経験はしたことがないだろ？

「ひこひときつて案外に冷静でいられるものなんだと感づ。

即座に状況分析につとめる

「……ふう。なんかもう少し…かつ…よく登場…とかないのかな?
なんでトイレとかバケツとかおまるとか。そういうのになっちゃう

わけ？」

それは作者自身にも分からぬ部分である。

すると、ふと田の前の扉ががちゃりと音を立てた
ドアを開ける音である

それはそうだ

彼女は田を覚ましてから、このトイレの中にいて
それからあまり確認をする間もなく便座に腰をかけている
鍵をしていなかつたのだ

「あ...」「あ...」

お互に向かい合つ
声が重なる

『ああああああーー!』

そこからが早かつた
彼女
もとい
本上ていは
すくつと立ち
おもむろに入つてこようとした人に

全力で蹴りを入れた

その行動は何故か

ます

相手が男であると認識したことだ

本上て^イは

花も恥じらうピチチの高校生である

トイレとこう場で男に出来くわすなんてことはあつてはならな^イこと
である

もちろん、実際にトイレをしているわけではないので恥ずかしい氣
持ちがあるわけではないのだが…

いや

例え、トイレで催していなくとも

個人的空間・領域に他人が入ってくるのは
恥ずかしいものである

とつたに出でしまった行動が

彼女が慣れ親しんだ

蹴り

といつ動作につながつてしまつたのだろう

男は彼女の見事な蹴りにトイレから弾き出され
外の壁まで吹っ飛んでしまつた

本上はそこで初めてトイレの外の世界を叩撃することになる

なんてことはない

映画に出てきそうな古びた洒落たバーのような場所だった

なぜバーのような場所？

バーじゃないの?
と思うかもしけないが

いかんせん

本上は未成年である

未成年の飲酒は法律によつて禁じられています
バーという場所には縁がないので
映画で観たことがある
そんなイメージしかないのである

カウンターには店員らしき人物とお客さんが数人

テーブル席にも3人ほど座つていた

みんな目を丸くしている

無理も無い

そこにはいるはずのない

制服姿の女子高生がいきなり

男を蹴飛ばして出てきたのである

「あ……あ……そうだーーすいませんーーすいませんでしたーー」

謝った

何に対して？

蹴飛ばした男にだろうか

それともいきなり驚かせちゃってすいません

そんな意味合いだろうか？

どちらもあるいは

オートディフェンス

あたかも自動防御ののような鮮やかな蹴り技は相手を失神させるには充分であった

カウンター席にいる客らしき人が、吹っ飛ばされた相手と本上を交互に見渡しコソコソ話を始めた

マスターに見える男性も我関せずとグラスを磨いている

本上は首をかしげる

え？

スルー？

自分でした事ながら予想外の反応に啞然とした

どうも何かに怯えているように見える

何に？

そんな事を考えているとテーブル席のほうで大きな音が鳴った

慌てて身構える

「オメーは焼きそばパンマンのほうがいってのかオラアー・アアー!？」

「アンパンマンの登場キャラの声優全部言えんのかー? やんのか口ラアー?」

：
なんつー話をしてるんだ

さすがの本上も対象外である

大の大人一人がアンパンマンについて真剣に議論し合っている
しかも明らかにカタギな感じではない一人だ

その会話内容とその風貌のギャップはとてもない大きなものであった

「困ったときの山寺だぞ! オメー分かつてんのかー? 誰もチーズとカバオが一緒だとは思わねえだろ口ラアー! ?」

「今は山寺の話してんじゃねーんだよクソヤロー! ! それに『カバオ』じゃなくて『カバお』だテメヒ! ! 噛み合つてんのかオラアー! ?」

もはやじちゃもんレベルの会話である

ここからは喧嘩を売りながら真剣な議論をしているのである

「だから、ウルトラマンは80が新人のペーペーでウルトラ一族といつエリート部隊の一員になれるかが問題なんじゃねえのかよ！？」

「アアー！？ウルトラマングレートの話してんだろうがよ……オーストラリアってなんだよオラア……！」

「話がウルトラマンになっちゃったよ……！」

さすがの本上も想定外である

しかもお互にまったくかみ合つてない所がなんとも歯がゆい

そういうしてゐうちに私が吹っ飛ばした人が目を覚ました
小太りで目は髪の毛で隠れていて見えない

壁にもたれかかるように倒れていたが
ハツと目を覚ましてきょろきょろと辺りを見渡している

どうやら自分に何が起きたのか理解していないようでもあった

本上はすっかり雰囲気にのまれていた

小太りの蹴りあげてしまつた男性に声をかける

「あ、あの……先ほどは……」

男性はビクッとしてそそくせと本上から距離をとつて
離れていった

ぼてぼて

そんな効果音がしそうな足取りで

そして言い争いしている一人の所に行くと

あたふたしながら一人に向かい何かぶつぶつ呴いている

「ああ！？」「うるせえぞ！ノブタ！！邪魔すんじゃねえぞオラ！」

「！」

先ほどまであんなにいがみ合っていた一人の意見が一つになつたとき
野ぶたと呼ばれた男性は

またもや、宙を舞い地面に叩き付けられた

まさかまさか

ダブルパンチを喰らう事になると

顔面にめり込んだ二つの拳は野ぶたを再度失神させるには十分な威力であった

「うわあ…」

さすがの本上もこれには引いた

…自分も加害者の一人であることを彼女は忘れていた

それにして、この状況下でいまだに誰もはた迷惑な客を止めにこない

どうことのなのであろうか

彼女は小声で隣にいる人物に話をかける

「うふうと……わざわざから何でありますかと黙つてたのよ……」

れてはて

本上はこの場にいるはずのない誰かに向かつて話をかけてい
るといつたい誰に向かつて話しているのやら……

「いつも時は、この一番にでしゃばるのがアンタの役割でしよう
……」

ボス！！

「んああ？」

「ずっと黙つてナレーション気取りでもしてたつての？脳内の解説
がだだ漏れみたいになつてたよー？なにが『この場にいるはずのな
い』……なのよ！一緒にここまで来て、今もずっと一緒にいたじゃな
い！珍しく黙つてると思つてたら何やつてんのよー？？」

カツカツカ

まつたく

この小娘は……せつかくの新舞台だつていうから脳内ナレーションで

読者様に新しい気持ちを味わつてもうけいりと感つてたのによ...

らしくない喋り方でずつと喋つてたのが白無しじやネエかあ...
このシリーズはあわよくばずつとナレーションで通してやるのと重
つてたのによ...

「...だがそのイレギュラーな感じもたまんねえなあーーー」

「むしろ、イレギュラーなのはボスの行動の方だと思つんだけど...」

「まつたぐだつたーー！」

たはーーー！

こんなイイ女がいるもんだなあーーー！

俺が男だつたら惚れちまつてるぜーーー！

男だけどなーーー！

…つむ

「いやで、読者諸君にもつ一度説明をしておく必要があるなあ

俺は男だ

だが玉はない

もちろん棒もないっーー！

…いきなり下ネタかよーーって思つたろ?
カツカツカーーー！

こまけえこたあいいんだよーーー！

別に去勢手術で取つたわけじゃねえし
好きで男を捨てたわけじゃねえんだな

かくかくしかじか

死んだら男女

はなてなてことよし

笑つちまうだろ？

カツカツ力

つまり今の俺は

身体は女 頭脳は男 その名も

勢い余つて

訳わかんねえ男を一人吹つ飛ばしちまつた…

「ちよつ！！ボス！！探偵にあるまじき暴力行為だよ！？何も推理してないし！！その某海賊王みたいな演出はなに？」

「ん? ああ、つい勢いづいてやつた。反省はしていない」

「いやいや……そんな、事件の供述みたいな感じに言われても困るからね。…つてか、反省しろよ」

「カツカツカ！大丈夫だぜえ？この一人なら…」

ああ、あと一個訂正があつたわ

見知らぬ空間なんて冒頭にカレー・シミンしたがる。

「カツカツカ。威勢がいいじゃねえか！さすがにあのクソババアのトコのモンだなあ？」

「ああ？ テメエ……なにいつた？」バヨ

「あー、ワリー。も一発いつらまつたなあ？あと、クソババアに伝えておけ。」

「あ…ああア…」

「つてな」

そうだな。

神様つてヤツは運命をうまく回してるつてもんだ

こうやつて新しい人生を与えた

だけ

やつ思つてたナビよ

まさか、こんな風に巡つてくんなんじよ

「いや俺の故郷だ

強引さの裏側に潜む臆病

まつたく！…ボスはめちやくちやだよ！…

私は強く憤った

まるで、どつかの海賊王みたいな横暴さだ
私が気が付いてからずっと黙り込んでると思つたら

いきなり男一人を殴り倒した

ここに海賊王のモブキャラがいたら
ええ～！？とか言って田を飛び出せむことだらつと思つ

そのくらいめちやくちやだ

残念だけど、これは小説でそんな漫画的な描写は一切ないけどね！…

「カツカツカ！…マスターいつもの……じゃなかつた、ホットミル
クをくれ！」

「常連かよつ！…」

何年も通い詰めた人が使つよつなセリフ言つちやうの！？

しかもホットミルクに落ち着こちやうの！？

そりや、未成年はお酒飲めないけどまあ…

経過のまとめ

私たちは良いか悪いかは別として男三人を殴り倒した

もちろん本来ならば完璧にアウトな行為なんだけど
どうやら、最近になつてからこいらへんを取り仕切るよくなつた
マフィアの下っ端だつたらしい
どうにもこうにもこいらへん界隈は新しいマフィアとの折り合いが
悪いらしく幾度となくトラブルがあつたらしい

そんなこんなで、なかなかに鬱憤がたまつていたらしいが相手が相
手なだけに泣き寝入りすることが多かつたとのこと

「イヤッハツハツハ！ いきなり便所から出てきたときはおつたま
げたが、あいつらをぶん殴つてくれて感謝するよ！」

「なあーにー昔からのなじみだー気にすんじゃねえよーー！」

「オウオウー今日は一杯おじつでやるよーーそれにしても面白いこ
とこう嬢ちゃんだなあ。こんなに強いねーちゃんだったら、将来の
旦那は孫悟空か！？ はつはつはつはーー！」

さすがにサイヤ人と結婚は難しいかなあ…
いまいち笑いのツボがわからない

そしてさつきまでは寡黙そうな印象を受けたマスターだったが思つ
た以上に喋る
ついでに声がデカい

「カツカツカ！…それよりもこの街の今の状況はどうなってんだあ？前まではあいつらのシマジヤなかつたじやねえか」

まったく話の様子が呑み込めない私を置いてボスが話を進める

「…おひ。そんな話どいで聞いたんだ？」

「ちょっとした事情でなあ…マスター…ホットミルクお替り

ええ？」「で言つタイミング？

あまり牛乳飲んでもとおなか壊しちゃうよ？

「はいよ、ホットミルク ん、ビームで言つていいもんやらないで聞いたか分からんが、この件はあまり知らないほうが多い」

「デカい声を急に潜めるマスター

「俺も仕事柄いろんな情報が入ってくるし、俺自身も尊は嫌いじゃない。だけど、この件は本当にやばい」

「構わねえよ。それにまんま他人事つてわけでもねえしよ。」

「お前らには救われた恩もあるしな 」「つから先は独り言だと思つて聞いてくれ…」

よく分からぬけど

この物語で一回あるかないかの珍しくシリアルな展開になりそ�うな
ので私は黙つて話を聞いた

「いやな、この街はお世辞にも治安のいい街とは言えねえ。悪ガキよりもっとタチの悪い奴らが牛耳つてやがる。だけどな、前まではそこまでじやなかつたんだよ。クソにはクソなりの秩序つてもんがあつたんだ。」

「なんか、読む小説を間違えたような話みたい
実は違う小説でした！パンパカバーン
みたいな話はないよね？」

そんな私の戸惑いを無視して、マスターは話を続ける

「前にこりひを仕切つてた先代のボスが引退する、あ次のボスを幹部から決めようつて矢先にとんでもねえことが起つたんだ」

なんか本当に聞いたやいけない町事情を聞いてるような気がして、後ろめたさと怖さを感じる

私は不安になつて、ボスのほうに顔を向ける

「ぐおお……ணṇণ」

寝ていらっしゃった

……！？

この状況下で！？

あんたが聞いた話なんじゃないの！？

言いだしつぺが放棄するつてどんな状況よ？

しかし、寝顔だけ見るとやっぱり女の私から見ても可愛い…
いかんせん豪快な寝方ではあるけれども

「イヤッハッハ…こんな時に寝るなんて肝の据わった嬢ちゃんだ
…！」

ええ…まったくその通りだと思います

「んで、話の続きをしようか…」

続けるんだ…

いや、確かにここまで聞いてしまったからには最後まで聞くのも義務みたいなもんだと思う

「ん~、ここまで話したっけか…そうそう、先代の引退だな。ボスの後継者候補は三人いた。いや、その中の一人は候補のもう一人にべつたりだから実質上は一人だろうな。

だけど、本来なら一番の有力候補にほぼ決まるもんだと思つてたさ。人望も実力も誰しもが認める存在だったからな。残りの候補二人も信頼してたしな。だけどよ…」

ここへんでマスターの喋りが濁りだす

やっぱ、あまり言いたくないのだろうか

「いやな…そのまますんなり決まってくれれば良かつたんだけどよ。その候補の幹部が旅先で行方不明になつちましたんだよ…。一体、何があつたのか誰もわからねえ。残されたのは取引先の組の死体だけだった。

それから組はめちやくちやだ。そりや そうだらうよ。明らかに裏切りに取引ももちろんご破綻。それから組はガタガタだ。昔からの同盟相手や部下の連中も今回の不義に反旗を翻しシマすら奪われてしまった。残つた先代はそのまま身体を壊しちまって入院中だ。残りの候補幹部一人も突然の行方不明に対応しきれなかつたんだろうな。それから、ここらを取り仕切るようになつた組の横暴に限界を超える寸前だつたつたつーわけだ」「

…明らかに一般的な女子高生の範囲を超えた話だつた

仁義なき戦い的な何かであろうか？

私にはどうもこうもスケールが違いますさてピンとくるような話ではなかつた

もう少しギャグよりであつてほしかつた

サル君を探しに来て（連れてこられた）飛ばされた先はとんでもない世界であった

「グォオ…ズズズ もう食べられないよパトラッシュ…」

ボス…明らかにそんな空氣じゃないよ。

「まあ、観光客のねーちゃんにはあんまり関係のない話をしちまつたな。すまねえ。なにぶん普通に観光するぶんにはそこまで表面化した問題じやねえからよーー今の話は独り言だ！！存分に楽しんでくれやーー！」

いつもの調子に戻つて話し出すマスター

そうだね…世の中にはこんなこともあるし…

いちいち問題に首をつりこんで解決なんて痛快な冒険でもないんだ…

わざわざとサル君とかを探して帰ろっ

それが一番いいはずだよね。

私は少し大人になつたつもりでことなしかれを貫き通そうとしていた
ら、隣から声が聞こえた

「話は聞かせてもうつたぜえ！…よし、行くか！…」

いやいや、アンタ寝てたじゃん

思いつきフランダースしてたじゃん

「いきなり何を言い出すのよ！行くつじどこく？あてなんかないじ
やない」

まさに何もない

こここの街の事情を聞いただけで、何一つ手がかりがなかつた

「いやなあ、大体のことは分かつた。今からある人に会いに行くぜ
え！」

「今の話から何一つ情報なんてないじゃない。無謀にもほゞがある
よボス！…」

「なんでえ！嬢ちゃん！ボスなんて言われてんのか！イヤッハッハ
！…そりいえばアイツに元どことなく雰囲気が似てるよつな気がしねえ
でもねえなあ！…」

あの話のあとでここまで切り替わらねるマスターはさすがだな。

すると酒場の入り口から声がする

「いやあ～。話は全部聞かせてもらつたよお。あんまりやつこつこ
とは部外者に口にしちゃダメだぜマスター？ ビシッ」

「誰？」

「いまどきなにだろつてレベルの眩しい白いスースーに
いまどきないだろつていつレベルの入念に整えられたであるアロー
ゼントヘアをした
いまどきないだろつていつレベルのザルビアじた男が立つていた

「あ……ああ、お前来たのか……。」

「いやあね、ここで誰かが暴れまわつてゐつて情報を仕入れたから
ぶつ飛んできたわけ！いやあ、最近はあにつらデカイ顔しすぎだよ
ねえ」

「おめえ、こいつももめ」とが終わつた後にへんじやねえかよ……」

マスターはものすごく嫌な顔をしていた

「いやだな～！そんなことないよお～　たまたま、情報が入る時間が
がこうなつて。たまたま、ここまで駆けつける時間がこの時間にな
つちやつただけだよお～」

「う～ん

「おこ～…アイツはウザいから関わらないほうがいいぞ。あいつの存

在 자체가 웃자이거나。
」

「ハハハ」
聞こえてる聞こえてるうへへ！マスターひどいなああ

そんな会話のやりとりのあと
じつに田に向けるウザい男

「あつれえ～？こんなとこに可愛い子が！しかも一人…！こんなしょぼくれたバーにいるなんてえ～！今日は超ラッキーじゃね～？」

…本当にウザかった！

しかも気が付いたら私の横に座つてゐるし……

「ねえねえ、どっから来たの？その顔、アジアンビューティーだねえ！それにすつしょく綺麗な目をしてるね。うわあ、この白い手もすごく素敵だあ」

なにかにつけて私に触るつとしてきた

「あ！そつちの子もすゞく綺麗だねえー！すゞく髪の毛サラサラでシルクみたいだ！ちょっと触つていい？」

ボスにターゲットが向いた

ボスがどんな反応をするのか少しだけ好奇心が湧いた

「かつかつか！本上う！！良かつたな！探す手間が省けたぞお！」

?

そんな事を言うと、いきなり男の股の…ソレを乱暴に握つた
いやいや、ダメだつて…どんな反応をするのか期待してたけどそれ
はダメだつて…!
ここを成人向け小説にする気…?

「おおおうふ…い…いきなり、そんなとこを…だ、大胆じゃない
かあキミ…」

さすがの男もうろたえていた

「久しぶりだなあ…?お前、ちいせえ頃からずつとチビでじりじょ
うもない卑屈な男だつたのに成長したじゃねえかあ…?」

「ええつと、どこかでお会いしたかな…?ハハハ…こんなに大胆
に女性に迫られたことないけど、君ほどの美しい人に声をかけられ
たら忘れるわけないんだけどなあ…」

いまだに軽口を言い続ける男

それを聞いてんのかどうか分からぬが
ボスの手はさらに男の…
イヤイヤイヤ…!これ以上は言えない…!
とにかく力を強めた

「アアアア…!それ以上はダメだよ…!男のソレは真綿のように

繊細なんだあ！」

女の私にもなんとなく分かる
痛いのは想像に容易かつた

マスターも突然の出来事に呆然としていた

「カツカツカ！立派にはなつたが、潰された玉はもどつてこねえよ
なあ？もいつこの玉も潰してやろうかあ？スラムで一番のチビだつ
た片玉の マルコよお？」

その話を聞いたら、男の顔はみると血の氣がひいて青ざめてい
つた

「ど、どつひて！？その話を知ってる人なんひええ ー？」

男は最初のキザでナンパな姿からは想像もつかないほどにみつとも
ない姿を晒していた

「お前に会いに行こうとしてたとこだーちよつと色々と…清算をし
にな…」

ボスはいつになく真剣な顔つきをしていた

「やつぱよ。人間つてのは完全に生まれ変わりはできねえんだよ。
ケジメはしつかりつけにいかねえとな…」

「ちよつとー！嬢ちゃん！…やりすぎだ…マルコが泡吹いちまつ
てる…！」

マスターはなんとか正氣を取り戻しボスを止めていた

きつて握りしめすぎていたらしい

これが

スラム街のチビマル」との最初の出会いであった

以下、サル

前略、おふくろ様

春も過ぎ去り

夏の影がちらりちらりと顔を見せる季節になりました

私もとい僕、なぜか知らない場所で64な大乱闘をガタイの良い屈
強な男たちとプレイしておりましたが
気が付いたら、なにやらピンク色の少し大人の香りがする部屋のベ
ッドの上にあります

聞こえてくるのはシャワーの音

大人の階段を上ろうとしてる僕はまだシンデレラなんでしょうか?
このまま甘酸っぱいをくらんばかりクラスチョンジをするのでしょうか?

まさか、高校に入学した当初は予想もしておりませんでした

しかし、これは甘酸っぱいラブコメや様々な出会いの過程をすっ飛ばして
いきなり濃厚な成人向け小説になりさがりつとしてあります
そんなことが許されていいのでしょうか?

：僕は構いません

確かに純潔をこのよだな過程で失うことになる怖さはありますが
青春時代の中高生の性欲を侮ってはいけないと思っています

むしろ

そんなの関係ねえ
そんなの関係ねえ！――！

ムラムラは時として物語を破たんさせるものであります

現実はそういうものなんです

うつひょおお

僕はアルセーヌな三世のよだれベッドに飛び込む自信があります

やつらがここにいる

シャワーの音が止まりました

『次、入っていいよ。』

「うひょおおおおーーー

僕はびつなつてこめうのでしようつか?

えりもなつないんでしようつか?

どうでもなつてしまえばここと思こめます

過ひと修正と未来への歩み方

そんなわけでマルコのおひでにせつてきましたと
どうにうわけだう

ちやんちやん

「いや～美少女一人を部屋に招く機会があるなんて、僕もついてる
なあ～ハハツ」

このとでもウザい男はマルコ

この街の住人で、情報屋という側面も持つている

：らしい

こんな軽薄そうな大学生ノリの男がある

すっかり調子を取り戻し、相変わらず軽口を叩いている

「これでも、わりかし女の子にはモテるほうなんだけど、E～でも、君たちみたいになかなかびかない女の子のほうが燃えるつて
いうか？バーニングつていうか？」

「カツカツカ！こんなおんぼろの割に中は豪華じゃねえか！…」

地元の人間しか通らないような薄暗い路地を抜けて

今にも崩れそうな雑居ビルの中にマルコの住居は存在していた

ボスの言つとおり中はビルの外見と違つて、非常に真新しい印象を

受けた

「この男が口だけではなくて、本当にしゃれさんなんだと思わせる説得力はあった

見た目とか雰囲気は苦手だな…

ところが、ボスくつろぎ屋

お前の家か！とシッ パリたくなるほどに他人の住居でくつろいでいる

「せんでも、チャマルコよ。それしゃべ話があるんだけどよ」

ボスのそんな発言に少しビビる姿勢を見せるマルコ
やつぱり初っ端の出来事が非常にリマウマリして

いや、当たり前だよね

片玉じころか

両玉失いかけたんだから

「違ひ……僕は片玉じゃない……ちゃんと両玉あるよ……」

「え？ こや、だつて…」

私の思考を読み取ったのか

はたまた、ボスに話をかけられて世の思い出がフワツ シュバックしたのか

いきなり拒絶するような声を張り上げた

「あれは……近所のロメオが……俺をバイクで追いかけまわして……ブツ
ブツ……」

どうやら触れてはいけないことらしい

私も初対面の人をそこまで追い詰める趣味はないし、放つておくことにした

「カツカツカ！バイクで追いかけまわされたあげくに、近所の野良犬のしつぽを踏んづけて玉を食いちぎられかけて医者に駆け込んだっけなあ！…」

容赦ないなボス！！

人のトラウマにデングフシー・ロールで追い打ちをかける所業だよ…！

「だからあー君はどうしてそのことを知ってるんだよー！？ははーん、さては僕のストーカーだなー？僕のことが好きすぎて、僕の情報を探もつとするイケナイキューピッドなんだなー？」

この男はこんな時でもボケを忘れないらしい

「カツカツカ！こまけえこたあいいんだよー！…なんなら、今度は本当に玉をくいぢぎつてやろうかあ？」

「ヒィイイ！ストップ！本当に勘弁してくれよ」

ボスがもう一度、股に手を伸ばそうとすると必死に抵抗してくるマルコ

まるで昔からいる「イジメつ」と「イジメられつ」のようだった

「もうーせつかく、この街から口メオがいなくなつたっていうの…とんでもない災難だよ！」

「ん？ ロメオさんって人がいなくなっちゃったの？」

今会話に出てきたロメオ

マルコさんが玉を失いかけた原因の人

「そうーーロメオは昔からの仲でね..。本当に最悪なんだよアイツうーー昔から僕のことをバカにしやがって..しかも、突然にいなくなりやがったんだ！」

なんとなくさつきの酒場で話してた内容と結びつきそうな気がする

「そのロメオさんって..もしかして結構危ない人？」

「そうーーロメオは危ない人！この街のファミリーの幹部だったんだよおーーどうしようもない悪ガキで..本当にどうしようもない悪ガキだったんだ！アイツがファミリーになるのは決まってたようなもんだよーー！」

どんだけどうしようもない人だったんだろう..ロメオさん..

「おいーーこのベッドの下にポルノが隠してあるぞーーちょっと隠し場所考えろよなあマルコおーー」

「うしょもないなーーボスーー！」

「ここにもどうしようもない人が一人いた
やめて、そんな本を私に見せないでよ..」

「うわああーやめろよー健全な男性のいたいけな心をそんなおおつぴらにひり若きレディが乱しちゃダメじゃないかああー！」

なんなんだろう

中学生の会話みたい

いちいち話の腰が折れてしまう

「それで…」この街がめちゃくちゃになる原因になつたロメホさんつてどうなつてゐるの？情報屋さんなんでしょ？」

私が仕切りなおさないとたぶんめちゃくちゃになりそうな気がした

「あ…ああ。それがね、さつきのバーでの会話の通り。海外での取引中に行方不明さあ。僕の情報網でも追いかけきれなかつたよ大概の情報は入つてくる僕だけど、」

そつなんだ……見つかるといいね……ロメオさん……

私はボスに向き直る

「もういえば、セツキボスがマルコさんに聞きたいことがあるって言つたじやない？正直、今の話からサル君を探し出す」こと詰つけるのは無理があると思つたが」「

「そりだつたなあ！ロメオの話はどうでもいい。それは二の次だ
！いや、三の次くらいか？」

二九一

「まあ、いいかあ！いやなあ。とある人物の行方……いや……マル」「も
よく知つてると思つけどよお……エリカは……いま何してるんだあ？ど
こにいる？」

エリカ？

誰？

私たちはサル君を探しにきたんじゃないの？
サル君ってエリカって名前なの？

「ちょっと！ちょっと！－なんで子猫ちゃんはそんなとこまで知つてるの！？まさかまさかのまさかだよお！」

マルコはありえない単語が出てきた事に驚いていた
私には何が何だか分からない

「ん~、どこまで話していいものか…元々は隣のシマのファミリーの子だつたからねえ~。なんで、ロメオはあんな女をガールフレンドにしたのか分からないよ。」

また出てきたロメオといつも前

「確かに、田もぐりむよつな美女だつたけど、僕には毒が強すぎたよお。あれはね、メデューサだよお。あの美貌とは裏腹に…だね。やっぱ女性は純真無垢で天使のよつな…」

「んな話はどうでもいいんだよお！－アイツが…エリカがどこにいるのか教えろよマルコ！－おお！」

いつも通りに聞こえるボスの口調、だけど
どこか真剣にもとれる感じだった

「ちよつとちよつとおー落ち着きなよ子猫ちゃん?せつかぐの綺麗なお顔なんだからサ」

この人もさんざん痛めつけられてるけど、自分のスタンスを崩さないようにしているのが分かる
まだこんな調子で喋れているのだからすごい

「エリカはねえ…ロメオがいなくなつたあとに、この街で元のファミリーの手引きをして合流サ 今はこの街を牛耳つてるYO!最初からこれが狙いでロメオに近づいたとしたらとんでもない女だよ本当にわあ~」

「よく分からんんだけど…今の話だけまとめるど、行方不明のロメオさんの彼女さんがエリカさん?そのエリカさんは今この街を仕切つてる組のボスなの?」

「ん~そんなんとこかなあ。この街の支部長さんみたいな感じ力ナ?す"じ"よねえ。女なのに、ファミリー取り仕切つてるなんてぞ!」

話の全体はよく掴めないけど

大体の流れは把握できた。

ますます、サル君から遠ざかってるような気がする

なんで私は会つたこともない人の心配をしてるんだろう?

「へああーややこしいことになつてんなあーおいマルコ!ルリオとマイジはどうしたあーあの二人がいれば問題なかつたはずだろお!
?」

「どこまで事情通なんだよお子猫ちゃん…。ファミリーのあの一人はあつさりと引いたらしいよ。あの一人もロメオにべつたりだつたからねえ。ファミリー全体をまとめきれなくてやられる一方だつたらしいよ。今となつちや、むやみに血を流すような事がない英断だつたと思つけどねえ~」

そこまで聞くと、ボスは何かに気が付いたようにぐったりと椅子にもたれかかった

「カツカツカ…。俺は色々と見誤つてたな…。俺は昔からいつも通りに振舞つていただけだつたが、いつの間にか多くのモノを背負つてたんだなあ。結局は、巡り巡つてなんの運命か。俺はこのために生かされてたんじゃないかと思つちまうぜ…」

ボスは笑いながらも、すごく辛そうであつた
こんな表情をする人だつたんだ

いつも明るくて

破天荒な振る舞いをする

そんなどうしようもない人だとばかりと思っていたけど

想像以上に何か重いものを背負つているのかもしれない

だからこそひきつけられるのかもしれない

「おお、子猫ちゃん。落ち込んでる姿もとてもキュートだね…！むしろ、僕的にはそっちのほうがそそられ ブオッ」

私は空気を読んでマル口の口をふさいだ

正直なところ

ここまで落ち込んでる姿を見せられると私も可哀想に思えてくる
ボスには常に笑っていてほしいというかなんというか

「ボス……その…今からでも大丈夫じゃないかな? サル君を探すん
でしょ? 今のボスが何を抱えているのか私にはよく分からんけど、
ここに来たのも何かの運命なんだろうね。」

もしかしたらボスの過ちとかやり直せるのかもしない。自分が
気が付かなかつた事とか。そういうのを全てやり直していくよ。
これからさ。私も力になるよ? 何の関係もないかもしねりいけど、
こここの場所がスタートなのかもしねりいよ? ボスには笑顔でいてほ
しいな」

私は知つた風な口を聞いてしまつた

偉そうなことを言つちゃつたなとちよつと氣恥ずかしくなつてしま
つた

でもこれが正直なボスへの気持ち

ボスは少し考えた後に綺麗な顔をこすりに向け私を見つめてきた

「本上よお…」

「ん?」

「…お前はいい嫁になるぜえ! 僕のお墨付きだ! 世界中の男がほつ

ておかねえーむしろ俺の嫁になれー！」

百合宣言！？

私にそんな趣味はありません！！

「僕は今、とんでもない美しい場面を見てしまったようだあ！…どうぞどうぞ続けて続けて！出来れば手を取り合つて顔を近づけて…」

「ちょっと…なにしてんのーバカじゃないのー!?」

カメラをこじらせて向かうとするマルコを思わずはたいてしまった

「カツカツカー！おめえもこりねえ男だなあーマルコー！」

笑顔でそう答えるボス

その顔にはもう曇りはなかつた

良かつた

さて　　これからどうなるんでしょう

以下、サル

前略、おふくろ様

僕はやくらんぼからパラティンにクラスチエンジできなかつたよう
です
ですが

女性と一夜を明かす

これは半分クラスチエンジしたも同然だと思います

半クラです。半クラ

あれって、加減が難しいよね。
エンストしちゃうよね

シャワーを浴びてる時も胸の高鳴りが収まりませんでした

鳴り止まない熱き鼓動の果てに です

シャワーからあがる僕

僕はいつもいいぜえふじいぢゅわん！！

…？

どうやら相手はお酒を飲んでいらっしゃるようですが

「ちよっとお、話を聞いてくれるかしら

どうやら酒の愚痴に付き合わされたみたいです

ふむ。

このやりばのない衝動をどうしようか

椅子に腰かける女性の前でパンツ一丁の僕が正座することになった
すごく恥ずかしいです

女性の前で裸な時点でだいぶアレですが
そのうえ正座って！！

そういう業界の人からしたら「豪美なんだろ？けどさ

まだ高校生よ？

分かる？

アリアハンで「石像を相手にするようなもんよ？」
すっかり萎縮してしまった

「私の酒が飲めないっていつのまうやあ？」

「飲めるも何も僕…未成年ですし…」

この人は大人の雰囲気が漂つていらっしゃる

フェロモンムンムン

こんなに美しい人どうして僕が一緒にいるんでしょうか？

回想

僕は64な大乱闘をマツチヨな方々と一緒にやつていると

いやね

その時点でのいぶ変なんだけどさ

さうにとんでもないイベントが

ボロボロになつた人がいきなり扉から入つてきた
ロマンシングなサガの3なら、お姫様が入つてくるようなイベント
だけど

残念ながら、太っちょの男が男一人をかつぎながら入つてきた

それから一通りの拳動不審のあとにこいつ言った

口…ロメオが帰つてきた…！

僕からしたら

え？誰？ロメオ？歐米か…！
つて感じなわけですよ

でも周りの反応は違つた。

部屋の至るところで恐怖ともとれるようなざわめきが起きた

そつしたら一人の男の合図を機にみんな部屋を飛び出していったんだ

僕からしたらぽかーんだよね？

空気を読んで一緒に飛び出していくべきだったかな？

とにかく一人で取り残されちゃったの
あれ？僕は帰つていいいのかな？って感じだよね
でも、正直なところだか分からないし
少しむずむづしゃつた。

とつあえず部屋から出してみた

そしたらさ、なんかすげー大きい廊下で
走りだして走できるんじゃないかなってね

扉もいっぱいあるしわ

「まだ僕はおひおひしゃつた

しうりがないよね？

『ぐるぐる普通の高校生だもん。』

こんな廊下は漫画でしか見たことないもん

とつあえず歩いてみるの
でもや
道に迷ひちゃつた

似たような作りで
似たような景色がずっと続いているみたいな感じでそ

途方に暮れちゃつたよ

そうしたら声をかけられちゃったよ

「あー、アナタにしてるのぉ？」

振り返るじゃない？

そこにはバインバインの美女が立つてたわけ

ああそうか、ここが天国かと勘違いしちゃったよ

「聞こてる？」「？」

「は、はい！アナタが綺麗すぎてムラムラしました！…」

しまった！！

本音と性欲がストレートに声に出してしまった…！
おまわりせーん！僕です…！

「ううとお。正直すぎるわよ

そういうって聖母のような微笑みを僕に投げかけてくれた
同じ人間とは思えないほどの綺麗さだった

「ん~、アナタちょっと暇？よかつたら私の部屋に来ない？」

「ハイ！喜んで…！」

我ながら欲情にストレートすぎ、久々の長い喋りだからって自重を
知らなすぎだな僕

居酒屋の店員さんのような気持ちの良し笑顔で応えてしまった

そこからはみんなも見ていてくれた通りだ。

ああ、そうだ…

僕のマスクコット的なまりもの存在を忘れていた
そんなことを言つと怒られてしまってさうだけど
もちろん傍にいる

だけど、なぜかあまり姿を見せてくれなくなつていて
時たま姿を見せたと思つたらスッパリかにいなくなつてしまつ

あんなまつもでも、いなくなると寂しいもんだ。

ちなみに、僕がおねーさんと会話していくときは軽蔑のまなざしで
僕を睨み付けていた
フフフ…なんとも思つがこゝれ…

回想終了

「…といつわけなのよ。聞こてるオサルさん?」

「はい…もうひるんでしま…」

赤ちゃん言葉で泣きたくなへりの女性なのだ

「ウフフ…可愛こ子ねえ。それに…おーく…似てる

「似てる?誰ですか?」

「若い時のロメオそつくり。雰囲気つていつか

「ロメオが誰だかわかりませんが、おねーさんみたいな綺麗な人と一緒にいれて幸せです！！」

「やつも言つたじゃないの。ロメオは私のオ・ト・『」

「彼氏なんにいらしゃつたんですか…？」

僕、シヨック…

いや、このおねーちゃんのいつの出来るとか思つてないよ？本当に本当だからね？…本当だよ…？

「う～ん、今でもなのかなあ？おねーさんは難しいかな～？」

いやん、そんな曖昧で小悪魔な微笑み！

天使のような悪魔の笑顔！！

そんな返事が出来るなんて素敵すぎます。

「ロメオねえ…今頃、どうしてのかしら？死んでたりして」

ちよつと悲しげに微笑むおねーさん

「おねーさんにそんな顔させるなんて、ロメオって人は罪な男です！そんな男は忘れて僕と……！」

「ウフフ…ダメ。坊やはちゃんと大事な人と……ね？」

「こんな顔されたら何も言へなくなつちやうぜ…！」

ひやつほーい！

むじり、JG的な女性と会話できるだけでもありがたいことのものだ

「アリス、行かなくちゃ。楽しかったわ、ありがとうね坊や。この部屋は好きに使ってね。でも、危ないから当分はこの部屋からは出ないまづがいいわよ」

「ああ～おねーさん～」

僕はおねーさんの後姿を娘めしやうに眺めていた
すると振り返り僕に向かってこう言った

「そ・れ・と、私はおねーちゃんじやなくて『ヒリカ』って呼んでくれなきやだ～め」

愛ゆえに憎いカタストロフィ

私はボスと病院に向かうことになつたらしいなぜ？

情報屋のマルコから情報を得た私たち
そこらへんは省略

『本当だつたら子猫ちゃんたちに莫大なお金を請求しちゃつとこだ
けど、この分は君たちがもう少しアダルティックなレディに成長し
たら僕と一夜のアバンチュールで勘弁してあげるよぉ！ハハッ！』

だって

本当はボスにビビつて請求出来ないとと思つたんじゃないかな

「それで、なんで病院に？」

「カツカツカー！なぜかつて？それはとある人に会いに行くからだよ
！」

相変わらずの説明不足。

いつもに来てからそういうの多くない？

といつより、私のついてきた意味って…

天空の勇者でいうところの正義のそろばん使つ商人だよね？
常に馬車…

「カツカツカー！トルネコは使えねえなあ！」

名前言ひちやつたよー

あえて伏せてたのにーーー

トルネ「だつて不思議なダンジョンとかだと主役じゃないーー
ドリゴンとか一人で倒しちゃつよ?」

「探索してるとさう地雷とか踏みつけちゃつて爆弾箱まで連動しち
まつと大変なことになつちまつよなあ」

あるある

……じやなくつてーーー

「私つて来た意味あるのかなあつて。思ひちやつただけだよー今だ
つてただボスの後ろをついて歩いてるだけだし……」

「良じにきまつてんじやねえかあーーーに来たときばどいなうこと
かと思つたが…今は本上がいてくれたことに感謝してるぜ?…ツ
ツ」「役がいないと物語が破たんしちまつよーーー」

「わつこつ要因ーーー?」

メタがすざわるよーーー

私たちは病院までの道のりを歩いている
こんなアホなやりとりをしてるけど、いじまでの道のりはいたつて
シリアルアスであった。

こんな緩和剤でもなければ、とつもなに冒険活劇になることだらう

改めて、いの街を見回してみる

とても古い
歴史を感じさせる街並みだ

まるで異国のような情緒をかんじわせる

そう、私が思い描くヨーロッパのような…

「ユーロッパだぜ？」

「え？」

「カツカツカ！お前、今まで自分がどこにいるかわかつてなかつたのか！？」

「だつて、みんな日本語喋つてたよ！？明らかにノリが日本人だし、ネタだつて日本人ノリじやない！？」

「カツカツカ！そこはこの小説を海外向けの英文ノベルにしないための便宜つてもんじやねえかあ？」

「そんな都合の良いことあるの！？」

『あー…あー…そんな都合のいいものがあるで』『やれ』

「うわっ、気持ち悪い！」

脳内に直接響くような声が聞こえた

『つむ、無事に着いたようで何よりで』『やれ』

「その声は…狭間さん?」

『いかにも。拙者は狭間あわらだいじゅわ。…今は』

「今は…?意味わかんないよー。」

そんなこと今までひづりもよかつた。

「それよつこの声せどじつなつしるのへす、じへ『仮持け悪いんだだぢへ。』

『ふむ、これは転送者用の通信でござる。凄こじやれぬひへ、され、魔法なのだぜへ。』

「なのだぜつてなによ…」

改めて、自分がいま非現実的な状況にいると突きつけられる

『うむ、やはり異世界において『//』とケーショントコツものば大事でござるからな。転送者には自動的に転送先の言語を自動翻訳する機能がついているでござる』

「なにを言つてゐのか分からなによ…」

『簡単に言えば、翻訳じんしゃくみたいなもんだいわぬな』

『でもネコ型ロボットの後追いみたいな人だな
どりえもへん…』

『現地のジョークや意訳は日本向けのジョークにアレンジされる機能もついているでござる』

「それって凄いけど、翻訳とこへはめどりなの？」

「カツカツカ、俺はこいつの言葉もペラペラだから意味ねーけどなあ。」

とにかく、物語上で非常に都合の良い産物だとこいつのは分かった
「まあ、それはいいとして…こきなつどうしたの?こんな時に通信
だなんて」

こいつに慣れてしまっている自分が嫌だ
こいつは読者のためにも、説明パートは省略しておこう

『ええ~、今部屋に一人でえ~寂しくなつてえ~電話しちゃつたあ
』

「彼女か!!」

『私のことお~どれくら~好きい~?』

「彼女か!」

『私のほうがもつともつと好きだよお~?』

「…彼女か」

… いのやつといつまで続くの?

『私い~鎌倉のほうで女性ばつかの大学行ってるんですけど~

「…え？…あ！鎌女か！…」

『「え？…あ！鎌女か！…」当地ネタありがと「わざわざこまゆす」』

『「つむ、本上氏はツツコミの鬼才でござるな。その溢れんばかりのボキャブラリーにぐうの音もでなじでござるわよ」』

なんか…とても嬉しくないです

『「それより、今のどこ何か情報はないでござるのか？サル氏の情報は？」』

「うーん、それがサル君を探しにきてるはずなのにすこく変な方向にね…今のところ手がかりなしでござる」厄介ごとが増えちゃいました。みたいな感じかな」

『「ふむ、状況は好転せず…ござるが。』

むしろ、変に回り道してるような気がしてならない
だが、ボスはとても気楽な顔だった

「カツカツカ！大丈夫だぜえ！俺はすでにある程度は日星がついて
るからなあ！」

『「え…？…うなの？…とも私にはそんな風には感じないんだけど」』

『「なんと…流川氏はさすがでござるよー。』』

「だから、お前は何も心配するな！安心してサルのお出迎えの準備

をしておけよお？』

『「つむ…――会つたばかりの拙者のために」今までしていただいた
…本当に感謝してもし足りないで」『やるよ…――一人の無事も祈つ
ているド』『やる…――また何かあつたら連絡するド』『やる…』

そういうと頬はぱつたりと聞こえなくなつた
唐突すぎる人だと思つ

この一日でだいぶ唐突なことが多にな
唐突すぎて本当に何年分くらいの経験をした気がする

「これでれてつてつて。おめでとう――にははレベルアップした
――」

「いや、何言つてんの…」

こんなやり取りをしてるとボスは足を止めた

「さて…ついたぜえ。」『だ

なんかあつといふ間とつかなんといつか

顔をあげて全容を把握してみる

街の規模にしてはとても綺麗で
大きめの病院であった

「で、ここに誰がいるの？」

「ん？ああ……言つてなかつたけがあ？」「……」先代のボスがいるんだぜえ？」

「ええ！？聞いてないんですけど……」

なぜ？

病院には前に「ひへんを仕切つてたフアミリーの先代がいる」

疑問ばかりが頭に浮かんでくる

「んじや、行くかあ～！！」

「ちよ、ちよっと危なくないの？やつぱ……そつこいつひとたちなんでしょう？」

「んん～？どうこう人たちだつてえ～？よくわからんねえけど大丈夫じゃねえの？」

「すいへあやふやだよ……そんなんでよく来れたな……」

「まあ、顔バスだろお。顔バス！」

「え？なに？アンタ、えらいひとなの？」

以下、病院内

「……で、どうして私たちは困まれてるの？」

「あれえ？おつかしいなあ～？」

私たちは病院に入つて、ナースに病室の場所を聞いた
とても怪訝な顔をしていた

そりやそりだらう

こんなとこに女子高校生が一人。なんの用事でファミリーの先代ボ
スに会いに行くっていうんだってーの

病室に向かう途中でなぜだか知らないけどおつかない顔した黒服の
人たちに囲まれてしまった

「おー、お前ら……そーの……病室に何の用事だ？」

そりやそりなりますよね——————！

ましてや、限りなく追い詰められてる状況下
命の危険がある

そりや警護の一いつや一いついてなことおかしいと想こりますよ——
——ハハハ

「カツカツカ！おめえらも変わつてねえよう何よりだ！……少し
疲れ気味かあ……？」

ボスが大声で相手に話しかける

「ちよつ、ここ病院……もう少し静かに！」

…つて、私もそんな心配してる場合じゃないーー！

「ああ……？」

ぎるりと睨まれる私たち
さらに疑惑が大きくなつたようだ

「いえっ、その…私たち…その…」

私はしどりもどりになつてしまつた
といつか、ここに来た理由をしつかりと聞いていいない

「こゝはボスに…

いやいやいや… こゝの場面のボスは極めて危険だ
何をしてかすか分からぬ

重たい沈黙の中に私の乾いた笑いだけが響く
そんな中、この沈黙を打ち破る声が囮んでいる男たちの後ろから聞
こえた

「貴方達、この騒ぎはなんですか。こゝは病院ですよ？ボスのお身
体にも触ります。静肅に」

とても紳士的で厳正な声はスラつとした高身長の姿勢の綺麗な眼鏡
をかけた男性から放たれたものだつた
取り囲む男たちはハツとして、道を作るよつてその男性の前に整列
した

その様相は、統率のとれた一つの軍隊のような動きでもあった

厳格で威厳のある声

気品に満ち溢れていた

傍から見てもこここの場を取り仕切る偉い人だといふの人だといふのがよく分かる人物だ

整列した男たちの中の一人が声を出す

「いえ、ルリオさん…何やら、ボスに用事とかいう怪しい一人がいたもので…」

「ふむ」

そう一言じつと私たちを品定めするかのような目つきで見回した
それから端正な顔立ちから言葉を発する

「失礼、お嬢様方。何分、今は物騒な事が多く起つてているもので
部下も少々気が立っています。それで、今回はどの様なご用件でこ
ちらにいらしたのでしょうか?」

こちちらが萎縮してしまつくらいに紳士的な態度で私たちに接してくれる

「え、えっと…それは…」

先ほどとは違う緊張感があつた

ちらつとボスの方を横目で見…

あれ？ ボスが横にいない？

意味が分からぬけど、ボスは隣にいなかつた

それじゃボスはどこに…

「よおよお！ ルリオおー！！！ 相変わらずかつてえなあおめえはあ。
そんなんじやいつか窒息死しちまうんじやねえのかあ？」

先ほどまで話していた男性の横で肩に手を回しながら小突いていた

「ええええー？」

慣れなれしすぎるー！

なにー？ 君たちは数年来の同窓会で会った人達みたいになってるよ
！ ？

周りの人も固まっている

周りの空気が凍り付いているのがこれほど分かるような場面もなか
なかにお目にかかれない

「…失礼。 貴方は？」

先ほどの柔らかい雰囲気ではなく、ギロリとした目つきでボスを睨
み付けているように見える
やっぱファミリーの偉い人というだけの迫力があった

「…ああー！ そうだったー！ お前は昔つから女に弱かつたよなあー

！そのたびにそんな顔して女泣かせてたもんない！分かりやす
ぎんぞお前え～！！ちょっとは直せよそういうとこある。俺は嫌い
じゃねえけどなあ！！

ボスはまるで物怖じしない雰囲気でむしろ身体を相手に押し付ける
ような形で相手に迫つてゐる
もうやめて！…もうやめて！…

空氣を読んで！…

そういう流れじゃないから！…

いや、初対面の人には接し方はどういう流れでもありえないから
！！

さすがの紳士な男性も額の青筋がピクピク動いているのがここから
でも分かるようだった

どうじょづー！

少なくとも私にこの場を取り繕つような技量はなかつた

というかそんなスキルを持ち合わせている人なんているのかどうか
誰か～…どうにかして～～！…

「あれえ～？兄さん、なんで女人の人とそんなベタベタしてんの～？
彼女？ねえ～彼女なの？」

どこからともなく、少なくともこの場に似つかわしくない気の抜け
た声が聞こえてきた

「兄さんみたいな身も心も鋼で出来たような人にも彼女が出来るもんだねえ～」

「この声が病院の窓の方から聞こえてくる」とに気が付いた

「少し静かにしていなさい…今はその様な場ではないですよ。…マ
イジ」

すり落ちそうな眼鏡をかけ直す仕草をしながら言い放つ兄と呼ばれる男性

私は窓の方に目を向けると、大木の枝に一人の男性が座っていた

「ちよつとやつに行くから…ちよつと待つて…」

え、ここ4階だよ？

とこうよつじうやつて登ったの？

あぶな…

「よつと

そういうと木にいた男性は、こちらの窓に向かつて飛び込んだ

「あれえ？どうしてみんなこんなところに集まってるの？兄さんに彼女ができたことのお祝い？」

彼は軽々とこちらに飛び込んで見事に着地を決めていた

曲芸師さん…？

まだ、そこまで年齢もいっていないであらう顔つき

たぶん私たちと同じ年ぐらい…？

それにしては純粋で綺麗な瞳をしているなあという印象だ

「おお……マイジじやねえかあ！！元気にしてたかあ？お前は相変わらず可愛いよなあ…ウリウリ」

ボスは相変わらずといふか

気持ちの悪いくらいにフレンドリーであった

「うわっ、ねーちゃん誰だよ…おっぱいあてくんなよ…離せつて…！」

突然の新キャラ一人の登場に私は戸惑っていた

それに対して、「コイツ無邪氣すぎるだろ…

しかし、二人目の来訪者のおかげでなのか先ほどよりは場の雰囲気は和らいできた

言つなら今しかないと決意した私は意を決して発言した

「えつと…私たちは…先代のボスさんに…会いにきました…」

あつけにとられていたみんなは私に視線を集めまる

「ふむ…」

「え～、ボスにあいにきたの～？ビツして～？」

二人ともボスの腕の中から私に発言をした

「えつと…それは…」

「…」でまた言ひよどむ
理由がやつぱり分からぬ。

それでもみんなの注目はやむことがなかつた

私はボスにヘルプサインを出した

「ん…、ああ忘れてたわ！…ついつい、お前らに会えたのがうれしくつてなあ！…わりいわりい！」

本当にむちやくちゃだよこの人…

それから、わずかの間を置いてから
少しだけ真剣にしゃべる

「俺はロメオ…」

そこから考えるようにもつ少しだけ間を空けた

「…俺たちは…ロメオの使いで来た。ジジイに会わせり」

せっかく和んだ空気がまた張りつめだした
みんながその名前を口にした瞬間に今までの緩んだ表情から本気の
顔つきになつた

ボスに抱えられたままだつた二人は見合わせるようにして

「兄さん…」

「あ……」

そつ言葉だけ交わすと

私たちは

床に取り押さえられた

本当に瞬きもできないほどの速さで一瞬にして床に
私もボスも動く間もなくだ

それがどれほどのことなのかはこの物語を読んでいる人には察して
もらいたい

そして頭に固いものが当たる

「おー、テメHいらの名前を口にしたことがどんな事か分か
ってんだろうな……？」

先ほどの無邪気な表情からはまるで想像もつかないほどの

冷たい

温度を感じさせない声を出す弟

「今すぐ死にてえか？女だれつとなんだれつと容赦はねえぞ？」瞬
での世に送つてやるよ」

ボスを押さえつける兄

彼も先ほどの紳士的な態度からは想像もつかない言葉遣いと雰囲気
をまとわせてボスを見下ろす

そしてボスの方を、なんとか見ると頭に当たつてるモノがなんなか
が分かつた

拳銃

こんなモノを生で見る日がくるなんて想像もしなかったよ

ましてや、そんなモノを頭に突きつけられて
自分の命を容易く散らすような状況になるなんて…

正直、ここに来るまでは

なんとかなる

とか

ちょっとした好奇心

なんかがあつたことも少しあは否定しない

でも私たちが置かれている状況はそんなファンタジーじゃなくて
とても冷酷な現実なんだということを実感させられた

一気に恐怖心が湧いた

私みたいな高校生がどうして？

なんで？

怖い…

怖いよ！！

助けて！！

「カツカツカー！」

私の耳にボスの笑い声が響いた

「なんで…」

どうして

「なんで笑つていられるのよつー？これはギャグでもなんでもないのよー？こんな笑えない状況になつて何がギャグよー！？こんなの打ち切りよー打ち切りー！」

私はボスの笑い声がきつかけでどうしようもない感情が溢れでてきた

自分勝手

エゴな感情

分かつてはいるけど、止められないものだ。

「おめえら、変わつてねえなあ。」

ボスは笑い交じりに押さえつける連中に向けて発言した

そしていきなり大声を張り上げて言い放つ

「おい！…クソジジイ！…聞いてんだろ！…口メオだよ！…てめえに小さいころから世話をになつてやつた口メオだ！…黙つて見てねえでなんとか言つたらどうだ…！」

「うるせえぞ。てめえ。自分が置かれてる状況が分かつてんのか？」

なおも銃を突きつける兄
このまま死んじやうの？

状況は絶望的だ

私にはどうする」とも出来ない

とてもじゃないけど笑える状況ではない。

「…あと…教えといでやるよ。ボスはなあ…口メオがいなくなつたあとに倒れて寝たきりだ。あのクソヤローが突然行方をくらましやがつて。ボスは後始末に追われる中で倒れちまつて意識が回復してねえんだよ。」

「それをノコノコと…口メオの使いだあ？いまさら伝言なんて送つてきやがつて…アイツの顔を見た瞬間に鉛玉ぶちこんでやるよ。少なくともここにいる連中はみんな口メオを信頼してんたんだ。最高の兄貴だつたつてな。」

少し声が上ずり涙が出てきになるのを堪えていよいよつた感じだった

「あのクソヤローは俺の…俺たちの全てを台無しにした裏切りモノだ…！許されるはずがねえ…！」

先ほどより強く私に拳銃を当てる

「…」こつらを殺してロメオにそらし首にして見せつけてやる。今更何をやつたって無駄だつてな…！」

…絶望的だ

こんなことなら来なければよかつた
そう思いかけてしまいそうになるとき
目の前の病室の扉が開いた

中から慌てた男が出てきた

「ああ？邪魔してんじゃねえよ。」

兄弟は男を睨み付ける

「…が…」

男は慌てていつしかりと喋れていなかつた

「あ？」

聞き直す

「ボスが…！…ボスが目を覚ました…！」

周囲がざわめく

そのまま続けざまに男がいう

「田を覚ましたボスから伝言です……」

周りが私たちのことなんて忘れたかのように聞き耳をたてる

「一字一句余さず伝えます！！』ガツカツカ。なにやら気にいらねえ名前が聞こえてきたと思つたら外が騒がしいじゃねえか。お前ら、ここは病院だぞ？ 静かにしやがれ。あと、クソロメオがいたら伝えろ。俺はクソジジイじゃねえ。お前の口の悪さは誰に似たんだ。』

』

なんという豪氣さ

なんというボス

みんなが聞き逃すまいと集中している

『『あと一つ…ロメオ。そろそろあいつらの鼻を明かしてやれ。構わん。ファミリーの全実権をお前に貸してやる。この街を取り戻せ。お前に任す。』』ひりで育ててやった恩の一つや二つ返しやがれロメオ』…以上です』

「で、ボスは？」

「それだけ、言い残すとまた眠つてしましました…」

周りは黙つたままでした

兄弟は今にも泣きださんばかりの顔でした

「ボス… 貴方はロメオを… 今でも…」

「うう… ボスウ～ボス～」

自然と私たちに對しての力が緩まりその場から立ち上がる

「だ、そうです。貴方達。ロメオにそう伝えてくれますか?」

いつも通りの様子に戻り
毅然とした態度に戻る兄

いまだに、ひきづっている弟を抱き起す

ボスは

解放されたあとも地面に横になつたままだつた

「ボス…？」

私は心配になり声をかける

するとボスは少しだけ何かを堪えるようにしたあとに言った

「カツカツカ！あのクソジジイは相変わらずだ。オイシイとこだけ
もつていきやがる。かつこつけやがるぜえ…」

そして決意の表情をして真剣な面持ちで起き上がり周囲に向かつて
訴える

「おい！お前ら！聞いたな！！ボスの意志はまだ諦めちゃいねえ！
！それなのにお前らが先に諦めてどうすんだ！！口メオを許せとは
言わねえ！！だが、口メオは確かに生きている。

ここにいる兄弟達のために生きているぜ！！お前らがどう思つか
！！お前らが…お前らがどれだけ『俺』を憎もうとも…。『俺』は
お前らを愛している…まだ…これからだ…。『俺』はクソジ
ジイ…先代ボスの意志を受け継いで立ち上がる…！」

そして、ボスは笑顔でこう応えた

「…すまなかつた。お前ら…待たせて悪かつたな…」

少しの沈黙のあと
みんなの心が一つになつたことを確信したあと

一斉に歓声があがつた。

ボスの後姿…

あれ…？

口…口メオさん…？

なぜだか、ボスの後姿に男性の影を見たような気がした

究極の決断とはいつも時間に追われてこむ

諸君、

僕は予定調和が好きだ

僕はお約束が好きだ

曲がり角の転校生

空から降ってくる異星人

異世界への召喚

修学旅行でのデキドキイベント

夏休みのマル秘旅行

「」まで全部ラブコメ

「」の世のあつとあらわるラブコメが好きだ

だけれども

僕は今、自分が置かれている状況がラブコメにつながらないことをよく知っている

そんなこんなで

久々に自分が語り部となつてメインになれることにとても喜びを感じているのであります

どうも

サルです

もはや、自分で自分の「」と「」になんの抵抗もないの

であった

えっちいゲームなら「デフォルトネーム」というものが決まっていて大概はその名前でプレイするものだ

最近はそういうのばつかだよね？

僕はそんな主人公の風潮に警告をうながすためにこうしてサルという名前に甘んじているのだよ

よくぞ、物語の序盤で

『僕の名前は… 名前を入力してください』

みたいになるじゃん

僕はあれだよアレ

それにしてもや

なんでこんなに出番が少ないの？

仮にも僕が主人公だよ？

あ、主人公なのに全然操作できないじゃん！…とかそういうRPGへのオマージュなの？

なんか、だいぶ時間が空いた氣がするもん。まあ、ちょくちょく語つてはいるけどさ

前々回くら一の回ですっかりHロチシズムに満ち溢れるキャラみた

いに思われるかもしないけど、誤解だよ？

僕は悪くない！！彼女がそうさせるんだ！！

そうね、ここにちやんと説明しなきゃいけないけど

彼女っていうのはエリカさん

そりゃ大人のおねーさんという形容がなによりも正しい

あんな、官能小説から出てきたような艶美な女性がこの世に存在することに驚きです。

ああいうおねーさんだったら、騙されても本望！…みたいな？

ああ…そばにきたら、その香りだけでクラクラしちゃったよ…

そういう考へてると、まりもが僕の膝の上に乗つかつてきた
…こいつといふのもだいぶ慣れてきたというかなんというか
時たまいなくなるけど、ほぼ四六時中一緒だ

最初は落ち着かなかつたけど

なんだかんだ人間つて慣れるもんだなあ…

こいつに監視されているから、僕はあやうく主人公の貞操を保つて
いるようなもので
いなかつたら、もつと鬼畜の所業に出でいたかもしねない
そういう意味では感謝しなければ

「…バー・リトウード」

こいつの意味不明な単語にも少しづつ適応してきた
言葉つてのは意味を成さないもんだ
つまりはハートとハートを…！

ちなみに今のまつもの発言は『細かいことは気にするな。道は自分で切り開け』という意味だ（多分）

まつもが俺のおなかをパンチした

ふははは

その細腕で殴られても僕はさして臉らわないぞ…！

そして、どうしてこのような長い脳内会話をしているかと云ふ

「…暇だ」

そう、暇といひやつだ

僕はベッドに腰掛けながらひたすらに過ぎ行へ時間の無常をこうか
ひじがれているのだ

お姉さん、もといエリカさんは

『私が戻つてくるまではガ・マ・ン　お楽しみは戻つてからねはあ

と』

…と呟つてた…．．．気がする…．．．いや、言つていた…．．．もうこう
ことにしておこう…！

しかし、何もない状況下で待つところのは存外に時間が平等に流れないことを教えてくれる

最初はデギマギしていたけど、こんなにアワアワしていくては自分がそくらんぼ戦士であることが丸わかりだということに気が付いたので百戦錬磨のパラディンであるかの如く振舞つてみたりもした

ワイングラスを片手にバスローブを羽織つて悪の親玉気取りついにをしてみたりもした

しかしあまりにもむなしいのでやめてしまった

う~む

ベッドに寝そべつて、クロロクロしてみると

何で僕はここにいるんだ?
そんなことを考えてみる

こんどこがも分からぬよしような場所で
よく分からぬイベントをこなして

まるで異世界に召喚された一般高校生だ……

はー!

これは凄いじゃないか!!

きっと召喚されたときに何か特殊な力が身についたのではないか!?

僕は起き上がり

両手を胸のあたりに集めパワーを溜めてみる

はあああああ！！我は放つ！！光の

(自主規制)

前方に向けて両手をかざす

⋮ ⋮ ⋮

「枯葉」

「ですよね～！～出るわけないですよね～！～あんな都合の良いこと
があるわけないですよね～！～まりも君！～リアクションありがとう

いつも眠たそうな目をしているまりものあまりにも寂しいリアクションだけが残つた　　はずだった

バ
ン！

「ええっ！ 時間差！？ 僕には発動までの時間差がある攻撃魔法の能
力が…」

なにやら壁の方で大きな音が響いた

隣の部屋からみたいだ

僕はおふざけをやめて恐る恐る入り口の扉を開けて隣の様子を覗う

何やら数人の黒服の男が立っている

明らかに怖い人たちだ

なおも気が付かれないように聞き耳を立ててみる

「オイ!! エリカはどうだ!! さがせ!!」

そこでエリカさんの名前が出てくることに驚く

「クソつ!! あのアマ… なめ腐りやがって…」

「徹底的に部屋の中を探せ!! いなければ… 隣の部屋だ!!」

そういうと数人の男がこちらのほうを向き
すぐさまに隣の部屋に入していく

僕はとつそいやばいと思いでアを閉める

…え?

これはどうしよう

まづい状況なんじゃないか

隣の部屋からがさ入れとも聞こえるような物音

相手はよく分からぬけどエリカさんを探している
そもそも「こはど」?

私は誰?…それはないけれど

圧倒的に情報が足りないことに今更になつて実感する

このまま素直に出ていける勇気は僕にはない

…僕は部屋を見渡す

ここで、サウンドノベル小説やら選択肢のあるゲームならいろいろな状況が出でているだらう

僕もそれにならって箇条書きしてみようか

- 1・何か武器になりそうなものは
 - 2・あそこにクローゼットが…よし隠れよう
 - 3・素直に言えれば相手も分かつてへつるよ…おとなしく投降しよう
 - 4・なにくわぬ顔で外に出て知らぬ顔で通り過ぎてみる
- とりあえず今の状況で僕が思いつく選択肢だ

う~む

そしてこれがサウンドノベルとかならたとえバッドエンドになつてもやり直しがきくであろう
片つ端から選択肢を選べばよいのだからなあ…!

残念なことに現実にはセーブとロードなんて便利な機能はついていないのであった

本当に人生というのはやり直しがきかないものである
こんな機能があればよかつたのになあ

そんな風に考える人間はぼくだけじゃないはずだと思つ

そして、現実はけっして待つていてはくれない。選択肢で時間が停止してくれることもないのだ。そういうしてゐるうちに時間は流れていいくのだ

やばい！

やばい！！

やばい————！！

僕は動搖で自分で考へた選択肢が「いやいやになつていいくのが分かる。

このまま僕はバッドエンド一直線なのであるつか…

思えば短い人生だった

まだラブコメの一つもしていない

高校生になつたばかりだところの…

ああ……着飾つたツンデレお嬢様、真面目なメガネ委員長、おとなしい図書委員の女の子 僕の中に未来の走馬灯が流れる……

僕が過ごすはずだった理想の学校生活^{イハート・ラブ}

……未来の走馬灯なんて流れるのか？そもそも未来の走馬灯っておかしくない？

どうでもいいか

ああ……

何かが僕を殴る

殴る

……？

……殴る？

ハッと我に返ると

まりもが僕を殴つてこないと気が付いた

だから、その細腕では僕には通用しないと……ん？

まりもが何かを引きずるように手に持つていて気に気が付く

僕がまりものほうに顔を向けるとそれをずいっと突き出してきた

そして僕にこう言つた

「…怪人二十面相」

またわけの分からない」とを…

そう言おうとしたが
まりもの行動を読み解く

「…なるほど。でも、それってかなり無理がない?」

それでも強い意志だといわんばかりに僕に向けて、手に持つそれを突き出してくるのであった。

「…分かつた分かつた!! 僕は大事な何かを失いそうだけど、それでいいこう…つて、本当に?」

了承しておきながら、かなり不安が高まる

さうして相手を逆上させるような気がしてならない

いや…でも…

僕はまりもの言わんとする」と一抹の不安…一抹どころかかなりの不安を覚えているが…

ええいーままよー! 一度は言つてみたかったセリフ

「よしーまりも準備をする…手伝ってくれー!」

まりもはまかせると言わんばかりに胸を突き出す
ぺったんこだけど

そんなことを思つてゐるのを察したのかまた殴られた

幼女にぺったんこというのも大概だね

「ヒーリングでサル、一世一代の大勝負に出ることになるのであつた。

以下、格闘娘

怒られた

そりや、ここは病院だもの

当たり前だよね

何が何だかよく分からぬけど

私たちは自分の命の危機を脱したのだ

場所を改めて私たちは集まつていた

どうやら、この街の奪還作戦を行つらしき

ロメオさんの使いとしてボス、私、そしてファミリー代表のルリオ

さんに「マイジ君

そして情報提供者のマルコさん
この5人で話し合いの機会を設けたのだ

「いやあ～、こいつしてまた会えるなんて運命の神様フォーチューン
様のお導きだネ」

「…ハイハイ

やつぱりやかつた

「それで、具体的にロメオはどんな作戦を立案されたのですか？」

「カツカツカ！俺は…じゃなくてロメオはこんな作戦を考え付いた
らしいぜ」

「まつたく～ロメオの兄ちゃんもこんな時でも顔出さないなんて空
気読めって感じだよな～」

「マイジ。ロメオはやむにやまれぬ事情があつて今は顔を出せない
事情があるのです。それに、こうして代理の方を出席されているの
です。確かに無礼とは思いますが…大目に見ましょう」

ギロリとこちらをにらむルリオさん

「ハハハ…」

私はその痛い視線をかわす為に笑うのが精いっぱいだった
何せ、銃を突き付けられた私

その相手とこうして顔を合わせて喋つてること自体がまだ怖い

「カツカツカ！ 本当はお前に会いたくて仕方ねえんだよー。昔からの友人で、大事な家族だ。信じてやってくれ」

「元気にしてるかなあー 口メオ兄ちゃん…」

この一人は本当に口メオさんが好きなんだなあと感じるしかし、口メオさんは何をしているのかよくよく考えれば、この人たちをだましているに等しいのだ

私の良心が痛む

「よし、じゃあ作戦を発表するぜー。」

ボスは大声をあげて仕切る
みんながボスに注目を集める

「作戦はいたつて簡単だ。正面から乗り込んで…ぶつ壊すーー！」

「簡単すぎじゃない！？」

私はいつもたつてもいられなくてツツコんでしまった…

「カツカツカ。まあ落ち着け。まるつきり算段がないわけじゃない。

」

ボスは私のツツコミが予定調和であるかのように応え続ける

「乗り込むのは、本上とルリオ、マイジだ。まあ…乗り込むっての

は語弊があるなあ。正確には話し合ひをしに行く。だな

「話し合ひ?」

「そう、相手だつていきなり抗争に持ち込みたいわけじゃねえからな。どんだけシマを奪われても、古くからここを守り続けるファミリー相手だ。犠牲が〇なわけじやねえ」

「それにしたつて……いきなり相手の本丸に乗り込むのよ? そんな無茶苦茶な……」

私の反応を遮つて、ルリオさんが発言する

「いや……悪くないかもしません。我々はいまやギリギリの状態。そこからなんとかイーブンに持ち込もうとするならば、交渉という選択肢は悪くないのかもしませんね」

「ん~、話し合いで解決かあ~。お互に犠牲が出ないならそれが一番いいよね~」

先刻まで私たちに銃を突き付けていたとは思えないくらいの平和主義な発言

「それで、アナタは何をするつもりですか?」

ルリオさんはボスに向けて言つ

「ん?俺か?俺は別で動かせてもらひつ。それは……悪いがここでは言えねえ。一つ言えるとするなら、この状況をイーブンまで持つていくための秘策だ。それにはチビマル〇の情報収集が必要だからな」

「可愛い子猫ちゃんと一緒にいー？ 僕と秘密のデータをしてくれるなんて光栄の限りだよおー…ヒツ！」

気持ち悪くニヤつくマル口

ボスが笑いながら拳を振り上げると条件反射のように縮こまっていた

「カツカツカ！今回の作戦は誰か一人でも失敗すればすべて台無しだ。うまく歯車がかみ合ってんだよ。でも…お前らを信頼している。絶対に成功するつてな」

私たちは誰も発言するわけでもなくお互いの顔を見合させていた

「絶対成功…させる」

私は一人でこつそりつぶやいた
我ながらすごいバカだと思う

でも、今までの自分では考えられないほどうまく言えないけど高揚感みたいなものがあった。

「それで…お前に詳しい話をしておくとだな…」

以下、作戦伝達終了

「…」んなところだ。大丈夫かあ？」

そういう終わると扉をノックする音が聞こえた

「どうぞ。」

ルリオさんがそう言つと
部下の一人が息を切らしながら入つてきた

「失礼します！」

「どうかしたのですか？」

「偵察班からの連絡です。『敵対ファミリー幹部エリカ行方不明』
とのことです。 いまだに情報はつかめず。 潜伏先も分かつていませ
ん！」

私たちは色んな思惑が交錯するなかに立つていた
そのことに私たちが気が付くのはもうちょっと後だった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0406v/>

放課後に帰宅部で青春で

2011年12月25日12時55分発行